「又例の人間違ひをやつてるんだな。其樣事よりか、お兼さん賴むぜ。」
「お兼さん。用心しないと不可いよ。佐藤君の眼附を御覽。可哀想なもんだ、」と客は二人連らしくドヤ〳〵と二階へ上つて行つた。
お絹は客へ出す茶器を茶棚から取出した後、火鉢の傍へ夕飯の膳を持出してお浪と差向ひながら、急いで箸を取上げた。お兼は茶盆を持つて、再び二階へ上り、
「今直きに參りますよ。お絹ちやんが入れたお茶ですから、佐藤さん。味が違ひますよ。」
「どれ。其奴は有がてえ。」と一人は直ぐ茶碗を取つた。
何れも銀座邊の商店か或は小さい銀行へでも勤めるらしい、二十七八の男である。
「お兼さん。佐藤君がね、今夜は何でも彼でも、一件を纏めて貰はなければ承知が出來ないと云ふんでね……最う氣が違やしまいかと、僕は傍でハラ〳〵爲て居るんだ。」
「はゝゝゝ。まさか……其樣奴も無からうが。」と佐藤と云はれた男は笑ひながら煙管をはたいたが、至極眞面目にお兼の顏を眺めて、「然しお兼さん。最う好加減に話を纏めて呉れても可さ相な時分ぢや無いか。お兼さんも何だか賴みがひが無いね。最う隨分お百度參りをしてゐるぜ。」

「眞實に、其れは私も能くお察し申してるんですよ。だけれどもね。佐藤さん。少しは私の方も察して下さいよ。」
「何を……？」
「何をつて、貴下。此れがね、烏渡でも男の事を知つてるんだと、直ぐにも話が出來るんですけどもさ。何しろ、貴下、まだ彼の通り、全くの手入らずなんですからね……。」
「其れだから、此方もお兼さんに無理を賴んだんだ。最初に怖がらし了つちや爲樣が無いと思つて、其處は女同志だけに何か好い機會をして貰はうと云ふんぢや無いか。」
「おい〳〵、佐藤君。まアお酒でも貰はうぢや無いか。承知して覺悟してるとは云ふものの、お樂しみの御相談を呆然指を喰へて聞いてるのは、些と難義だからね。」
「はゝゝ。此ア失敬。お兼さん、其れぢや一ッ熱いのを附けて來て……ゆつくり相談に乘つて貰はうよ。お禮は幾何でも爲る。」
お兼が酒を取りに下りて行くと兩人は云合した樣に顏を見たが、佐藤は幾分か氣掛りだと云ふ體で、煙管を指先で弄びながら、
「どうだらう、巧く遣つて呉るか知ら。馬鹿に氣を揉ませるぢや無いか。」

「はゝは。君も隨分好奇だなア。僕は最う呆れ返つた。」
「傍から見ちや然うかも知れないよ。然し、君。初物の味は格別だ。罪だとは思ひながら、一度目星を附けたが最後だ、何うしても謀反を起さずにや居られ無いんだよ。如何だ斯うだと云つてる此の心配が、又此れでお樂しみなんだからな。」
「爲樣の無え男だな。僕なんざ、賴まれても其樣手數の掛る奴は眞平だ。何でもおいそれと眼附で直ぐと呑込んで呉れる樣で無くつちや氣に入ら無いんだが、流石は半玉屋の隊長だけあつて、一風變つた事を被仰るね。」
「半玉屋とは驚いたな。はゝはゝは。」
「だつて、然うぢや無いか。僕が知つてる半玉ばかりでも十人近く罪な事を爲てえるぜ。まだ碌に色情も付かない樣な娘と來た日にやア、最う幾人だか數へられまい。怖しい非々だなア。はゝゝは。」
「おい、君。誰か上つて來るよ。」
「何に大丈夫聞えるものか。」と云つたが、同じく襖の方を見返ると、輕く梯子を踏む足音と共に、軈て襖を開けたのはお絹である。

「や、今夜は又、馬鹿におめかしを爲てるぢや無いか。何處の姉さんかと思つて喫驚したよ。」と佐藤は早や眼を細くして其の姿を目成つた。お絹は恥しさうにほんのり顏を赧らめながら、默つて銚子を載せた膳を、其の儘食卓の上に置いたが、漸く氣が付いたと云ふ樣に、
「佐藤さん、お酌しませう。」と如何にも初心らしく、持難くさうに銚子を取上げた。
「おい佐藤君。最う大丈夫だ。到頭物にしたな。」
「何を云つてる。」と佐藤は叱る樣な目付で制して、「絹ちやん爲樣が無いんだよ、僕と絹ちやんとは人目を忍ぶ好い仲だつて。迷惑だねえ、其樣事を云はれちや……」
お絹は只だ眞赤な顏をして、呆された樣に二人の顏を見た。
「絹ちやんの方は、迷惑だらうけれど、私は虛言にも然う云はれるとねえ……絹ちやん、お聞きな。其樣に恥しがらないだつて、はゝゝは。其れぢや、さア、私のお猪口だけでも。お酌して上やう。」
「あら、頂けないんですよ。」と云つたが、餘儀なく酒杯を受取ると、佐藤が酌をする間に、他の一人は突然席を立つた。

「小島さん。何方……？」とお絹が喫驚するのを、
「便所だよ。分つてるから一人で可い。」と小島は最う足早に梯子を下り掛けた。
「絹ちやん。私の思差しだから、グッと干して御覽よ。」と佐藤は今更らしく娘の顏を眺めた。
「だつて……。」とお絹は漸と一口して、「眞實に苦味いんですもの。」
「其れぢや、私が助けて上げるから、もう一口……。」
「其樣事云はないで。佐藤さん。わたし、眞實にお酒は頂けないんですからさ。」と男の機嫌を伺ふ樣に、其の顏色を見ながら恐る〳〵酒杯を下に置いた。
「眞實に可愛い顏をして居るねえ。絹ちやんは……。」と男は突然お絹の手を取つて、グッと引寄せながら頰摺りを爲樣とした。お絹は喫驚しながら餘りの恥しさに最う聲も立て得ない。
「可いぢや無いか。ねえ。些とは男の心も察しるもんだよ。私は眞實に焦れて居るんだ。如何したら可いだらう。」
抱寄せる樣にお絹の肩へ手を廻して、俯向く其の顏を覗き込みながら、だん〴〵に近く

頰を摺寄せる。
「最う……後生だから、誰か上つて來ると大變ですからさ。」
「だから、今の中……私の心は云はないだつて分つてるだらう。」
抱すくめられる苦しさに、お絹は物を云ふどころか、最う息さへつけぬ程であつたが、幸ひ梯子段に足音が爲たので、男は漸く肩へ廻した右の手を取つたものゝ、猶大膽に片手では堅くお絹の手を握締めた儘、襖の方を振返つた。便所へ行つた一人の客と思ひの外、襖を開けたのはお兼である。

第十七

女中のお兼は斯くて怖しき陰謀者となつた。一夜お絹を取持つならば、望み次第の祝儀を出さうと云ふ客は、此の佐藤の外に二人三人と續々現れて來るので、お兼は最う目の前に下つて居る此の大な利益を如何して其の儘捨てゝ置く事が出來やう。長らく暗黑な生活を營んだ女だけに、巧な辯才と機智とを持つて居る處から、お兼は能くお浪の目を晦まして、到頭佐藤の望みを遂げさしたのを手始めに、有る限りの才能を振つて、娘のお絹をば

立派な賣淫婦に仕立て上げた。その結果として此の惡魔は確かに多くの利益を得た。何時の間にか純金の指環をさへ買求めた程の成功を奏したが、夏も早や八月の末、更けて來ると何處とはなく秋らしい肌寒さを感じる或る夜の事、お兼は下座敷の客の席へ出て、お酒の相手をして居たものゝ、漸く居堪まれぬ程な心遣ひを感じて來た。

夫れはお絹が、此のお客の席へ招ぐべき藝者の口を掛けにと、最う彼れ此れ一時間も前に、見番へ行つたなり歸つて來ぬと云ふ事である。客は酒の醉と共に怒り出す、姉のお浪は稍眼色を變へて氣を揉み始める。然し暗いお兼の身になると途中で怪我でもしたと云ふ樣な、不時の災難に出遇つた抔とは思はないだけに、若しや馴染のお客に摑まつて、前後の考へ無く、料理屋か宿屋へでも行つたのでは無からうか。流石のお兼も最う堪らなくなつて、其の儘、お絹を捜しにと戸外へ出て行つたのである。

月は無かつたけれど、鮮明に銀河が流れて居る空の明りで、お兼は先づ目的もなく、暗い河岸通りから、新富町の方へと眼を皿の樣に息せきと歩いて來たが、すると向ふから、小走りに下駄を鳴らしながら馳けて來るのは、誰あらうお絹である。

「まアお絹ちやん……」と狡猾な惡魔も流石は最う半分泣聲に叫んだ儘、暫くは何とも云

へなかつた。

「迎ひに來たの？　濟まなかつたよ。ついね。あの……知つてる人が居たもんだからね。」

「冗談じや有りませんよ。眞實に。御覽なさいな、汗全濡になつて、今だに動悸がして居ますよ。」とお兼は胸へ手を當てゝ、大な溜息をつき、「見番へは行つて下すつたんですか。」

「あゝ行つたよ。」と頷附いたので、お兼は漸く歩み出しながら、

「お絹ちやん。一體、誰樣に遇つたんです。」

「あの、雪坂さんさ。」と少し俯向いたが、「眞實に好い男だわねえ。些とも藝人らしか無いし……。」

「まア、お絹ちやんも驚い了つたよ……何處で遇つたんですよ。」

「あの煙草屋の横町でね、此れから何處か遊びに行かないかッて、然う云ふんだけれども夜は家が惡いからね……眞實に口惜しかつたよ。」

「ほゝほゝ。其れぢや、お絹ちやんはお樂しみだつたけれど、私は最う眞實に如何しやうかと思つてたぢや有りませんか。寧そ家へ逃れて來れば好いのに……。」

「だつて、其れア無理だよ。其樣事云つたつて……。」とお絹は幾分か鼻聲になつたが、最

う夢中で家の格子戸近くなる迄、雪坂の噂を云續ける。雪坂と云ふのは二三箇月前、大阪から來た紫紅團と云ふ新俳優一座の部員で、技藝なぞは云ふに足りない中通り以下の役者ではあるが三四度待合這入りをした處から、墮落したお絹は輕薄なる戀の爲めに早や其の心を惱して居るのであつた。

此の夜の事は然し家へ歸つてから、何うか此うか口實を設けて、お浪の手前を作つたが、お絹は其れからと云ふもの屢大膽に姉の眼を盜んでは外出する樣になつたのみならず、最早や以前の樣に、眞目々々しくは働かぬ樣になつて、姉から小言でも云はれる時には、却つて我儘な反抗をさへ爲る事がある。お浪は今更の樣にお絹の樣子の變つたのを怪しんだけれど、然し其れ程にまで墮落して居るとは心付かう筈が無いので、暫く其の成行を見た後、機會を待つて嚴しく意見を爲樣と心を定めたが、兎角する中お浪は人の事よりか自分の身の上に物思ふ事が多くなつて來た。それは旦那の利兵衞が、先月、先々月あたりから、不思議に足が遠くなつて、今月になつてからは、全く消えた樣に影も見せぬ樣になつた事である。

今、營業は以前に變らず繁昌して居る所から、よし利兵衞から見捨てられたにせよ。生活上には最早や其れ程の恐慌を來さずとも可い。

然しいよ〳〵其の保護者から見離されるのかと思ふと、流石云はれぬ心細い氣がして、お浪は終日鬱ぎ勝になつた。

無論怠らず手紙を出したり、或時は窃に使を其の家へ遣つて見たりしたが、何のかひも無く、何時も商賣が急しいから行く暇が無いと云ふ返事ばかりである。餘儀なくお浪は、自身に出掛けて行つて、其の樣子を伺ひ、其れとなく將來の話も聞いて見ずば成るまいと、漸く心を決したが、或日の朝、何心もなく新聞を見ると、「散紅葉弗旦氣質」と云ふ表題で、自分の身上と利兵衞の關係から、此頃旦那は葭町の藝者林屋の鶴子と云ふのを引拔いて向島へ圍つて居ると云ふ顚末が面白げに記してあつた。お浪は最う利兵衞に會つて兎角の話を爲る必要が無いと思つた。然し最初待合を始める時に萬一利兵衞が何の誤りもないお浪を、只一時の浮氣から見捨てる樣な場合には、待合は其の營業の名前通り永久お浪の所有にすると云ふ外に、其時の都合では相當の手切金をさへ渡すと云ふ、利兵衞からの約定もある處から、此れは矢張如何かしてなりと一度は利兵衞に會ふ方が可いと、長い手紙を書いて遣つたが、何時もの通り其の中に行くからとの簡單な返事である。

餘りの仕方と流石は口惜しく、お浪は翌日の午後、髪を立派な丸髷に結ひ、美しく化粧を凝した後、車を命じて、蠣殼町なる利兵衛が本宅へ押掛けて見やうと決心した。

「御免下さい。」と慮めずに小締りした格子戸を明けると、四十ばかりの、何も彼も心得顔な女中が、取次ぎに出て來て、お浪の樣子を見ても一向に怪しむ氣色もなく平然と座敷へ通して、折好く在宅して居た利兵衛に會はして呉れた。利兵衛は以前に變らぬ快活な話振で、白髮の頭を振りながら、大く笑ふのであつたが、然し、家では流石に話しが爲にくいと云ふので、近い藥師の境内の草津へ行く事となつた。

此の料理屋の一間で、お浪は利兵衛の差す酒杯を受けて居る中、早くも眼元を赤くする程に醉はされたが、扨て、漸くの事で緊要な話を云ひ出したのである。すると利兵衛は最う其れ等の煩い話は聞きたく無いと云はぬばかりに、始終お浪を戯弄して了はうと爲るので、お浪は心を焦立てながら、遂には語の調子をさへ高めたけれど、到底纏つた話をする事は出來なかつた。然し、已に心を他へ移した利兵衛の胸中は、自然と醉うた語の中や其の樣子に現れた。お浪は最早や多く物云はず、只だ利兵衛の差す酒杯をグビ〳〵と飲干して居たが、酒は只だ苦味いばかりで、少しも醉を發しない。座敷には何時か灯の點いた頃、

何となく淋しい心持で悄然として利兵衛を後へ殘した儘、車に乘つて歸つて來て、長火鉢の傍へ身を下すと、急に眼が廻つて來て堪え難い頭痛を感じた。

到底も身體を支へて居る事は出來ないので、お浪は倒れる樣に横はると、激しい醉は一時に發して來たのか、軈て昏々として寐入つて了つたが、ふと喧しい人聲を聞付けて、漸く枕から顏を起した。

始めて我に返つて、四邊を見廻すと、其處には母親のお慶と娘お種、女中のお兼と其れに何時もは決して出て來た事の無い父親までが、額を突合して坐つて居た。一人見えないのは妹お絹の姿である。

「お浪。お絹が行衛知れずになつた……。」と父親はお浪が起上つたのを見ると、最う泣出しさうに聲を顫して叫んだが、母のお慶は幾分か沈着いて居て、

「夕方まだ明い中にお湯へ行つたなり歸つて來ないんでね。先刻から二度ばかりも、お兼が其の邊の心當りを搜して呉れたのだけれど……。」と先づ其の事實を告知らした。

「お神さん……。」とお兼も餘儀ない樣に、膝を進めて、「最う其の中には歸つてお出なさるだらうと思ふんですけれど……屹度、何處かで、お馴染のお客樣にでもお會ひなすつて、

其の儘寄席へでもお出でなすつたのぢや有りませんか知ら。」

「さうさね。」とお浪は長い眠りから覺めた眼に、明るいランプの光を避けるが如く稍其の顏を俯向けたが折から早や一時を打つ時計の音に、今更喫驚して鋭くお兼の顏を見返した。

第十八

父親義之助が終日穴倉の樣に其の身を閉籠めて居る四疊半の一室と云ふのは、勝手の板敷とは僅に煤けた障子一枚で境ひされてある。竈の烟は自在に其の隙間から入つて來るので、天井板や柱や壁などは皆眞黑に煤けて居る。陰欝な汚い壁には、三尺程の小窓が切つてあるが、其れさへ隣家の建物が密接して居る處から、室中は何時でも夕暮より猶薄暗いやうに思はれるのである。

お浪は最初、兩親を迎へた折、狹い家中では適當なる室が無い處から、先夜の中、此の一間を寐る丈けの室として、晝間は客も來ず寂として居るので、帳場の長火鉢へ坐る樣にと父親に其の旨を話した。一月ばかりの間は其の通りに、寢る時だけ、この室へ歸つて行くのであつたが、次第に老人は食事の時の外は帳場の方へは出て來ぬ樣になり、軈ては其れさへ止して了つて、今は此の陰欝なる寢部屋の中に、寒い冬をも熱い夏をも全く其の身を閉籠めて了つた。折折咳嗽する外には、何一つ物音さへ立てぬので、眠つて居ると云ふよりは、最う死んだのか生きて居るのかと氣遣はれる程であつた。お浪は心配して、母親に相談したり、或は自分からも屢〻忠告して見たけれど、老人は其の時だけ只だ頷付くのみで、矢張明い室へは出て來ない。田舍に居た時分、他愛なき遊相手であつたお絹の口から勸めたならばと、種々手段を盡して見たが、然し老人は如何云ふ事か頑固にも遂に其の勸めを聽入れぬので、お浪は今は只だ爲す儘に任して置くより爲樣が無くなつた。母のお慶は稍呆れた樣に、

「人達が折角何かと心配するのに、眞實に腹が立つぢや無いか。」と舌を鳴らして呟いた位である。

老耄した義之進とは反對で、母のお慶は、田舍に居る時よりは却つて若く活潑になつたかと思はれる。毎日食事の菜を煮るやら、其の時々の衣服を仕立てるやら、小學校と三味線の師匠へ行くお種の世話をするやら、今年は最う五十も半ばを越して了つたに關らず、腰はまだ眞直で、眼は針仕事するにも決して眼鏡の必要を感ぜぬ程である。出入の多い街

の生活は、却つて此の老婆には興味あるものと思はれたらしい。

お慶は出入する藝者や其の他の女を始め、見番の若者や八百屋魚屋抔とも、何かにつけて面白さうに笑ひ興じる。

さうして何時となく酒をも呑む樣になつて、折々夕餉の膳には、お浪と一緒に客が飲殘しの銚子を傾ける程にもなつた。

老人は斯くて一家内とは全く別者になつて了つた。

お浪と母親とは其れでも毎日食事の膳をば交々に運んで行くので、全く顏を合はさぬと云ふ事は無かつたけれど、お絹は客の座敷の急しい時なぞには、二日も三日も、彼の陰氣な老人の室へは其の姿を見せぬ事が度々ある。

寂しい寺住居の時分には、お寺の三毛猫と共に、この無垢の乙女は、半時とて離れた事の無い老人の遊び相手であつたのが、今では、浮れ男と戯れる面白さに、最う死せるが如き老耄を顧みて居る暇は無くなつたのである。

お絹は飄然と夕方の風呂へ行く振で、出て行つたなり、其の夜は到頭歸つて來なかつた。お浪も母親も無論、一夜を心遣ひの中に明したのであるが、扨て、父親義之進はと云ふと

此はいよ／＼發狂したのかと思はれる程な樣子になつた。翌朝にはお浪と母親とは娘の家出よりは、却つて父親の方が心配になつて了つた位で、語を盡して漸うに老人を云宥め、一先暗い四疊半の間へ連れて行つて其の心を靜めさせる樣にした。然し、其の日も已に暮れ近くなつたが、お絹は猶ほ歸つて來ぬ。早くも二日三日と過去つた。

お浪は寧そ警察へ捜索願を出さうかと思ひながら、最う少時したらと躊躇ふので其の日其の日と延引して行く中に、父親の樣子は屢ゝ物狂しい程になつて、睡眠中に、折々大い聲でお絹の名を呼立てる事がある。或日、お浪は夕飯の膳を陰欝な一間に持運んだ時、母親と共に老人の傍へ坐つて給仕をして居ると、老人は何か感じた樣な調子で、お浪と母との顏を眺めながら、

「お絹はもう、到底歸つては來まいのウ。」と箸を置いた。

「歸つて來ないなんて、其樣筈があるもんですか。何處と云つて、然う何時までも宿つてる樣な家は無いんですから、最う二三日したら屹度歸つて來ますよ。」とお浪は例の氣安めを云ふのであるが、老人は首を振つて、

「何に、お絹は最う歸つて來はせん。お前達は私に氣を落させまいと種々に云うて呉れる

けれどな、私はもう、お絹は歸らんものと諦めて居るんぢや。」と大な溜息を吐くのである。

お浪は如何かして云ひ慰め度いと思つたが、折から格子戸の開く音がして、二三人連の客が來たらしく、騷がしい聲が聞えたので、止むを得ず其の儘帳場の方へと出て行つた。

お兼一人で俄に手が廻らなくなつた處から、お浪も客の席へ銚子を持運んで、暫く冗談の相手をした後、長火鉢のある六疊の間へ歸つて見ると、其處には娘のお種が、先刻から釣洋燈の下で一人靜に、讀本の下讀をして居るばかり。母親は猶ほ四疊半の間で、父親に向つて何やら頻に云ひ續けて居たが、其の聲は何處やら激昂して居るらしい語調である。父親が餘りに分らぬ愚痴を云出した處から、氣短な母親は遂に氣色を損ねたのであらう。お浪は煤けた入口の障子を開けて、

「如何したんです。阿父樣……。」と其の傍へ坐つた。

「お浪や。」と母親は少し膝を進めて、「阿父樣がね。田舍に居た事なら、お絹は那樣譯には なりやア爲ないのだと斯うお云ひなさるんだよ。何ぼ何でも餘りぢや無いか。此れ迄に種種苦勞をしたお前が聞いたら、定めし好い氣は爲ないだらうと思つてさ。私はくれ〳〵も今然う云つてた處なんだよ。」

「お浪や、阿母樣は那樣に云ふがなア、お浪や、お前は惡く思ひはせまいなア、實際、私は然う思つてるのぢや。田舍にさへ居た事なら、お絹坊は私の傍を離れはせん。何時までも私と一緒に遊んで居たに違ひない。なアお浪や、然うぢや無いか。」と父親は答を促す如く其の顏を力なくお浪の方へ向けた。

お浪は只だ當惑して何とも云得ず、下を向くより爲樣がない。流石の母親も呆れた樣に、最う默つて了つた。俄に人聲を絶した狹い室の中は、踏臺の上に載せられた三分心の洋燈に照されて、晝間よりも猶さら薄暗いやうに思はれたが、窓の障子を侵す秋の末の冷い夜氣と、喧しい程なる蟋の鳴く音とで、ふと氣が附いて見ると、夜は忽ち更けて居る樣な心持がするのであつた。

「お浪や。お絹はな、田舍に居さへすれば、何處へも行くものか。田舍に越した事はない。なアお浪、お前も此樣家業を止してしまつて、早う田舍へ歸るが可い。私はやつぱり田舍が好きぢや。」

又も答を促す如く、其の首を差伸すのである。

斜めに黃い洋燈の光を受けた其の容貌は、もう此の世の人とは思はれない。汚い頤髯と

頭髪とは蓬々と荊棘の様に亂れて居る。肉落ちて皺だらけの皮が弛んで居る頬の上には、頬骨が高く現れ、眼は次第に落凹んだのみか、白眼が濁つて瞳子が鈍くなつて居る。頬骨と同じ様に、下腮は著しく突出して居たが、唇は盡く齒の脱け落ちた爲めに、口の中へ捲れ込んで恰も節穴か何かの様に見える。この穴の底からは、哀れむべき老人の生命が絲の様な一縷の呼吸を續けて居る。その度毎に上下の唇は丁度魚の口の如く、可笑し氣に開いたり閉ぢたり爲て居る。此れが限ある人の生命の避くべからざる最後の有様であらう。

お浪は毎日其の顔を見て居たけれど今夜程痛しい父の容貌に接した事は無かつた。殊更に其の後の煤けた壁の上に蟠まつて居る眞黒な影を振返つて見た時には、譯もなく只だ物怖しく最早や何と云慰める語さへ無い。折からお兼が用あり氣に呼ぶ聲を聞附けて其の儘逃げるがやうに、明い室の方へと出て行つた。

母親はお浪へ對して、老人の云つた語を頻と氣の毒に思つたらしく、次の日火鉢の傍へ坐り合した時、老耄した父親の云ふ語なぞは決して氣に掛けぬ様にと、くれ〳〵も繰返して云つゞけた。然し、お浪は如何かして父親の心を安める様に縱へ嘘にもせよ、何とか巧にお絹の消息を云拵へるに如くは無いと思ふので、

「阿母様、最う十日ばかりに成るんぢや有りませんか。私は、まさか生命に別條のある様な事は無いだらうと思ふんですけど、最う此れまでになつても歸つて來ない處を見ると、放棄つちや置けませんからね、最う一日待つて見て、いよいよ歸つて來なかつたら、爲方がないから警察署へ願ひ出る事にしませうよ。」

「さうだね。最う其れより爲様がないのかね……。」と二人は例の如く溜息を吐き合ふのであつた。

其時突然郵便と云ふ聲がした。

世の中に知己と云ふものは殆ど無いお浪の身には、眞實珍らしい郵便と呼ばれた聲に、お浪は譯もなく胸を躍らして、格子口へ馳出で、一通の手紙を受取つて歸つて來たが、今迄に見覺えた事のない男の手跡である。不思議さうに封を切つて見ると、極く短い手紙であつたが、お浪は忽ち顔色を變へて、

「阿母様。お絹の事です、お絹の事です。」と叫んだ。母親は奪ふ様に手紙を引取つて見たが、此れには、實に意外なる人の手に因つて意外なる娘の消息が、甚だ簡單に報告されて有つたのだ。

お絹は老いたる兩親をも、情深き姉をも顧みる暇なく若い俳優の美しい手に縋つて遠く大阪へ出奔して了つたのである。

母親は手紙を膝の上に投落したまゝ暫くは呆然としてお浪と顏を見合したが何一言も云はずに、唯だハラ〳〵と涙を落した。

「阿母様！」お浪は突然母親の手を取つて「阿母様、無理は有りません、阿父様の被仰つた事は無理ぢや有りません。お國にさへ居た事なら、お絹は全く此樣不孝者になれア爲なかつたんです。」

繁華なる都の生活、それは遂に平和と幸福の樂園では無かつた。お浪は口惜しい樣な腹立たしい樣な、一種の深い感慨に沈められねば成らなくなつた。

第十九

返す〳〵意外なる妹の出奔はやがて姉なるお浪の身には大なる打擊となつたのだ。いよいよお絹は歸らぬものと諦めをつけた一家の絶望を目擊すると、此に流石のお兼も何となく怖しい心持がして、自然と此家には居辛くなつたのであらう。事情を知らぬお浪が頻りに引止めるのも聞入れず、遂に逃るが如く暇を貰つて何處へか行つて了つた。

何時も家中を賑して居たお絹とお兼の二人までが一時に居なくなつて見ると、今更驚かれる程家内は火の消えた樣に、思掛ない淋しさが目立つて來る。其れと同時に、最早や利兵衞との關係も全く切れて了つた事なぞを思ひ起すと、内外にお浪は唯た一人身の、云はれぬ心細さを覺えねば成らぬ。新に雇入れた女中の間に合はない事や、お絹を贔屓にしたお客の幾人かは忽ち影を隱した樣に來なく成つた事なぞから、景氣一ッで持ち堪へて居る營業は、此樣事から遂に一頓挫を來しは爲まいかとお浪は唯氣ばかり揉むのである。其上に哀れな父親が其後も絶えずお絹の事を云出す繰言を聞くと、最う種種な心配が重り合つて遂には何を考へて可いものやら途方に暮れて了ふ。思ひ出すと此の待合營業を始めてから最う三年になる。其の間實に一日とても忘る事なく、殆ど身を碎かぬばかりに能く勤め能く働いたが、其の結果は何であつたらう。愛らしい妹の墮落と老いたる父親の激しき失望と此れ等の悲しい物思ひの外に能く何物を與へて呉れたらうか。次第々々に此の待合と云ふが如き暗黑なる祕密の營業に對して、少からぬ嫌惡の情を感じて來たが、扨て今日の境遇では差當り他に一家を養ふ生活の方法は無い。お浪は果しもない煩悶の結果、空しく

疲勞と倦怠に沈められた不愉快なる幾日かを過すこととなつた。

十月も最早や半ば過ぎである。ふと數へて見ると、今日は丁度不動尊の緣日に當つて居る。毎月缺かした事なく、營業の繁盛を祈る爲めに、月の上旬には羽田の穴守稻荷、月の下旬には深川の不動尊へと必ず參詣に行くのであつたが、今は何となく其の元氣さへ消え失せた樣に思はれる。午後も疲て四時を打つ時分にお浪は漸く思直したと云ふ樣に、給の羽織だけを着換へて、懶氣に表の格子戸を開けた。傾き初めた秋の日は、長い築地の河岸通の上に、燦爛たる黃金色の光を投げてゐる。冷い風は河岸に並んだ柳の葉を吹き拂ひながらも往來の砂を飛す程には激しからず、そよ〳〵と顏の上に流れて來る心持。家に閉籠つて居る時よりかどうやら心の晴れるやうな氣がした。

お浪は時々辻車の車夫から聲を掛けられたけれど、其の儘振向きもせず、此の晴れた麗しい日影の中を最少し歩いて行かうと云ふ氣になつた。恰も學校歸りの子供が道草でもする樣に、何時か知ら、新富町を過ぎて、八丁堀の河岸近くへ來て始めて車に乘つたが、深川の不動尊までは可成り距離がある處から、參詣を了つた後、再び境內を出た時には、夕陽は正に沈まうとして居る處であつた。

けれどもお浪は、さして心急く樣子もなく緣日商人が境內から仲町通りへと並べ立てた露店の賑ひや、軈て灯を點し初めた左右の街の景況などを、物めづらし氣に眺めながら又ぶら〳〵と歩いて永代橋へ差掛つた。夕陽の名殘も今はわづかに遠い向ふ岸の空の果に漂ふばかりになつて、蒼然たる暮烟は次第々々に洋々たる河面を立て置めやうとしてゐる。

長い鐵橋の欄干には既に電氣燈が輝いて居る。かすかに夕の星影も三ツ四ツと、憂鬱な蒼白い空から燦き初めると、廣漠たる河口の空を遮る佃島や石川島の建物、さては兩岸に立連る人家の屋根は、等しく暗い夜の影の中に沈まうとして、新しい燈火の光は殆ど數限りなく、水の上に流れた。林の如く帆柱を連ねて碇泊して居る帆前船からも、同時に靑い色や赤い色の灯が、或は高く或は低く、恰も美しい花火を見るやうに散亂する。お浪は今、丁度橋の半程まで行き掛けながら、立止るとも無く、自然と欄干の傍へ佇立んだ。

全く何心なしに唯だ此の美しい景色に見惚れたのであるが、偶然にも忽ち思起したのは早や幾年かの昔、遠い故鄕の地を離れて、深川の遊廓へ身を沈める爲め、初めて此の長い鐵橋を渡つた時の事である。其の場合の心持は如何樣であつたゞらう。丁度今宵の樣に燦爛たる燈火に飾られた河波が海から吹き附ける風につれて石臺に激する音、汽船の笛の音、

さては橋板を轟かしつゝ我身を載せ行く車の響なぞ、其れ等は今も猶明かに耳の底に殘つて居るやうに思はれる。故郷から出て來た母親に東京見物を爲せた時の歸途も、矢張此の美しい夜の灯を見た。幾多の遊蕩者に連れられて、幾度か劇場や溫泉場なぞへ行つた時。最後には白髮の相場師に連れられて、遊廓を出た時。入舟町へ預けた娘の顏を見に行つた其の時々――過ぎた生涯の出來事は、必ず自分をして此の長い橋を渡らせた。欄干の外に首を差出して見ると暗澹たる橋の下に大河の水は滔々として盡る事なく、海の果の何處へ流れて行つて了ふのであらう。お浪は今日までの生涯と此の橋の景色との密接なる關係を思起すに從つて何となく長い一生の運命を支配する怪しき力が此の水の底に潛んで居るのでは無からうかと、語には云へぬ陰鬱な空想が胸一ぱいに湧起つて來るのを覺えた。水の底に潛んだ運命――其れは意味なく唯だ悲しく冷たく暗いものであるやうな氣がした。

海の方から濕つた重い鹽風が、丸髷の鬢の毛を散々に吹き亂すと共に、夜露が蕭々として音せぬばかりに衣服の袖を濕らせる。漸く橋を渡り了ると、お浪は非常な遠路に疲れ果てた如く、ほつと深い溜息を吐いた。到底最う一町と歩む勇氣さへ無くなつて、其の邊の車を呼ばうと橋袂に設置された自働電話の前に佇立んだ。すると其の時、バタリと電話の

扉を開て出た二人連の男がある。

お浪の姿を見るや否や、

「やア、お神さんぢや無いか。」

「お浪さん、何處へ行くんだ。」

共々喫驚して聲を掛けた。

「おや、お揃ひで……大變な御元氣ですね。」とお浪も意外らしく、自働電話の燈火で二人の顏を見上げたのである。何れも兜町あたりの若い人らしく、帽子から駒下駄まで流行の粹を盡して居る。

「大分御無沙汰を爲了つた。實はね、此れから洲崎までお月見と云ふ趣向なんだが其の邊までお附合はどうだね。」と云ふと、他の一人は忽ち思ひ附いた樣に、

「お神さん。今夜は十三夜だ。何にしても是非附合つて貰ひたいね。お神さんと一緒に繰込めば大ゐばりだからな。」

「さう〳〵。お神さんは洲崎に居た事があるんだな。其奴は奇妙だ。お浪さん、お願ひだから一ッ是非附合つて呉れないか。」

「ほゝゝほ。」とお浪は笑つたが、「何方がお馴染なんです。」
「大八よ。極つてらア。」と男は最うそろ〳〵歩み掛けたので、詮方なくお浪も再び橋板を踏んだが、少しく當惑した樣子になつて、
「小林さん。私は廢業したッきり洲崎へはまだ一遍も行つた事が無いんですからね。何だか氣まりが惡いぢや有りませんか。」
「何、構うものか、自由廢業や何かしたんぢや有るまいし、立派に出たんなら大ゐばりぢや無いか。」
「其ア然うですけれど、此樣不斷着のまゝで出て來たんですしね、何だか手ぶらで行くのもねえ……。」
「いゝよ。其樣事は僕が心得てるから、其れぢやア先ア お茶屋までゞも可い。是非附合つて貰はなくッちや……。」と他の一人が云つた。
「其れぢやお茶屋までに爲ますよ。」
男連れは大よろこび、
「結構々々、お茶屋までゞ、結構だ。君、向ふを見たまへ。どうだい。最う月が出るぜ。

好い景色ぢやないか。」
空は星の光と共に澄渡つて、少し楕圓形な柚色した月は、何時の間にか水を隔てた人家の屋根の上に現はれて居た。
「あゝ、眞實に好いお月樣ですねえ。小林さん、今夜は十三夜なんですッて？」
「さうさ。此頃はお互に發句を遣つてるからね、馬鹿に風流氣が出るんだ。君。此のお月夜ぢや、車に乘ッ了ふのも殘念だから、一ッ舟で行つて見たいな。お神さんは如何だ。」
永代橋を渡り了ると。十三夜の月は全く屋根の上を離れたので、深川の街は早や水の樣な美しい光に照されてゐる。不動前の小い板橋を渡つて右手の暗い河岸へ出て其處から三人は早船に乘つた。
お浪は一時心は決めたものゝ考へて見ると、今夜突然遊廓へ這入つて娼妓時代の古い知人に顏を合せると云ふ事は、矢張何となく面伏な氣がして成ら無いのだ。何時もならば出來る丈けの愛嬌を振りまいて話をするのであるが、今は男の方から冗談を云ひ掛けても、只だ餘儀ない樣に微笑むばかり、果ては稍俯向いて了つたが、再び顏を上げると、何か思起した樣に、

「小林さん。お茶屋は何處です……河内屋ですか。」
「其の少し先……菊泉だ。」
「あら、さうですか。女中なんぞは最う皆な變つ了つたでせうねえ。」
「さうさな。お常ッて云ふ小作の女は、お浪さんも知つてる筈だ。最う七年ばかり居るんだつて、此間もさう云つて居たッけ。」
「あゝ、知つてますとも。もう七年……其樣になるんですかねえ。私が丁度彼處へ來た時に初てね、初見世のお客樣を連れて來たのは、あのお常さんなんでしたよ。」
「何に、初見世のお客だつて、其れぢやお神さんに取つちや、菊泉はなか〳〵忘れられない味があるんだな。はゝゝは。」
「あら、御冗談もんですよ。」とお浪は急に話を轉じやうとするらしく、顏を外向けると、其の時、他の一人は頻と川筋の景色に見取れて居て、
「君。幾個橋を越すんだらう。お神さんは知つてさうなものだな。あの圓い橋、あれア何て云ふんだ。」
「私もさつぱり知らないんですよ。何年と深川に居たつて今だに一人ぢや洲崎へ行く道なんぞは分らない位ですもの。眞實に淋しい川ですねえ。」

「さうさ、實に靜なもんだ。チョンと道具が變ると、能く音羽屋の芝居にやア斯う云ふ景色がある……。」と男も今は自然と言葉少く暫くは行手の川筋を望んだのである。

眞直な一條の流れは、月明の下に、盈々たる秋の潮を湛へて絹を敷いたやうに輝つて居る。此の靜かな滑かなる水の上に、今一同を載せた早船は、老いたる船頭の操る櫓聲に連れて、黃金を碎くが如き小波を立てつゝ進んで行く。明い夜の空に高い屋根を並べた倉庫の蔭や、太鼓の樣に圓い板橋の下、さては低い岸に沿うて夜泊りをして居る荷船の傍を過ると、深く苫を下した中には、船頭が酒に醉ッぱらつて高聲に云ひ罵つて居る。すると水に臨んだ人家では大方裏の窓を明けたまゝ、矢張り此の明月を賞して居るのであらう、意氣な音締の三味線を彈いて居る處もある。向ふの方からは同じ早船の船頭が、お客を廓へ送り込んだ歸りの空艙を押しながら、摺れちがひに、其の唄つて來た船歌の聲を止めて互に言葉を掛け合つて行き過ぎる。橋の上には欄干にもたれて其の下を通る舟を見ながら話をしてゐる男女がある。

船中の談話は猶途絕えた儘であつた。

一人の男は降る露の冷かさに兩方の袖を胸の上に重ね合して、口の中では何やら低く唄つて居ると、一人は兩手を懷中にした儘グタリと首を垂れて居る。お浪は隈なき月影を浴びて心の底まで冷された樣に、何となく悲しい心持がするのである。

「小林さん。お寢つてるんですか。淋しくつて、私は何だか變な氣がしますよ。」と到頭堪へかねた樣に、お浪は男の袖を引いた。

「眠て居るものか。唯だ恁うして、眼を閉りながら、艪の音を聞いてると、夢でも見て居る樣に何となく好い心持だ。」

「あら、好い心持だなんて。私は最う心細くなつて了います。何だか遠い處へ行くやうな、眞實に心細い氣がするんですよ。」

「はゝは。面白い事を云ひ出したな。」と鼻唄を唄つて居た一人は急に身體を前へ出して、

「然し眞實くだね。恁うして夜船に搖られてると、何の事はない旅の心持だな。吉原とは違つて、洲崎は又別世界だよ。」

「まだ餘程あるんですか。あら、彼處に電氣燈が見えるぢや有りませんか。」

「うむ。最う直きだ。」と男は少し首を差伸して、

「あ、あれァ汐見橋だ。」

「考へて見ると、洲崎は隨分遠いんですねえ。」

「さうとも、驚いたのかね。昔はお浪さんだつて、幾人の男に此の夜道を通はしたか知れないんだぜ。大抵な罪作りぢやない。」

「厭ですよ。あなた……。」と云つたが、お浪は妙に胸苦しい氣がした。

舟は絶えざる艪聲に送られて、早や汐見橋を横手に眺め、流れの儘に少しく左へ迂回すると又一直線を爲した川筋の、直ぐ行先には平野橋が現れて、深川組合の提灯をつけた車が二三臺威勢好く聲を掛合ひながら、松の生えた暗い土手道の方へと驅けて行く。遙か水の端れには最う幾個となく散亂して居る廓外の灯が認められる。

第二十

「まァ何てッたら可いでせう。眞實にお珍しいぢや有りませんか。あれッきり、此方へはお出でが無かつたんですか。何だか、夢見た樣ですねえ。」

引手茶屋菊泉の二階で、四十ばかりになる色の黑い女將は暫くはお浪の顏を見たまゝ思

掛けない、其の訪問に驚かされた。お浪も何と挨拶をして可いやら、先づ云ふべき語に當惑するのである。

「まア、長々しい御挨拶は抜きにして早く何か貰ふ事にしやうぢや無いか。」と男は巧に座を引立てゝ、「皆なまだ仕度を爲ないで出て來たんだ。早いものが可いぜ。」

「さうですか。畏りました。其れぢや大急ぎ……。」と女將はお浪の方へ鳥渡挨拶しながら下へ降りて行つた。

「お浪さん。もう此處まで來ちまへば、氣まゝも糸瓜も有りや爲ない。矢張古い知己に逢ふのは、何となくいゝもんだらう。」

「洲崎の仲の町は相變らず駄々廣くつて、追剝が出さうぢや無いか。お浪さんは知つてるかい甲子屋の五階造も去年の暴風から取壞に成つたんだぜ。」と一人は障子を明けて欄干へ出た。

「あら眞實にさうですね。何だか厭に寂としてるぢや有りませんか。」とお浪も男の傍へ進み寄つたが、自然と深い目容で眼の屆く限り外を眺めたのである。

仲の町は以前に變らず寂として、殆ど遊廓内の往來とは思へない。辻の角々には一二箇所煌煌たる電氣燈が月よりも蒼い光を投げて居たけれど、此の光の中には吉原で見る樣な喧しい遊客の影は無く如何にも廣げに思はれる道の左右に、櫻の立木と暗い茶屋の灯を見るばかり、夜の空は肅然として遊廓の上を蔽ひ盡して居る。

お浪は座に返ると、一同から杯をさゝれたけれど、最う醉ふ氣にはなれない。女將や女中を相手にいろ〳〵と話に耽つた後、初めの約束通り、此の茶屋だけで暇を告げて歸らうと云つたが、已に醉つて了つた二人の遊客は、なか〳〵承知する處ではない。

「お浪さん。今更其あ餘りだぜ。鳥渡で可いから、靑樓まで附合つたら可いぢやないか。」

「さうだとも、是非吾々のお馴染を見せ度いんだ。傍の樓なら兎も角、ねえ、お浪さん。昔の緣故と云ふ事もあらうぢやないか。なア、女將さん。」と一人は引き立てる樣にお浪の手を取らうとする。

「お浪さん。那樣に被仰るんですから、最う序で御座んさアね、鳥渡お座敷までゞも……私がお伴いたしますよ。」

と女將も今は口を添へたので、お浪は餘儀なく立上つた。

お浪は自分の顏を見知つて居る遣手部屋の女や新造なぞに會つて、兎角の挨拶をする煩

はしさを厭ふたばかりでは無い。自分が生涯の中で最も堪ふ可からざる悲痛の思ひを殘した賤業婦の姿を目擊すると云ふ事は何となく辛い氣が爲て成らないので、先刻淋しい仲の町の往來を望んだ時から、如何かして早く大門を出たいものと思つて居たが、到頭其れも叶はず一同ざゞめく聲の中に十間通りの方へと曲つて行つた。

見ると、此の通りは洲崎の中でも一番賑かな通りであるらしい。道幅は仲の町よりは少しく狹くなつて疎に柳なぞを植ゑた兩側には、大抵二階立ての靑樓が正しく軒を連ねて、居る。張店の灯と軒の電燈とで、往來は蒼白く浮いた樣に明く見える中を、此には多くの遊客が彼方此方へと彷徨つて居る、其れを引止め樣として、格子の內の女は襠襠の袖を飜しながら、立上つて呼立てゝ居るのもあつたが、少し構へ大い店では、袖を連ねたまゝ動かずに、恰も雛人形の如く整然と唯だ自分の姿を展覽さして居た。

二人の男は心の底から愉快さうに此の有樣を眺めたが、お浪はぢつと俯向いて殆ど氣のつかぬ中、又左手の橫町へと曲つたのである。すると、軈て、一同の先に立つた女將は突然お浪の方へ振返りながら、

「お懷しい氣が成さりや爲ませんか。些とも變つちや居ませんでせう。」

「眞實にねえ。」と喫驚して顏を上げると、最う何時か目指した靑樓の前に來たのである。細い石の門と、稍廣い植込とを前にした二階立の建物は、障子と硝子戶に映る美しい灯影に飾られて居る。御影の敷石を踏みながら一同の後へ尾いて行くと、女將は大きく屋號を染拔いた店口の暖簾を片寄せて、提げて來た提灯の灯を消した。店の男が上草履を揃へながら、「お客樣。」と表梯子の方を向いて聲を掛ける。お浪は何とも付かずに窃つと溜息をつき、額には冷い汗を搔いた。

廣い表梯子を上つて、黃色い聲で客を迎へる遣手部屋の女に案內され、海角に添ふ廣間に通つてからは、お浪は最う殆ど上氣した樣に兩の頰を赤くして、唯だ安からぬ思ひにのみ沈められて了ふ。二人の男は更にこの座敷で酒を飲み出したのでお浪は此の間に殆ど餘す處なく、再び悲しい過去の生涯を目擊したのである。自分が昔に粧つた通りな襠襠姿の女とも談話を爲た。河豚の樣に肥つた遣手婆の怒鳴るのをも聞いた、最後に彼のお松と云ふ多年使つて居た新造の顏を見た時には、一種妙な心持になつて、自然と眼を潤ました程である。

丁度、客の上り掛ける宵の口なので、店口の方では折々賑かな呼聲が聞える。長い廊下

を彼方此方と往來する重氣な草履の響、急し氣に走過ぎる足音やら、時には何か云罵る男の聲も交つて居る。立連る部屋々々から湧起る絃歌の騷は、廣い全樓を狂樂の聲の中に包んで居る。今方聞えた三下りの聲は、覺えのある小蝶と云ふ藝者であらう。音羽屋の聲色を使つて居るのは、鯉昇と云ふ幇間の聲だ。此の騷しい凡ての聲、凡ての物音は、一ッとして電氣の如くお浪の心の底に觸れぬものは無いのである。お浪は少時の間に非常なる心の疲勞を覺えたが、其れと同時に、最前から一杯二杯と客の相手をして居る酒の醉は、何時かしら胸に蟠まつた儘、次第に輕い頭痛を感じさせる樣になつた。

座敷には、此れも以前見知つて居る藝者が二人まで聘されて居るので、折を見て外の風に當らうと廊下を裏梯子の方へ行き掛けた。

すると忽ち其の歩みを引止めたのは、唯ある部屋の前である。出入する障子の上の壁には、此の部屋の番號と娼妓の名前――其れは楓と書いてあつたのだ。以前に自分が痛しい賤業の生活を營んだ此の室には、再び自分と同じ名前の女が又同じ生活を送つて居るのである。何樣女であるだらうと、お浪は堪へがたい思ひに打たれると同時に、突然又非常な恐怖を感じた――自分は此の部屋で永久に忘れる事の出來ない罪惡を犯したのである。小田邊と云ふ哀れむべき縊死人の魂は何處を彷徨つて居るだらう。今、室の中には誰も居ないと見えて極めて寂然として居る處から、能く耳をすますと、彼の怖しい夜の樣に、依然として波の音が聞える。お浪は思はず悚然として、裏梯子の方へと馳け去つた。

高い天井から下つて居る電氣燈が唯つた一ッ、掃除の行屆かない汚れた梯子段から階下の廊下の方へと、黄い光を投げて居る。お浪は最う何處へ行くと云ふ目的もなく、古寺の中でも彷徨ふ樣に、夢中で此の裏梯子を下りて行くと、左右とも人の居ない明き部屋の障子が白い烟の樣に立連つて居て、電氣燈の光も最う此處へは達かぬ。廣い廊下は暗澹として、秋の夜寒が自在に流れ通つて居るばかりであつた。苦しい醉は少しく醒す事が出來た。然し其れと共に又もや思起すのは、自分がまだ里馴れぬ頃木場あたりの富豪の息子が是非にも自分を連れて出奔しやうと迫つた事。自分も思はず其の時は若い男の熱情に涙を流して泣いたけれど、其れは此の寂とした下座敷の何處であつたか知ら。遠い表二階の方で聞える騷ぎの三味線は、いとも幽に、宛然芝居で使ふ合方の樣に思はれる。お浪は且つ思ひ且つ歩みつゝ、何時か知らぬ間に此の廊下の端れから其の行くまゝに歩いて行くと、丁度廣い青樓を一週して、再び店口の方へ出てしまつた。

酒の席も濟んで、お浪は女將と連立つて引手茶屋へ戻つた後、漸く車に送られて歸る事となつた。

女將は何處までも愛嬌好く店の外まで送り出て、

「其れぢや御機嫌宜しう。どうぞ又是非被入つて下さいよ。手前の方からもお邪魔に上りますから……。」

「あゝ、是非ね、眞實に今夜はいろ〳〵御厄介になつて其の中屹度お禮に上りますよ。」と云ふ中に、車夫は早や梶棒を上げた。

大門外の辨天橋を渡ると、直ぐに淋しい土手である。空を仰げば依然として曇りなき十三夜の明月は、堤の松、眞直な川筋、其邊に散在する製造場らしい建物の屋根を照して居た。お浪は馳せ行く車の幌る音につれて輕く身を搖られながら、眼の中にはあり〳〵と遊廓の有樣が消え去らない。其の心の中には過去つた賤業時代の諸有る出來事が恰も幻燈を見る樣に回轉して居るのである。突然、車が止つた樣なので、お浪は不圖心附いて、四邊を見廻すと、何時も渡るべき平野橋を横に見て車は暗い土手に添うて甚しく傾斜の急な土橋へ上らうと爲て居るのである。

「車屋さん。大通りへは出ないのかい。」

「へい。八幡前がひどい道普請なんで御在ます。」と車夫は身體中の力を出して高い橋へと上り掛けたので、お浪は何となく氣味惡く又もや四邊の暗さに首を廻らすと、計らず自分の後には美しい海の景色の横はつて居るのを見た。

土手の松を越して、廣い東京灣の水は、冴渡る月光を浴びながら、靜な潮の聲を立てつつ眠つて居る。其の端れに當つて無數の燈火に飾られた洲崎の遊廓は、丁度切子燈籠の樣に浮んで居る。殊に、幾年お浪が身を沈めた青樓と云ふのは突出した海角の勝地を占めて居るので、庭先に輝く白熱燈を始め、高い時計臺から廊下の障子に映ずる些細な火に至るまで、さながら手に取るやうに見える。

お浪は長い溜息を吐いたが、此の時車は高い橋の頂上に達し得て、俄然地の底に沈むが如く月光を遮られた黑暗々たる土手道へと馳せ下りた。

海と燈火とは忽然眼界の外に埋沒せられ、颯々たる風の音のみが松の枝を鳴らして居る。僅に右手を望めば、最前早船を浮べた一條の川水を隔てゝ、岸に臨んだ料理屋平淸の灯が朦朧として欄干の障子に映ずるばかり。其の他の人家は最早や深い眠りに沈んだものと見

える。車は場末の街の凹凸に苦しめられつゝ、辛くも岸に添うて行けば、白い水はいよ〳〵死したる如くに淀んで動かず、四邊は眞に寂々として夜露が怪しき響を立てぬばかりに、髪の上、袖の上にと降り灑いで來る。お浪は恰も人なき深山の谷川邊に行暮れた樣な心持になつて悲し氣に空の方を仰いで見た。一天拭ふが如く、鏡の如き十三夜の月は丁度自分の頭の上に萬里の清光を漲らして居る。お浪は今宵ほど見事に晴れ渡つた夜の大空を斯くまで限りもなく廣々と打仰いだことはない。玲瓏たる月の世界や、烟の樣な天河の他に、有りとあらゆる天體は爛々たる怪光を放つて、蒼穹の上に浮んで居るのである。

お浪は女心の、譯もなく空怖しい氣がして、暫くは思はず其の眼を閉ぢたけれど、然し胸の中には忽ち堪へ難い憂愁の念が簇々として叢り湧いて來るのを覺えた。此憂き惱みは眞にお浪が身體の奥底から起つて來たものと云はねば成るまい。

これまで、お浪は自分が暮して來た浮世と云ふ事に對しては、決して何等の不思議も恐怖も抱いた事が無かつたのだ。然し今此の無窮なる空の有樣を打仰ぎながら、猶も心の中に動いて居る長い過去の生涯に接觸すると、つく〴〵廣い世の中に、身一の心細さを感ずる。同時に今日が日まで唯だ現のやうに送つて來た生活の夢から全く目が覺めた樣な心持がするのである。世に立つべき力なく思慮と云ふものなき女の身一ッで、能く今日が日まで兩親と娘とに對して、重い責任を擔つて來ることが出來たものだ。殆ど夢我夢中で何かしら自分の盡すべき丈けの事を盡して居たなら、軈て知らず〳〵人間最後の幸福に達し得られる樣に思つて居たが、噫この世の中は決して然う云ふものでは無かつたらしい。お浪は此の儘眠る樣に寧そ死んで了へば可いとまで思ひ込んだ。

「や、蠟燭が盡つ了やがつた。」と突然車夫が梶棒を下したので、お浪は深い物思ひから、危く前に踣めりさうになつて、驚いて足を踏みしめた。車夫は何にも知らう筈は無い。蹴込の奥からマッチを取り出しながら、

「御新造さん。彼處の橋を渡つて、横町を曲ると、最う直ぐ永代で御在ます。大通りを惡くさせられると、車夫も泣きますが、お客樣も難儀で御在ます。」

「眞實だよ、車夫さん、私は寒くつて爲樣が無いんだから、序に幌を下してお呉れな、夜露でびいしいよりなんだよ。」とお浪は重ねて空を見上げた。

第二十一

翌日眼を覺したのは十一時近くであつた。お浪は變らぬ何時もの夜具の中に安らかに横はつて居たが、今迄覺えた事の無い程な身體の疲勞と共に、既に起上る氣力さへも全く消え果てゝ居る樣な心持がした。昨夜の有樣は凡て正しく夢に見た景色であつた樣に思はれながら、然しかの美しい月の光、夜の空、星の輝き、殊更絃歌に滿たる遊廓の有樣は、今も猶あり〳〵と眼の中に殘つて居る。夜具の襟から顏を上げると、家の中は相變らず寂としてゐる。何かにつけて妹のお絹や女中のお兼の賑かな笑ひ聲ばかりが思返される。此れから此の寢床を出たならば、再び目的のない浮世の苦勞に身を疲らせるのかと思ふと、つく〳〵厭な辛い心持がした。

お浪は最う營業の盛衰を運命の儘に任して了つた。決して何事も考へまいと思つた。否、兎角の精神を勞する氣力さへ漸々に失つて了つたのである。何時の間にか年も暮れ行く或る晩の事、帳場の長火鉢で娘のお種が、

「姉さん。明後日は最うお正月ねえ。」と嬉し氣に云ひ掛けたが、お浪は全く氣の拔けた聲

で唯だ、「あゝ。」と答へたばかりである。

「姉さん。此間のね、最う早く爲なくッちやお正月が來了つてよ。」と顏を斜に、お種は母親の事を今も猶姉と呼んで居るのだ。老母のお慶も其の傍に坐つて居て、

「種や羽子板の事なら、去年のが未だそつくり爲て居るぢや無いか。」

「あら、祖母さん。其樣事云つたつて無理よ。羽子板ばつかりは古いのは可笑いもの、ねえ、姉さん、可いんでせう、」又顏を差出した。

「其れアね、買つて上げない事も無いんだよ。けれども去年のだつて、まだ綺麗なんだから、其樣に幾枚も持つて居て如何するつもりなんだえ。」

「去年のは最う私持ちや爲ないのよ。だつて直ぐ分るんですもの。今年のは音羽屋の辨天小僧か何かで無くッちや何だか氣が利かないわ。」

「何だね。生意氣な。姉さんは最う役者のお話を聞くと慄然とするんだよ。」とお浪は思出した樣に母のお慶と顏を見合した。

正月は瞬く中に進んで來た。營業も去年の暮よりは相應に景氣立つて居たけれど、お浪は唯だ何の理由なく心淋しい奇妙な悲しさを取除く事が出來ない。せめてもの氣慰みに

娘のお種が近所の友達と追羽子をして居る其の仲間に這入つて見る事もあつた。一日二日と已に目出度い三箇日も過ぎた朝、父親と一緒に町の風呂へ行つたお種が、突然格子戸の外から消魂しい聲で、

「姉さん、大變よ〳〵。」と息を切つて馳入る物音。

「何だよ。まア！眞青な顏をして……。」とお浪も今は常ならぬ顏付になつた。勝手に何か用をして居た老母のお慶も慌忙て馳付けて來たが、

「お種やまア氣を靜にお爲。何うしたんだね。」

「姉さん。祖父さんが……。」と漸く口をきいた。

二人はいよ〳〵顏色を變へたのである。

「祖父さんが車にひかれて……死んぢやつたんですよ。」

お浪とお慶は最う口をきく事が出來ない。腰を拔したのでもあらうか、坐つた儘唯だ其の手を動かした。

「お湯から出たらね。お祖父さんが絹ちやんに似て居る姐さんが通るつて、私が違ふつて云つても承知しないでね、夢中で其方の方へ馳けてく拍子に、郵便馬車へ衝突つて了つた

の。」

「そ、そうかい。そして祖父さんは……。」とお浪は漸く語を續けて、「祖父さんは今何處に……居るんだよ？」

「其れから、其の馬車は、どうした。」とお慶も涙さへ出ず乾いた眼を唯だパチ〳〵させるばかりである。

「どう爲たか知らないよ。巡査さんが、早く家の人を呼んで來いつてッたから、私は最う一生懸命に馳けて來たんだよ。」

お浪は突然狂氣の樣に、其の儘戸外へ馳出さうとしたが、出合頭に巡査が格子を明けた。

「此方の御隱居ぢやと云ふ話ぢや、最う事件は御存じだと見える……あの楠田と云ふ醫師の家で今手當をして居る處ぢやから、直ぐお出でになるが可い。」

「は、はい。有難う御在ます。」

「楠田と云ふ醫師……分つとるかね。」と巡査は丁寧に云ひ返した。

「存じて居ります。」と云ひも了らぬ中、お浪は最う下駄を穿き、巡査を後にして夢中で馳けて行つた。

通りへ出ると、まだ其の邊には人立がして居たが、不圖見れば往來の眞中には太い車輪の痕と生々しい血の滴りが砂に汚れた儘散點して居る。お浪は實に魂も消るばかり、一散に馳せて漸く見覺えて居る町醫者の玄關へ案内も乞はずに馳け上つた。

父親は已に眞白な繃帶で、面部と右の手とを包まれた痛々しい有樣で、診察室の寢臺の上に横へられて居た。其の傍には醫師と二人の書生が立つて居たが、お浪は矢庭に、

「阿父樣！」と呼びながら、父の身體に抱付かうとした。一同は喫驚して、輕くお浪を遮り、

「少時、靜に寢かしてお置きなさるが可いのです。最う一度脈搏を見てからゆつくり釣臺で動さん樣にお連れ申さんければ不可んです。」

お浪は初めて心付いた樣に醫者の顏を眺めた。然し挨拶するより先に、

「先生、如何樣、怪我を致しましたんです。別條は御在ませんでせうか。」

「さうです……然し何しろ御老體の事ですから、十分御注意が肝要です。」と醫者は優しい語調で云つたのであるが、お浪の耳には已に怖しい宣言である如く聞えた。最う無言の儘しげしげと父の姿を目戍る中、何時の間にか眼の中には涙が一ぱいに湧いて來た。父親は

前後不覺の境に陷つて居ると見え、醫師が脈搏を試る爲めに左の手を取つても、少しの身動さへせぬ。已に息が絶えて居るのでは無からうかと傍に見て居るお浪は怖しいやら悲しいやら。やがて正午を過ぎた後、人を賴んで漸くに父の身體を我が家へ持運んだ。

世間は未だ松の内の事とて、賑かな人通りの聲がするけれど、お浪は早くから格子口の戸を閉めて了つて、母のお慶と唯だ顏を見合した儘父の枕元に坐つて居た。

二人は何とかして、父の口から物云ふ聲を聞き度いものと、屢〻首を長くして、其の顏を覗込むのであるが、父は一言の聲をも出さぬ。それと共に、又決して苦痛の呻聲をも發しない。唯だ衰弱した一縷の呼吸が規則正しく通つて居るのみなので、次第に夜の靜まるに從つて、此の呼吸の聲と、隣室なる時計の響とが不思議な調子を爲して、殆ど身の毛立つ樣な寂さを作るのである。

「阿母樣、何時でせう。」とお浪は垂頭いて居た顏を上げ怖るゝ樣に眞黑な四隅の壁を見廻しながら、呟く樣な低い聲で問ひ掛けた。

「さうさね。」と母のお慶もお浪の顏を見返したなり暫く言葉を切つて、「大變に寒くなつて來た。」

「さうねえ。阿母様、もつと火をお起しなさいよ。炭はあるんですか。」

母親は默つて室の隅にあつた炭斗を引寄せると、話は又途絶えて了つて、寂しい老人の呼吸は一層耳立ち、嚴冬の寒さがいよ〳〵激しくなる樣に思はれた。其の時時計の音は忽然として二人の耳を突いたのである。

「あ、二時ですよ。」

「お浪や、お前、眠くなつたら先へ寢るが可いよ。」

「いゝえ、私は起きてますから、阿母様こそ最うお寢みなさいよ。眞實に寒いんですから、風邪でも感くと大變ですよ。」とお浪は更に火箸で火を搔き起したが、又少し身體を前に屈めて、

「然しね、阿母様、お醫者様の云つたのは私達への氣安めぢや無いでせうか。阿母様は何と思つてます？」

「まさかね、お醫者様だつて、みす〳〵六ヶ敷いものなら、其樣當もない氣安めも被仰りはしまいから、私は先ア大夫丈かと思ふんだけれど……。」と殊更聲を低めた。

「其ア然うですね。阿母様、私はだけれども到底今夜は心配で寢られや爲ませんから、蒲

團を持つて來といて、眠くなつたら其の儘こゝで寢る事にしませう。阿母様は先にお寢みなさいよ。萬一もの事でもある樣だつたら、私は直ぐに、阿母様を呼びますからね。」

お浪は身に迫る夜の寒さから年老つた母の身を氣遣ひ、無理に寐かしたが、扨て唯た一人老人の枕元に居殘つて見ると其の淋しさ心細さは又一層である。

去年の正月――僅か一年前には、自分は如何に愉快に生活して居たらう。其の又前の年の正月には、初めて、遠い故郷から此の父親母親、其れに妹までを呼寄せて此處に一家の團欒を作つた。商賣は滯りなく繁昌した。幸福なる月日は僅の間に妹を美しい娘にした。然し其の結果は到頭悲しい娘の出奔に終つて了つたのだ。父親の心の底には、今でも憎らしいお絹の事を思ひ續けて居たと見え、云はゞ其れが爲めに、此の樣な負傷をした。自分は若し待合などを爲なかつたら、妹は父親が云ふ樣に斯る墮落は爲なかつたに違ひない。と云ふものゝ待合を始めなかつたならば、自分は唯だ人の妾となつた丈けで、到底一家を呼迎へることも出來なかつたのだ。お浪は過去つた凡ての事柄を、若しも其の時、那樣爲なかつたなら、或ひは恁うしたなら、今は如何なつて居るであらう。名古屋へ奉公に出た事から、思掛けず子供まで設けた昔しの事までを、次第々々に溯りつゝ種々に考へて行く

と、繫累の多い自分の生涯と云ふものは、矢張どうしても、今日の樣な有樣に成らねば成らぬ樣に思はれるのだ――生れながらにして、已に其の人の運命は、逃れる事の出來ぬ一定の方向に進むべく限られて居るものでは無からうか。

お浪は堪へ難い寒さと、寂しさと、今にも途絶えはせぬかと思はれる父の寢息、そして氣味惡い程明い燈火の中に、何時か夜明けの鐘を聞たのである。

第二十二

松の中もいよ〳〵明日一日と云ふ正月六日の夜九時、お浪、お慶、お種、母と娘と孫との三人は名悲嘆の聲を上げつゝ、父親の手に取縋つた。父親の呼吸は、幾日幾夜の後、今や突然損れた時計の針の止まる如く、此に途絶えて了つたのである。

昨日の朝、診察に來た醫師が、其の後の經過の甚だ良好である事を云置いたのは全く僞りであつた。老人の心は已に十年の昔、長い浮世の勞苦の爲めに最う枯れ萎んで了つて居たのである――拔殼になつた無感覺の身體は、漸くの事で今宵最後の安全な眠りに達する事が出來たのだ。

お浪は知人のない東京の事とて漸く近所の人の便りを借りて、先づ千住在の或る法華寺へ埋葬する事に決心したが、扨松の内を過した八日の正午、いよいよ柩を送り出す手筈を極めたのである。會葬者と云ふのも僅かに數へるばかり。やがて出棺の時間に近く頃になると格子外に待つて居た車夫が、

「おい、惡いものが降つて來やがつたぜ。」と叫んだ。

死別の悲しみに沈められたお浪の一家は、更に心付く暇が無かつたのであるが、天氣は二日程前から非常に寒くどんよりと曇つて居たのである。折々は朝早く細密い霰の落ちる處から、街の人々は早くも降るべき雪を豫想して居た。

柩は雪の中を冒して、漸く千住在へ來た頃には、道傍の雜木林やちらばらに立つて居る茅葺の屋根などは、もう眞白であつた。本堂で名殘の燒香を濟して、裏手の墓場へ柩を運び出すと、お浪を初め一同は足駄の齒で苔の上の新しい雪を踏みにじらねば成らなかつた。見廻はせば、其處此處に累々たる灰色の石塔も、盡く純白なる雪の衣に粧はれ、高い枯木の枝には、目立つて黑い烏が二三羽、怪し氣なる聲を立てゝ鳴いて居る。小笹の垣で境をした外面の方は、一面に遮るものも無い。平かなる畠で、遠くの森や細い小徑も、いよ〳〵

降り增さる雪の爲めに、最う分明とは見分けられぬ程である。さら〳〵と降る雪の物に觸る丶音、空を行く幽な風の響に、天地は實に例へられぬ靜肅を示した。

人足共はこの時、無遠慮な聲を掛合つて、已に掘下てある穴の中へ、柩を下さうと爲るのである。僧侶は袈裟の上に降りかゝる雪をも拂はず、合掌しながら齊しく朗かな聲を合して、最後の經文を稱へ出した。お浪を始め、母親のお慶、娘のお種も續いて儀式の如く土塊を拾つて、深い穴の中へ投入れると、柩の板に當る陰慘な響がして、濕つた赤土の臭が氣味惡く湧出したが、大空の雪は處定めず、この穴の底へも卷込れる樣に綿の如き大な塊をなしつゝ、落ちて行く。絕えざる讀經の聲、一段に高く寒天の端にも響き渡るかと思へば人足はいよ〳〵穴の周圍に積み上げた土を、ドッとばかり搔き落した。

母親お慶の泣聲が聞えた。お祖父さんと呼ぶ娘お種の聲も聞えた。お浪は此に父親の身體とは全く明暗の世界を異にしたのである。けれどもお浪は最早や此の場合に至つては、今更特別の悲しみを感じ得るだけの明かな心は持つて居なかつたらしい。悲しい事、痛しい事、凡て其れ等の感情は、既に〳〵其の極度を通り越して了つて、云はゞ其の身は茫然と、何か分らぬ冷い夢の中を彷徨つて居る樣な心持であつた。然しいよ〳〵空しく我家に

歸るべく、幌深い車に乘つて、寺の門を後にすると、突然何とも附かず、例へられぬ落膽を覺えた。其れは自分の身中の魂までが、已に父親と一緒に、此の生きた身體を離れて、行方知れず逃げて行つた樣な念がしたのである——生活と戰ふべき意氣と精力は最早や全く衰滅して了つたのだ。

死したる心、空洞になつた身體は、此れから先幾年と進んで來る長い月日を如何に送り過して行くであらう。噫！　自分の車の先に進んで行く、同じ車の中には猶重い責任ある老つた母親、幼い私生兒！　お浪は力のないドンヨリした眼で、幌の隙から行手を眺めると、紛々たる雪は漸く吹添ふ風に連れて、縱橫に飛び散りつゝ、林、道、人家、電柱、あらゆる物を埋め盡さうとしてゐる。

今日の夜は、無數の人の生活が其の集合を爲したる此の一都會も、淋しい墓場と同じ樣に、白い衣の下に包まれて聲なく眠つて行くのであらう。お浪母娘の車が行惱みつゝ漸く築地の待合近く歸つて來た頃には、何處も彼處も眞白な雪と雪との間から血の樣な燈火の光が流れた。

夢の女　終

（原本明治三十六年五月新聲社出版）

女優ナナ梗概

第一

夜の九時になりし時ヴアリエテー座には猶人影なかりき。瓦斯の灯も朧に、大なる紅き緞張幕は薄暗き影の中に包まれたるのみなりしが、やがて遲れ馳せに集る人々少時が中に溢るゝばかりとなりぬ。彼等は皆ナナを見ん爲めに來れるなり。此度び此の座の舞臺に現るべき女優ナナの名は、巴里劇壇の新星として一週日程以前より彼等の口に噂されたりき。

ナナが扮すべき役割は、希臘神話中の女神ヰナスなり。ダイアナ、イリス、ジユピテールなぞ云ふ神々舞臺に現れし後、待ちに待ちたりしヰナスが滑かなる肌に白き紗を纏ひ、黄金色の髪を振亂して立現れし時、人々は覺えず眼を睜りぬ。

ナナ年紀は十八、身の丈け高く、飽までも肉附好き美人なりき。されど小き其の口より臺詞を唱へ舞の手振する時には、思ひ掛けぬ稚き技なりしかば、場中は早くも稍色めき立ちて、呼く聲、笑ふ聲なぞ明かに聞えしに、ナナは少しも臆する色なく、豐艶なる片頰に

云はん方なき笑靨を寄せ、人々と共に微笑みつゝ舞ひ且つ歌ひぬ。

此の憎くきばかり愛嬌ある行ひは全く彼女をして成功せしめぬ。人々は思はず拍手せり。一幕二幕と進み行けば幕毎に拍手喝采の聲嵐の如く高りて、美しき瓦斯の光は美しきナナが姿を一際艶かに照し出せしが如く思はれぬ。幾萬の觀劇鏡は最早やナナの姿を離るゝ事なかりき。かゝる巴里の藝人社會にては知らぬものなき銀行株主のステーネルは、薫高き白百合の花束二つまでを舞臺に投げぬ。少時止まざる拍手の音は一度下されたる緞張を再三引上げさせぬ。ナナが成功は此の如くなりき。

此の若き女優はオースマン街の甚と廣く新しき二階家に住居したり。翌日の朝は已に十時となりぬ。されどナナは昨夜の疲勞に全く青褪めたる顔色し、枕の上に蔽ふ物なき腕を投掛けつゝ、猶寢床の中に眠りてありしが、この閉されたる寢室の蒸暑さに彼女は突然眼覺むるや、二ッ竝べし他の枕をさぐり、何人か添寢せし人の忽然見えずなりしに驚きしが如く急ぎて枕元なる電鈴を鳴せり。

「ポールは此處にありしか。」とナナは入り來りし下婢ゾエーに問ひぬ。

「然り。彼の人は來給ひしかど、奥樣の能く眠り給ひし故、明朝來べき事を云傳へよとて

去り給へり。」

「明日は彼が來るべき筈の水曜日なりや。」

「奥様よ。ポールの君は何時も必ず水曜日に來給へるなり。」

ナナは今枕の上に半ば其の身を起しつ。今日勘定の催促に來るべき種々なる出入商人の事、家主の事などより、戀人なるポールが身の上の事までを包まず打語ひぬ。ポールとはダーグネと云ふ若き男の事にて、彼は愚なる放蕩に數萬の財産を失ひ、今は女に折々の花束など送べき聊かの金を得んとて、或る會社に雇はれつゝあるなり。ナナは又、ランブィエの村に近き乳母の許に預けたる我が兒ルイを、眞身の叔母なるルラの手に引取らせん爲めに、三百法を如何にして今日中に才覺すべきかを語れり。下婢ゾエトは心より能く其の女主人を敬愛したれば、暖き同情もて常の如く耳傾け居たりしが、折から表の戸口に鳴る鈴の音に驚かされ、軈て一人の老いたる女を誘ひぬ。

「トリコンの媼か。」とナナは猶寢床より出でざりき。

「今日は御身の帽子を持ち來れり。」トリコンは椅子に着かで立ちたるまゝなり。

「何程にや？」

「二十ルイなり。」

「代價はいつ頃支拂ふべきか。」

「今日の三時に。宜しきや。」と云ひて、ナナが答へを聞きたる後、トリコンは直ちに歸り去りぬ。

獨り寢床の中に殘されしナナは夜着を深く引きかつぎて、明朝は美しき衣着せ得べき幼兒ルイの事、さては昨夜成功せし劇場の有樣などを夢現の境に思ひ續けつ。何時とは無く再び深き眠りに沈みしが、十二時を打つ時戸の開く物音に目覺めたり。

「おゝ、御身なりしか！　御身は今日ランブィエに赴くべきか。」

「余は其の爲めに來れるなり。」と叔母ルラは答へつ。「十二時二十分の汽車あれば、其れに乘りて行くべし。」

「されど叔母御よ。今日の午後ならでは彼の乳母に渡すべき金を持たざるなり。少時午餐なりと準へて待ち給はれ。」

「御身が幼兒の父は如何なる人なりしぞ。」と叔母ルラは唐突に問ひ出しぬ。ナナは叔母の元に行きて花造りの女工たりし時、十六歳にして此の私生兒を設けたるなり。

「我が兒の父は或る紳士にてありき。」

「然なりしか。余は屢御身を打擲せし左官職工なりと聞きしが……。」と叔母ルラは打笑みて、

「余は他日御身より委しき話を聞き得べし。氣遣ひすな。余は皇族の如く大切に彼の兒を養育すべければ。」

此の叔母ルラは聊かなる貯蓄によりて花造りの職業を廢して今は隱居せるなり。ナナは叔母と幼兒の爲めに好き室を借り、一個月百法づゝを支給すべしと約束しぬ。下婢ゾエーは午餐の準備宜しき事を告げぬ。兩人は連立ちて食堂に來りしが、此處には一人の年老けたる婦人、頭巾を冠りたる儘にて食卓に坐り居たりき。ナナは怪しむ樣子もなく、

「マロアールよ。御身は何故寢室には來らざりしぞ。」

「余は御身等の聲を聞きたり。何事か相談ありしと思ひたれば。」と答へぬ。マロアールは叔母ルラの姿を見て、初めは稍打解けぬ樣なりしが、心置きなき眞身の叔母なりと知りて、忽ち親しく物云ひ掛けぬ。

彼等はゾエーが持出る一皿二皿を貪りつゝ、老いたる女の常とて、苦勞多かりし身の上

の事など喋々と語合ひしが、ナナは唯だ椅子に凭りて煙草を喫し、料理の皿には手も觸れず、わづか麵麭とジャムとにて食事を終れり。

マロアールはナナの賴みにて、そが戀人ダーグネに送るべき手紙を代筆し、折好く使に來りし劇場の男に持せ遣りたる後は、叔母ルラと餘念なく骨牌の勝負に耽り始めぬ。掛取りの商人は早や戸口の鈴を鳴らせり。時計は三時を打ちぬ。ナナは懶く椅子より立ちて身仕度せり。

「御身若し四時までに金子を持ち來らば、余は四時半の汽車にて行き得べし。」と叔母ルラは散りたる骨牌を搔集めぬ。

「其の樣には暇取らず。」と答へしが、ナナは再び戸口の鈴の鳴る音を聞きぬ。斯る折に屢なす如く、彼女は窃に勝手口より出で去れり。

叔母ルラとマロアールは猶午餐の卓子を離れず、飲殘したる珈琲の砂糖を舐りつゝ骨牌の遊戯に餘念なかりしが、下婢ゾエーは殆ど絶間なく鈴の音に驚かされぬ。されどそは掛取りの商人にはあらざりき、美しき花束携へて殊更に此の女優の住居を訪はんとて來たれるものなり。最初の一人は女かと見まがふ美しき面したる十七八の若者なりき。昨夜ヴア

リエテー座に在りしものは必ず彼を見知れるならん。ナナの姿を見て劇場の棧敷より覺えず嘆賞の聲を發せし其の男なるを。次は舞臺に白百合の花束投げし、かの銀行株主のステーネルとて大兵肥滿の老紳士なり。其の次も又同じく昨夜劇場にありし皇后の侍從伯爵ミュッフワ、及び侯爵ド、シューアールの二人にして、此の貴族等は貧民救助會の委員なる名儀の下に、一代の女優ナナを訪ひ、名譽の寄附金を請取らん爲めに來れるなり。

此等の訪問者と掛取りは、各々室を異にして、或は應接間、食堂或は物置きたる室の中に導かれて、空しくナナが歸るを待ちつゝありき。ゾエーの爲めに食堂より追出されたるルラとマロアールは臺所の片隅にて猶も骨牌を遊びしが、四時を打ちて早や十五分を過ぎぬ。されどナナは未だ歸り來らざりき。

第二

ヴァリエテー座にてナナの演ずるヰナスの狂言は、已に三十五日目となりぬ。巴里は今博覽會の開始中にして、英國より遊覽に來給へる蘇國の皇子は、今宵ナナを其の樂屋に訪ね給ふべしとて、多くの女優等は其の化粧室に打集ひて相語れり。

今二幕目の狂言は雷の如き拍手の響の中に終りしなり。舞臺に出でたる優人どもは已が室に歸るべき狹き樂屋の廊下を急ぎしが、忽ち「皇子々々」と囁く聲四邊の人の口より口に傳へられたり。人々は齊しく表方に通ふ小き戸口の方に振向けり。最初には只だ肩巾廣く屠牛者の如き顏したる此の座の支配人ボルドナーブが、肥滿せる其の身を二つに折らんばかり屈ませたる、可笑しき姿のみ見られしが、續いて現はれし皇子は顏色紅に、身長高く、逞しげにして美き髯あり。着實なる商家の人の如く、形好き外套に身を括ませ、其の後には伯爵ミュッフワと侯爵ド・シューアールの二人附き從ひぬ。されど今此等の人々の佇みし處は劇場の奥、樂屋の片隅の事なれば、黯淡たる物影に包まれて定かには見分かざるなり。座の支配人ボルドナーブは感激の震聲を作りて、

「恐多けれど我身は先に進むべし。殿下よ、注意けて歩ませ給へ。」

されど皇子は今急し氣に大道具の職人どもが三幕目エトナ山の場の道具立せる樣を面白氣に眺め入り給へり。伯爵ミュッフワは早や化粧室に赴く廊下の方に歩みてありき。脚下の切穴よりは奈落に點されたる瓦斯の火透き見え、人々の語合ふ聲なぞも洩聞ゆれば床板は怪しく搖動くが如く思はれて、斯る場所に馴れざる伯爵は何となく安からぬ心地しつゝ

ありしなり。已にしてボルドナーブは廊下の端れのナナが化粧室に進みつ。戸の引手を握りて、

「殿下。這入らせ給へ。」と云ひしが、内には驚く女の聲したり。

一同は兩肌現したるナナが周章えつゝ傍の帷幕の中に隱れ入りしを見ぬ。

「何とて此くは唐突に戸を開け給ひし。御身等は猥に這入り得ぬ事を知り給ふべきに。」とナナは帷幕の陰より叫べり。ボルドナーブは語急しくも、

「逃げ隱るゝ要なし。我娘よ、我儘すな。殿下は御身を見んとて來給へるなり。」とて帷幕の中を差覗かんとす。ナナは漸くに決心して帷幕を片寄せ、美しき半身の肌現なる儘の姿にて、

「我身は全く驚かされたり。殿下は餘りの光榮を授け給へり。許させ給へ。斯る亂次き態なるを。」と殊更に恥らう樣をなし、頸の邊を赧めぬ。

「マダムよ、猥に闖入せしは余にこそ。」と皇子は答へつ。「余はされど到底御身に挨拶し度き望を押ゆる能はざりき。」

ナナは化粧臺の傍に座を占めしが、伯爵ミュッフワの姿を見ていと親し氣に、先頃ナナが其の自宅に催せし宴會に來らざりし怨言など言述る折から、戸の外には騷しき男の聲起りて、戸は忽ち引開けられたり。許しもなく進入りしはフォンタン、プルリエル、ボスクと呼べる三人の男俳優なり。彼等はフォンタンが誕生日を祝さんとて三鞭酒と夥多の盞を携へしが、皇子の在すを見て、フォンタンは即座にナナが狂言中の臺詞を述べて其の無禮を云紛らしぬ。

此の頓智ある擧動に皇子は微笑み給へり。ナナを初め一同盞を上ぐれば、ボスクは殿かなる聲して、

「殿下の爲めに……。」と叫びぬ。プルリエルは取敢へず、

「軍隊の爲めに。」

「ヴォナスの爲めに。」とフォンタンも聲を續けぬ。

再三盞を合して一同は三鞭酒を傾けたり。戸の外には程なく幕開くべきを知らする鈴の音聞えぬ。三人の男俳優は酒の盡ると共に出で去れり。支配人ボルドナーブも何時か姿を隱せしが、皇子と伯爵及び侯爵の三人は猶ナナが室に止まりぬ。

「許し給へ。」とてナナは今三幕目の舞臺に出づべき裸體の化粧に取掛れり。

皇子は侯爵ド・シューアールと長椅子に倚掛りしが、伯爵ミュッフワのみは立ちすくみたる儘にて、一同後より化粧するナナが手振を打目戍れり。少時寂として聲なかりしが、皇子は長椅子の上に其の身を安けくし、

「御身は英國に來るべき心は無きや。若し一度英國に來らば御身は必又と巴里には歸るまじと思ふ程歡迎せらるべし。伯爵よ。卿等は貴國の美しき人を遇すべき法を知らぬ氣に見ゆ。吾等は盡く佛蘭西より美しき人を奪ひ去るべきに。」

「殿下よ。否決して奪はれざるべし。伯爵は德高き人なれば……。」と侯爵は何やら好からぬ意味あり氣に呟きぬ。

此の言葉を聞きてナナは何思ひしか眤と伯爵の面を打眺めぬ。

伯爵は愈々安からぬ思ひせり。閉されたる狹き室は暖くして、三鞭酒の醉の淘然たるに白粉香水石鹼なぞ强き化粧品の香りに包まれて伯爵は坐ろ心の亂れを禁じ得ざりしなり。

此の時戸の外には、

「マダムよ。早や幕明の知らせを爲し得べきか。見物は騷ぎ立ちつゝあり。」

「少時……。」とナナは叫びつ。

伯爵は全く茫然として後より鏡に映るナナが面を打目戍りしが、忙しき刷毛の運びと共に唯さへ美しき其の面は今は例しなく白くして眼緣は薄赤く、恰も戀の手疵に惱める人の如く見えぬ。

「マダムよ。」と再び戸口より呼ぶ聲す。「早や幕明きの知らせを爲し得べきか。見物は其の席を壞たんばかり足踏しつゝあり。」

「さらば、勝手に幕を上げしめよ。若し身仕度間に合はざれば、見物は口を開きて我身を待つべきに。」ナナは氣色を損ねしが、又心靜めて皇子等の方を振向き、微笑みつゝ、

「實に待つ人は五分間の靜き會話も爲し得ぬなり。」

ナナは漸くに化粧し終りて突と椅子より立つや、傍に立ちし衣裳方の老女はキナスがまとふべき薄羅を取上げ、「見物の待ちあぐみて在れば、疾く纏ひ給へ。」

いざとて、ナナは聊かの恥らう氣色もなく、颯と纏ひし肌衣を脱ぎ捨てゝ、老女の方に其の腕を差伸しぬ。

一同は覺えず息を凝らせり。皇子は半ば閉ぢたる眼にて鑑定家の如く彼女が美しき頸と胸のあたりを打眺むれば、侯爵は自づと其の首を左右に振動しつ。伯爵は何物をも見まじ

と一心に俯向きて敷物の模様に眼を注ぎたり。

彼は自ら身中の魂の今は全くナナが美しさに魅せられたるを知りぬ。彼は娘盛りを尼寺に送りたる其夫人と一人の娘を設けて、汚れなく寂しき家庭を作り、世の悪しき事には全く其の身を遠ざけしかど、折節或る心の亂れに苦しめられぬ。そは彼が猶母の手に養はれし少年の頃、ふと浴みせる下婢の美しき肌を覗見たる時の追想にして此に四十年の長き道徳的生活の中に端無くも妖艶極りなき女優の肌を目撃しては、彼の過去りし時の光景忽ち眼前に髣髴たらざるを得ざりしなり。伯爵は早や舞臺に出でて舞ひ且つ歌へるナナの姿を追行きて、獨り道具立の隙間より怖しく其の瞳子を定めぬ。

フートライトの光に舞臺のみ殊更に明るければ、圓頂閣をなせる劇場は却りて薄暗く、此方を向きて見物せる幾萬人の顔は怪し氣に動き、空氣は沈滯して黄く色附けるが如し。突然已れを呼ぶ聲に伯爵は驚きて顧れば、そは嘗て此の劇場にて始めて逢ひたるフィーガロ新聞の劇評記者フォーシュリーにして、又先頃はわが夫人の宴會にも來合せたる男なり。フォーシュリーは伯爵を誘ひて殘りなく樂屋の二階を案内すべしと云ひぬ。

彼等は廳て屋根裏なる或る化粧室の前を過ぎんとせしが、フォーシュリーは突と進み入りぬ。ナナが室の美しきには似ず瓦斯點れる狹く低き屋根裏には光取りの窓あり。盥水桶なぞ取散され、石鹸の水溢れたる床の上には二人の女俳優立ち居たり。

「伯爵よ、疾く入り給へ。クラリッスは御身に接吻すべしと云へり。」

とフォーシュリーは内より呼はれり。

伯爵は進入りて打驚きぬ。意外にも老いたる侯爵ド、シューアールが何時の程か此の室にありて、而も嬉し氣に、若返りたる態にて椅子に倚れるを見たりしなり。彼は伯爵夫人の父にて嚴格なる人と思ひしを、何とて此等の女俳優には戯れ居しぞ。一人は他の女俳優の耳に囁きて、

「シモンよ、御身は今宵彼の爺と行くべき心か。」

「否、決して。」とシモンは寧ろ聞えよがしに云ひぬ。

「クラリッスよ。此の紳士に接吻せぬか。」とフォーシュリーは又伯爵の方を顧み、「彼女は美しからずや。御身に接吻したしとなり。」

「伯爵閣下、御身なるが故ならず。フォーシュリーの君が無理に強ひ給へば……。」とてクラリッスは突と伯爵が頬髯に接吻して室の外に馳け去れり。

シモンも共に出で行かんとするを、老侯爵は追ひ縋りて何やら物言はんとす。劇評家は冷笑ひつゝ其の後に續きたれど、伯爵は茫然として取殘されたり。彼は猶夢心地より覺め遣らず、危氣に長き梯子を下り來りしが、突然舞臺には幕引下されたりと見ゆ。拍手の音轟然として起り、人々は衣着換ふ可く已が室に急げり。漸くにして梯子を下れば、恰も舞臺より歸れるナナが皇子の手を取りて、

「少時、五分程なり。待せ給へ。」と囁けるを見ぬ。

皇子は頷附きて舞臺の方に歩み去りぬ。伯爵は四邊に人なきを見て、突と後より追附き、矢庭に其の肩に接吻せり。

ナナは驚き手を上げて振拂はんとし、伯爵なるを見て僅かに、

「あゝ、我身は驚かされぬ。」と微笑しが、此の優しき微笑は、今宵は折惡し、軈て好き時の來るを待ち給へと云はぬばかり、胸の底深く祕めたる情を通はすが如く見えぬ。ナナは語を繼きて、

「伯爵よ、知り給へりや、我身は閣下が折々行き給ふと聞くかのオルレアンに近き田舍に地面を買へり。若きジオルジは我身に閣下の事を語りぬ——閣下は彼を見知り給ふ筈なり。

都は折惡し。田舍の別莊に來て給はれ。」

伯爵は無謀なる最前の擧動に心恥かしく、叮嚀に腰を屈め、いよいよ夢心地の足元危くも皇子の後に續かんとて、化粧室の前を過りしが、かの老侯爵は又も女を引捕へて戯れんとするにやあらん、怒り罵る女の聲洩るゝを聞きぬ。

疲勞れし俳優等は外套引纏ひつゝ、早や一人一人歸り行くなり。舞臺の瓦斯は盡く搔消されて、夜番の者提灯持ちて見巡り始めしが皇子は座の支配人ボルドナーブと猶ほ暗き舞臺に立ちて、何やら物云ひつゝナナが來るを待ちぬ。ボルドナーブは皇子の一行を案内して、窃に樂屋の裏口よりパッサージ・デ・パノラマの露地に出でしめたり。露地より街に出れば、皇子は疾く箱馬車の中にナナを拉して去りつ。老侯爵も先程の女と食事すべき臘ろの望みを抱きて馳れり。伯爵ミュッフワは悄然として唯一人歩みて歸るべしと決心しぬ。今彼が心の煩悶は終りしなり。四十年の長き嚴格なる生涯は忽ち崩れて此に新しき一紀元を生ぜしなり。並樹の大通を歩み行けば、行過ぐる車の響、忽ちナナの名を呼ぶ喝采の聲となりて彼が耳を聾せんとし、道傍なる瓦斯燈の灯影を眺むれば、豊肉なる腕、白き肩せるナナの姿幻影の中に現れて、彼が眼の前に舞ふなりき。

第三

伯爵ミュッフワが其の夫人サビンと令嬢エステルを伴ひて、レ・フォンデットなるユーゴン老夫人の許に到着せしは昨日の夕なりき。ユーゴン老夫人は聞え好き代言人の妻なりしが、久しき以前寡婦となりてよりは、此の都に遠き片田舎に引籠りて、陸軍士官となれる長男のフィリップと、法律の學問すべく巴里に赴きし次男のジオルジと、扨ては親しき伯爵の家族等のたまたま來り訪ぬるを此の上もなき樂しみとせしなり。午餐の鈴は今一同を廣き食堂に呼び集めぬ。常に淋しく嚴格なる顔せる老夫人は嬉しげに微笑みつゝ、

「眞實を云へば我は最早御身等を待受けてはあらざりき。田舎の美しき時節は已に過ぎ去りたれば。」と窓の外を指しぬ。

九月も半なれば芝生の上なる木々の葉已に黄み初めて、曇りたる日の遠き田舎の景色は、憂欝なる平和の中に横はれり。

「老夫人よ。何時も〳〵御身の好意に背きしは我が罪とのみ思ひ給ふな。去る頃も已に行李まで備へて出發の仕度せしが、夫なる伯爵の、突然役目の急用起りし爲めに妨げられしなり。」

と伯爵夫人は答へぬ。

「されど今度はいと仕合多かり。我等は御身達の外に程なく二人の紳士を待受け得るなり。我兒ジオルジが巴里にて知己となれるフォーシュリー、ダーグネと呼べる二人の紳士を招待したれば。御身達は其の人々を知り給へるか。」

ユーゴン老夫人は更に椅子を進めて、

「其の上にも、此年こそはかのド・バンドーブルの君も來給ふべけれ。彼の人は已に四五年前より我等を訪はんと云ひ居れば。」

會話は此の男の事より轉て巴里の街の浮世話に轉ぜしが、其の中にステーネルの事も云ひ出されぬ。老夫人は忽ち思ひ起せしが如く、

「おゝ、ステーネルとは何時ぞや御身の家にて出會ひたる、かの肥りし銀行頭取にはあらずや。實にかの老紳士は怖しき事する人なり。彼は此度何とやら云へる女俳優の爲めに此處より一リーグ餘り隔りしシュー川の邊に別莊を求め遣りしとて、近所の村人はさま〴〵好からぬ噂を爲しつゝあり。」

「さては！　其の別莊はステーネルが求め遣りしか。」と伯爵は驚きたる態なりしが、ジオルジは口に當てたるコップの陰より鋭く伯爵の顏色を窺ひぬ。

「ジオルジ、汝は今朝方園丁が語り居たるを聞しなるべし。かの女俳優の名は何とか云ひし……。」

母の問ひたれど、ジオルジは思出し得ぬ態をなしぬ。

「ナナ――ヴァリエテー座の女俳優ナナと云ひしにはあらずや。」と突然伯爵の夫人サビンは叫べり。

「ナナ、然なり〳〵。實に忌むべき女なるよ。」と老夫人は心の不快に堪へぬが如く、「ジオルジよ、園丁は彼女が今宵別莊に來るべき由を語らざりしか。」

伯爵は再び打驚きしが、傍なるジオルジは慌忙てたる調子にて、

「否、母上。彼女は明後日ならでは到着せずと。少時前なり、余は確に馭者の語れるを聞きぬ。」

「何れにもせよ。腹立しく思ひしは愚なる事なりき。されば、吾等は若しや散歩の折なぞに出會ふとも、唯だ心すべきは彼樣なる女には決して見向きだにせぬ事なり。」

老夫人は心を靜めて再び樂しき談話に耽りしが、軈て深き氣遣に襲はれぬ。そはジオルジが俄に重き頭痛を感ずればとて、其の寢部屋に引籠りし事なり。彼は寢臺の上に横はりしが、晩餐の鈴鳴りて、伯爵の妻の食堂に入るを認むるや、突と立ちて音せぬ樣に身支度し、窃に窓より戸外に逃れ出でぬ。早や夜にして小雨降り居たり。

ナナがラ・ミニョンなる別莊に來るべきは實に此の夕暮なりしなり。五月の頃ステーネルが此の別莊を求め與へし以來、ナナは唯ひたすらに赴見んとしたりしが、座の支配人ボルドナーブが一日の暇さへ許さゞりしかば、一月二月と打過ぎたりき。いまは堪へやらず、ナナは此の月の十五日には是非にも行くべしとて、ステーネルを始めヴァリエテー一座の女俳優一同にも招待狀を發せしが、此の期日に先立つ事二日、突然十二日の日に出立ちぬ。下婢のゾエーと唯だ二人何人にも認められず靜き田舍に此の二日を過さん事の如何にも嬉しく思はれたればなり。俄に慌忙てゝ旅の仕度し、巴里の停車場に至りて叔母ルラの許に、其の預けたる兒ルイを連れ來よと知らせて、オルレアンに着してよりは三リーグ餘りを遲き田舍の馬車に乘りぬ。

老いたる馭者に向ひて、わが別莊は猶見えざるかと絶えず問ひ試みしが、田舍道を軈て

小高き岡に上れば、忽然として灰色なる空の下に、渺茫たる野の眺望は、忽ちナナを車上に雀躍りせしめぬ。彼女は未だ一度も麥畑の美しさを見たる事無かりしならん。茂れる木蔭を過ぎて、漸く別莊の鐵門に達すれば、身長高く痩せたる園丁耳門を開けて出迎へたり。

別莊は伊太利風の建物にて、久しくナープル市に在りける英國の富豪の建てしなりとか。狂喜せるナナはゾエーが呼吸急しくも追ひ附き得ざりし程足早く、屋根上なる露臺に上りて四邊の景色に見惚れしが、玉葱、萵苣、牡丹菜、草苺など繁れる野菜畑を眺むるや、折からの小雨をも打忘れ、忽ち庭の小徑に走り出でぬ。

「ゾエーよ、余は草苺を摘むべし。汝は疾く皿を持て來よ。」とナナは降り來る雨の中に、裾もかゝげず佇みしが、忽然繁れる葉蔭より動き出る人影に驚かされぬ。

年頃は十七八の宛然女の如き顏せる美少年なり。

ナナは愈〻驚きて、「ジオルジよ。汝は如何にして我身の此處に來れるを知りしぞ、口さがなき園丁が語りきかせしか。」

彼は先程己が寢室の窓より逃れ出しジオルジなりしなり。「然り。」と彼は答へつ。「余は雨の中を走り、捷路せんとてシュー川を横切り來れり。されど何時ぞや初めて唐突に御身が

巴里の住居を訪ねし時の如く、又叱られは爲ぬかと思ひて、今まで彼處に隱れ居たりしなり。」

ナナは全濡れになりて打顫へるジオルジの姿に、そゞろ憐れみの情を動かされ、家に連れ行き暖き火を起すべしとて、其が額に接吻しぬ。燈火の光は寢室の中に輝き、煖爐の火は程なく明き焔を閃めかせしが、濡れたる彼が衣服は容易に乾くべくもあらず。さりとて、此家には今男の着るべきもの一枚とて有る事なし。ナナは詮方なく、行李の中より己れの着換ゆべき肌襦袢を取り出して、

「ジオルジよ、其の儘にては風邪引くべし。程なく汝の衣服の乾くまで、汝は我が身のもの着る事を好まぬか。而て、母御に叱られぬ樣疾く歸りたまへ。いで我身も化粧室に行きて衣服を着換へて來べし。」

彼女はゾエーに濡れたるジオルジが衣服を厨の煖爐に持ち行かしめ、化粧室より立戻りしが、少年の姿を見て覺えず驚喜の聲を上げぬ。

ジオルジは繡取りある下褌の上に、レースの飾り附けし薄羅のみを着けたれば、宛然若き娘の如くなりて、その美しき腕はあらはに、その濡れ輝く頭髪は頸の方に垂掛りてあり

しなり。

「能く似合ひたり。我が身と同じ様に痩せたる事よ。」とナナは彼が腰を抱き、恰も人形なぞ弄ぶやうに、丁寧に薄羅のボタンを掛け、或は其の裾を長く後の方に擴げなぞし、飽ず其の姿を打目戍りしが、軈て園丁が料理したる牡丹菜のスープをば兩人差竝びて食する時には、一層親しき愛情の湧き起りて遂にジオルジが事を、「愛するものよ。」と呼び掛けつ。食後の菓子の代には茶棚より見付けたるジャムの壺を取り、一本の匙にて交々食ふなりき。「あゝ、我が愛するものよ。」と彼女は食卓を傍に押出し、「十年以來余は斯くも心地好き食事をなしたる事はなかりき。」

夜は蕭條にして稍更け初めんとす。ナナは旅の疲勞にうと〳〵とまどろみしが、低く燃えたる煖爐の火に、閉切りたる室の餘りに暖ければ、突然目覺めて、窓の戸開くべく其の身を起しぬ。ジオルジは寄添ひ、ナナの身を抱きつゝ其が肩の上に己れが頭を凭せかけぬ。

今兩個が相倚りたる窓外には雨全く止みたり。清く拭ひ盡されし空の星は、飾釦鈕の如く輝き、滿月の光に黄金の敷物敷きたる平野は、犯すべからざる平和の中に包まれぬ。

ナナは已に二十年の昔巴里の都を旅立ちせしが如き心地して、今まで覺えし事なき空想

に耽りしが、ジオルジは此の間絶えずナナが心の亂れを彌增さしむる接吻を、巧に其の頸の上に續け居たりき。ナナは早や情なく少年を拒む事能はざりき。最早や家に歸るべき時間ぞと僅かに云ふのみなりしが、其の時、窓の下の古籠に飼はれし駒鳥の鳴聲聞えぬ。

「少時待て。」とジオルジはナナが耳に囁きつ。「駒鳥は燈火の光に驚くべければ。」

次の日、彼が母なるユーゴン老夫人の許には多くの客到着せしかど、彼は夜毎に寢室を逃れ出でてナナの許に忍寄るなり。ナナも今は宛ら十四五の娘に立返りし如く、老紳士ステーネルの目を忍びては、夜深く月澄む庭に戯れて、永遠に變るまじき戀の誓をなしたりき。

第四

ナナ再び巴里に歸りてより三月餘りを經たる十二月の夜なりき。伯爵ミュッフワは獨りヴァリエテー座の横手なるパッサージ・デ・パノラマの裏通を行きつ戻りつせり。今、此の

狹き道は、颯と降過る小雨の爲に表通より追込まれたる群集に雜沓せしが、摺れ違ふ此等の人々は皆伯爵の面を見て振返れり。伯爵の面は瓦斯の火影を浴びて、怖しきまで靑褪めて見ゆ。彼は顏見らるゝを厭ひ、唯ある店先に佇み、硝子戸の中に陳列されたる商品を眺めしかど、決して其の眼は何者をも見ること能はざりき。

彼はひたすらナナが事を思ひ續けたるなり。ラ・ミニョンなるナナが別莊にては、少年ジオルジの爲めに空しく心の苦しみを深くせしのみにして、いよ〳〵堪へ難き戀の悶は今全く彼を狂亂せしめぬ。今宵も伯爵はナナを見んとて其の住居を訪ねしが、ヴァリエテー座に行きしと聞き、逃さず其の歸りを待受くべしとて、彼方此方と彷徨ひつゝ早や夜も十時を過しぬ。

漸くにして彼は劇場の裏口より出で來るナナが姿を認め得たり。ナナは驚きたる樣なりしが、

「いで、我が身と腕を組みて行くべし。」と云ひぬ。

伯爵は最前より心の中に種々なる事云詰らんと企て居たりしかども早何一つ云出る事能はざりき。表の大通りに出づれば、深けたる夜の空氣心地好かりしかば、ナナは歩みて料理店カッフェー・アングレーに至り食事すべしと云ひぬ。人目を恐るゝが故に、伯爵は奥まりたる狹き一室を選び、急ぎて戸の中に隱れんとする時、隣れる室の戸を開けて出でたる男あり。

「おゝ。ナナ！」と呼びぬ。

此は嘗てナナの戀人として知られたる若きダーグネなりき。彼は早くも伯爵の姿を認めしならん、冷かに打笑みつゝ、

「あゝ。御身は遂にチュイルリー王宮の貴族までを手に入れしか。」

ナナは微笑みて、「御身は近頃如何に暮し給へる。」

「余は近き中に、眞面目なる結婚したしと思ひつゝあり。」

「御身は今如何なる人々と來給へるか。」とナナは苦々しく其の肩を搖れり。

「大勢なり。エジプトより歸り來れるレアは旅の物語しつゝあり。」

兩人は瓦斯の點りて、料理の匂立ち迷へる狹き廊下に佇立み、左右の壁に其の背を寄せ掛けつゝ差向へり。其の間を屢料理の皿持運ぶ給仕人の往來するにも係らず、ナナは男の方に首さし伸して、

「御身はかのフォーシェリーが書きたるフィーガロ新聞の記事を讀み給ひしか。」
「然り。『黄金の蠅』と題せるものなるべし。されど余は寧御身に氣の毒なれば云出でざりしなり。」

ダーグネは冷笑ふ如くナナの顏を打眺めしが、軈て伯爵の隱れ入りし戸口の方を振向き、
「御身は知らざるか。伯爵の令夫人は新聞記者フォーシェリーと姦通しつゝある事を。」
「あゝ、さもあるべし。我が身もかく疑はざるには非ざりき。かの田舍に在りし折、我等が馬車にてショーモンの古寺見に行く道すがら、伯爵始め御身等の散歩するに出會ひたりし時、フォーシェリーと令夫人の素振にて、我身は早く心附き居たりしなり。」
「さらばよ。折あらば又逢ふべし。」とダーグネはナナが手を取りぬ。

ナナは別れて室に入りしが、椅子に寄りつゝ打顚へる伯爵の姿を見て、坐ろ隣みの心に堪へぬが如く、遂にオースマン街なるそが家に誘ひ歸れり。暖き火の燃えたる室に入るや、ナナは上衣を解捨て大きなる姿鏡の前に佇み、机の上なる新聞紙を取りて、
「伯爵よ。『黄金の蠅』なる記事を見給ひしか。そはフォーシェリーが我が身の事を諷せしなりと人々は噂せりとか。」

「伯爵は言葉もなくて、靜に眼を新聞の記事に注ぎぬ。彼女の云ふ如く『黄金の蠅』と題されたり。飲酒と貧困と惡德の下層社會より生れし一女あり、恰も不潔極りなき塵塚に咲き出でし毒草の花の如く、彼女が其の妖艶なる姿をもて巴里の風紀と道德を破壞する事の如何に怖しきかを、面白く書綴りたる末に、作者は之れを『黄金の蠅』に喩へぬ。黄金の蠅はもと巴里の大道に放棄されたる屍の腐敗より發生し、太陽の光にも似たる金色燦々たる翼を輝かしつゝ、風に從つて奥深き宮殿に舞ひ入り、その翼に觸るゝ人々を即座に毒死せしむとぞ。
「伯爵よ。御身は如何に思ひ給へる。」突然ナナは問出せり。
伯爵は答ふる事能はずして、僅に眼を上げて眺むれば、此の時ナナは猶姿見を離れず而も其の周圍の手燭には盡く火を點じ、薄き下着一枚になりて、自ら鏡中に映ずる己れの姿に見取れつゝあるなり。彼女は屢昂然と身を反し、幾度となく豐艶なる腕を左右に打振れり。伯爵は默然として、燦く燭影に包まれし此の女優が嬌態を熟視せしが、忽ち慄氣立つばかりの恐怖に打たるゝと共に、續いて譬へん方なき痛苦の胸中に湧出るを覺え、其の手に握れる新聞紙を膝より落せり。

「伯爵よ。令夫人は先頃より旅行し給へりと聞きしが。」とナナは振向きて、「明朝は歸り給へるにや。」

伯爵は猶ナナの姿より其の眼を轉ずる事能はず、只だ僅に頷附くのみ。彼女は又問出せり。

「御身は何年ほど連添ひ給へるか。」

「十九年ほど。」と伯爵は答へしが、苦々しき顏して、「余は妻の事語合ふを好まぬは御身の能く知る處ならずや。」

「然り〳〵。されど何故に好み給はぬか。フォーシェリーは種々なる事を我身に告げぬ。御身は其の令夫人の上には全く無頓着なりと。そは眞實なりや。」

ナナは伯爵が頷附くを見て、危く轉ばんばかり打笑ひぬ。先程カッフェー・アングレーの廊下にて姦通の噂聞きたるより、ナナは今鏡を離れて煖爐の火に其の身を曝しつゝ種々に伯爵を愚弄せんとせり。始めの中は流石明白には云出でざりしが、次第々々に兩人の感情の激昂るにつれ、ナナは遂に凡ての事實を云ひ放ちぬ。

「實に愚なる人よ。疾く去りて御身が妻の許に行き給へ。御身が妻はテーブー街なるフォーシェリーの家にありて樂しみつゝあるならん。疾く行け。疾く行き給へ……。」と叫びしかど、最早や此の以上云罵しる事能はずなりぬ。

伯爵は拳を握締めて牡牛の如き呻き聲を發し、苦痛の餘りナナが口を打据ゑんとせり。彼は全く狂人となりて轉りつゝ室の外に馳出しぬ。

ナナは流石に怖しくなりて、引止めて慰めんとせしが已に效なかりき。

「詮方なし。彼が其の妻盗まれたるは、敢て我身の罪にはあらざるを。」と暖き火に飽くまで其の身をあぶり、柔き寢床の中に飛び入りぬ。

哀れ、伯爵は街の上にて、はら〳〵と降來る村雨に襲はれたり。敷石の上に滑りて、漸くに起上りし時、茫然と打仰ぐ大空には大なる黑雲月を掠めて漂へるを見ぬ。彼は暫兩手をもて其の濕れたる顏を蔽ひつゝ啜り泣きせしが、巡査の姿近くを見て、瓦斯の火影なき暗き道を選みて彷徨ひ、何時かテーブー街なるフォーシェリーが住家の前に立ち出でぬ。ナナが家よりは僅か七分間ほどにて達すべき距離なるを、今ツリニテー寺院の鐘は深夜の二時を打てり。月は全く墨より黑き空に隱れ、氷の如き雨は霏々として降り增るばかりなり。伯爵は濡れたる總身を顫しながらも、僅かに人家の軒に佇みつゝ、瞳子を凝して見覺

えあるフォーシェリーが二階を打眺めぬ。四角なる窓の帷幕は朦朧たる燈影を包みしが、忽ち明白ならぬ人影の搖めくを認めたり。されど其は果して人影なりしか、將た幻影なりしか、彼は寒き雨に打たれつゝ、空しく三時四時の鐘を聞きたりしが、夢の如き窓の灯さへ忽然消えて、今は早や何物をも辨じ得ぬ暗黑とはなれり。

せん方なく伯爵は佇みし戸口を去りぬ。されど再三立戻りし後よろめきつゝも今度は心殘すまじと表の大通に出づれば、雨の止みたる夜は早くも憂鬱なる曇天の朝となりぬ。彼は彷徨ふ道すがら、彼方なるツリニテー寺院の屋根を望みて、そが階段の下に馳け寄り、哀れなる聲して、

「主よ。助なき我等を見捨て給ふな。」と祈禱の涙に暮れしが、寺院の中は寂として物音なく、恰も朝早くして神は未だ此處に來給はざるが如し。伯爵は立ちて再び街に出るや、行くべき心もなくて、自らナナが家に辿りつきぬ。

戸口は猶閉されたり。下婢ゾエーの起出るを待ちて、漸く内に入るを得たりしが、立出しナナは甚く氣色を損ねたる樣にて、

「おゝ、御身は一夜彼等を張番しつるか。最早や此の家に用なし。疾く去り給へ。」

伯爵は云ひ甲斐なく其の眼を潤すのみ。かゝりし時突然戸を開けて入り來りしものあり。ナナは其方を見返りしが、

「ステーネルの君か。何用ぞや。」と同じく荒き調子にて叫べり。

老紳士は慌忙つゝも、「余は……余は持ち來れるなり汝が所望せしものを。」

「何とや。」

「金子、一千法。」彼は躊躇ひつゝ狀袋を取出せり。

「さては御身は我れに金を惠む心か。さらば〳〵我が爲す樣を見給へ。」とナナは矢庭に狀袋を取りてステーネルが顏に投げ付け、

「疾く去り給へ。我身には已にいとしきものあり。最早や何物をも欲せざるなり。見よ彼處を……。」

彼女は宛然悲劇を演ずる如き身振して隣れる寢室の戸口を指させり。

兩人は立ちすくみたる儘啞然として其方を眺むれば、寢床の上には醜男なる滑稽役者フォンタンが甚と心地好げに横はれるを見ぬ。

第五

ナナは何時の頃よりか同じヴァリエテー座に出勤する醜きフォンタンを愛せしなり。彼女は遂にオースマン街の住居をたゝみて、其の家財道具を賣拂ひたる一萬法の財産を彼に托し、モンマルトルの片隅なるベロン街に移りて、四階家の小き一室を借り受けぬ。

二人は唯だ仲好く暮すべしと約したる此の生活は、最初の程こそ實に樂しきものなりけれ。フォンタンはナナが兒のルイを見ては、

「愛らしき兒よ。我が身を父と呼ばぬか。我身は今日よりは汝が父なるぞ。」と小さき其の頭を撫でさすりて打喜び、或ひは己が友達を招きし席上にては、人前をも憚らず音高くナナが差附くる唇に接吻して戯るゝ事もありけり。

ナナは前後の考へなくひたすら醜き情夫の愛情に打溺れつ。毎朝、汚れたる衣着て、市場へ肉野菜など買ひに行く事さへ厭はざりしが、程なくして忌はしき爭ひは二人の間に引起されぬ。

或夜、二人は唯有る小芝居を見んとて出で行けり。その座の舞臺に出づべき女優をばフォンタンが以前より見知りしなりとか。二人は歸途に菓子を買求めて、一時過ぐる頃モンマルトルの我家に戻りしが、殊のほか寒き夜なりしかば、直に寢床の中に入りつゝ、互に菓子をば貪りつゝ、見たりし女優の事を語り合ひぬ。

フォンタンは彼女を此の上なく美しと云ひ、ナナは然らずとて少時互に云爭ひしが、フォンタンは日頃に似ず甚くも氣色を損ねたる態にて、突然寢床より起ち、

「さらば。余は是れより骨牌すべく外に行くなり。五百法を余に與へよ。」と叫べり。

「否、否」とナナは頭を振りぬ。

フォンタンは烈火の如く憤りて、矢庭に手掌もてナナが顏を打据ゑたり。ナナは泣きぬ。此の爭ひありてより、フォンタンは全く別人の如くなりしなり。彼は聊かの事にも手荒くナナを打擲し、其の預りたる財産を奪取りて夜毎賭博に耽りたりき。哀れ、ナナは空しき涙の中に半年あまりを過せしが、猶醜き情夫を捨つるに忍びず、或る夜遂には其の眠るべき宿をさへ失ふに至りぬ。

されど此の痛しき窮境は、やがて奮然として彼女を起たしむる好き機會を作らしめたり。そは一夜を街に彷徨ひて、久しく足踏だにせざりしヴァリエテー座にて、此度『少公爵夫

人』なる狂言の演ぜらるゝ由を聞きたる事なりき。

彼女は嘗てラ・ミニョットの別莊に在りし時、一座の女優等を招き、かの老紳士ステーネル及び愛らしき美少年ジオルジ等と、幾輛の馬車を連ねて、綠深きシャーモンの古寺を見物するや、この古寺を支配する老尼の犯すべからざる尊き風采、近き農民等の崇拜する態を見て、何となく一種の深き感慨に沈められたる事ありけり。ナナは乃ち少き公爵夫人に扮し、己れの夢想せし高貴なる婦人の風采を舞臺に演じ、以て巴里の流行を呼起さんと思立ちしなり。彼女は先づ狂言の稽古を見んとて、人知れずヴァリエテー座に赴きしが、望む處の役割は已にローズと呼べる他の女優の扮する事に定められてあり。されども幸にして此處に來合せたるはかの伯爵ミュッフワなりき。

ナナは舞臺の後なる樂屋の一室に入りて伯爵に面談せんとしぬ。此處は晝と夜との差別なく瓦斯の灯點れる廊下端れの靜き室なれば、誰とて窺ひ知るもの無かるべし。輕く扉を打つ音にナナは腰掛けたる椅子より立ち上りて、

「這入らせ給へ。」

進み入りたるは伯爵なり。彼女は人の覗き見る事もやと、後の窓を閉せしが、伯爵は默

然として云出すべき語もなく唯だ彼女の面を凝視むるのみなり。ナナは先づ微笑みて、

「好くこそ此處には來ましたれ。」と云ひぬ。

伯爵は此の優しき聲を聞きて、其の身を顛はさぬばかりに感動せり。彼はナナをば恭々しくマダムと呼び掛けて、此處に再び相逢ふ事の如何に幸ひなりしかを云ひ續けぬ。ナナはいよいよ心の望みを云ひ出すべき時ぞと、猶も優しき聲を作りて、

「伯爵よ。心を和らげ給へ。吾等は二人とも全く事を誤り居たり。されども互に打解けたる今日よりは、末長く親しき友として我手を把り給へ。」

伯爵は過ぎし日の如くに、猶ほナナが事を思ひ續け居たりしなり。此の優しき聲を聞き、此の美しき面を見ては如何でか心の騷ぎを止め得べき。彼は床の上に膝を突き、兩手にてナナが腰を抱きつゝ、

「ナナよ。御身は最早や能く我が身の心を讀み得べし。御身は唯だ一言、我が心の望みを聽きたらんには、御身が望む如何なるものをも與ふべし。我が身は已にモンソーの公園に近き大なる空屋敷を見附け置きたり。唯一言我が心の望みを聽きたらんには我身は馬車、寶石、美衣……凡ての財産を御身の許に捧ぐべし。」

彼は早や泣かぬばかりなり。ナナは殊更平然たる態を粧ひて、

「否、否。我が身は決して斯る富をば欲せぬなり。よしや御身は此の巴里全都を上げて我が身に與ふと云ふも、我が身は常に否とのみ答ふべし。賤しき金は何處に行きても得らるべきものならずや　伯爵よ。我が身の望む處は斯るものには非ざるなり。」

伯爵は俯向きたる眼を上げて彼女を見たりしが、何とも問ひ出す事能はざりき。

「伯爵よ。」とナナは再び口を開きぬ。「我が身の望むものをば御身は恐らく與へ得ざるべしと思ふなり。そは御身が權力の及びがたきものなれば……されど、伯爵よ。我身は如何にかして、今一同が稽古しつゝある狂言の、最も氣高き女形に扮し度く思へるなり。」

「如何なる氣高き女形ぞや。」と伯爵は驚きたる樣にて問へり。

「知り給はぬか。少公爵夫人エレンの役なり。人々は此度の狂言にて我が身が唯だ華やかなる女形ジエラルヂンの役を望めりとのみ思はゞ、それこそ大きなる誤なれ。斯る華やかなる女形は已に幾度となく勤めたり。あゝ、我身の勤めたるは何時も〳〵輕々しき女形のみなりき。我身は決して氣高き貴夫人には扮し得ずと人々の思ひなせるは、疑ひもなく我が身の素性を賤しと侮れるが故なるべし。見給へ。此れにても猶我が身は氣高き貴夫人に扮し得ぬか。」

云ひつゝナナは嚴かなる身振して、少時室の中を彼方此方と歩み廻りしが、再び椅子に身を寄せて、

「伯爵よ。彼の貴夫人の役は御身も知り給へるが如く、已にローズが勤むる事に定まりつつあるなり。されど我身は如何にかしてローズより彼の役割を奪取らんと思へるなり。我が爲めに御身は一臂の力を貸し給はぬか。」

「されど、そは御身自らも云ひしが如く、全く我が力の及ばぬ事なれば……。」と伯爵は唯だナナが面を打目戍るのみ。

「其れには能き仔細あるなり。御身は我が爲めに此の事をば座の支配人なるボルドナーブに掛合ひ給へ。今、ボルドナーブは激しく金の必要に迫まられつゝあれば、容易く御身の語を聽き入るべし。伯爵よ、何卒、何卒……。」とナナは繰返しぬ。

されど伯爵は唯だ切なげなる面持するのみなり。ナナは云甲斐なしとや思ひけん。聲を荒らげ、

「我が身が此れほどに望めるものを。御身はかのローズを恐れ給へるか。」

伯爵は目に涙を浮べしが、猶答ふる事能はざりき。ナナは憤りて突と室を出で、手荒く戸を押戻せしが、何を思ひ返してや、忽ち戸を引開け、再び伯爵の傍に進み寄りぬ。譬へん方なき情籠れる聲は其の美しき唇より響き出せり。

「伯爵よ。御身は先程何とか云ひ給ひしよ。我が身の爲めに大きなる邸宅を見付け給ひしとか。」

「然なり。」と伯爵は僅に面を上げぬ。

「何處にや。」

「アヴニュー・ド・ビリエーの大通りなり。」

「寶石と馬車をも與へ給ふとか。」

「然なり。然なり。」

伯爵は機械の如く頷附くのみなりしが、此の時ナナは突然伯爵の頸に抱き附きて、其の面の上に處定めず接吻し、軈て開けたる戸の外に押し遣りぬ。伯爵は早や恍惚として強き酒に醉はされたるが如く、よろ〳〵とばかり蹌めきつゝ舞臺の方へ行かんとすれば、座の支配人ボルドナーブに礑と行き合ひたり。

二人の間には如何なる話の取交されしか。兎に角にナナが望める公爵夫人の役割は忽ち變じて彼女のもとに定まりぬ。ナナは遂に其の宿望をとげたるなり。

久振にて舞臺に現るゝや、彼女は再び此上なき歡迎と喝采を得たりき。今や家々の窓にして彼女が肖像をかゝげざるは稀に、幾多の新聞紙にして齊しく彼女が名を記載せざる日とては無かりしが、此れと同時に、伯爵ミュッフワはナナが己れの押難き愛情を諾ひし報として、月々十二萬法の富を與へて、モンソー公園に近き大邸宅の女主人たらしめたり。

あゝ！　わづかに昨日まで、醜き滑稽役者に打擲されしナナは、此處に忽然として馬車、寶石、美衣――諸有る浮世の榮華に包まるゝ身とはなりしなり。

ナナは斯く意氣揚々として、全く王侯に類する豪奢の中に一ケ月あまりを過せしが、或る日の朝、獨り廣大なる應接室に在りける時しも、下婢ゾエーは慌忙てたる樣にて、一個の美少年を案内し來りぬ。彼女は一目見て、

「あゝ。汝はジオルジならずや。」と覺えず驚きの聲を上げたり、ジオルジは變らぬナナが姿を見て其の美しき眼に嬉し涙を浮べ、物をも云はで接吻せんとせり。

「狼籍すな。汝は狂氣せるか。伯爵は此の家にあり。ゾエーよ。疾く彼を階下に連れ行け。」

ナナはゾエーをして、漸くに彼を階下の食堂に連れ出さしめぬ。されど彼は仇氣なき調子にて、

「あゝ。御身は曾て田舍に在りし時の如く猶ほ我身を愛するか。」

「云ふまでも無く……。」とナナは答へぬ。

ジオルジは今日が日まで久しく田舍の母親が許に引留められし悲しみを語りぬ。母なるユーゴン老夫人は其の子の墮落を氣遣ひて其の後は決して巴里に出る事を禁ぜしが、今や僅かに其の許を得てしより、彼は直に汽車より馬車を命じて一散にナナが家に來りしなりき。

されど、ナナが心は已に全く過し戀をば忘れ居たり。彼女は能くジオルジの美しき形を喜びたれど、今は唯だ互に親しき友として交るべきを欲しぬ。

「今日の如く午前は甚だ折惡し。客に接するは四時より六時の間と定めたれば、其の頃に訪ね來よ。」と親し氣に彼が額に接吻しぬ。

一週日あまりは事なく過ぎ去りたり。或日ジオルジは打顫へつゝナナが手を取りぬ。

「我が身は如何にすべき、母親は我身を意見せんとて、兄なるフィリップを此の家に送るべき由なり。」

「兄上とは如何なる人ぞ。」

「ヴァンセーンの軍隊に奉職する陸軍中尉なり。」

「氣遣ひすな。如何なる怖しき人にても、必ず我身一人にて能き樣に取扱ふべければ。」と

ナナは全く事も無げに云退けしが、程もなく召使ひはその人の來れるを告げぬ。

「ジオルジよ。汝は此處に止りて必ず室の外に出でたまふな。譯もなく我身は事を濟ますべし。」

ナナは少しも打騷ぐ氣色なく。靜に應接室に進入りしが、ジオルジは早や心も心ならず、忍び足して閉されたる室の戸口に摺り寄り、鍵穴より窃に内なる樣子を窺ひぬ。兄フィリップの鋭き聲にて、「幼き兒」「家族」「名譽」など云ふ言葉のみ斷れ〴〵に漏れ聞えしかど、ナナの答ふる聲は更に聞えず、室内は忽ち森閑として恰も女主人は死せるにあらずやと思はるゝ程なり。ジオルジは限りもなく胸の動悸を高めしが、其の時、忽然異樣なる響起れり。ナナは頻に啜り泣きせるには非ざるか。彼は危く戸を破りて突入らんとせしが、下婢ゾエーの進み來るを見て、驚きつゝ其の身を隱しぬ。

されど暫時して彼は再び鍵穴に耳を押附くれば、内の様子は忽ち一變して、細かに語らう聲のみか、やがて華やかに笑ふ聲も打交れり、

「如何に成り行きしか。」と彼は軈て兄を送歸したるナナを捕へて問ひぬ。

「如何にとは何ぞや。汝の兄は誠に好き人なりき。」

「さらば、何事もなかりしか。」

「云ふまでも無し。汝は我身が云ひ爭ひせしと思ひしか。」

「否、されど……。御身は怪しく泣き給ひし樣に思はれたれば。」

「何とや。」とナナは驚きつゝ彼が面を見戍りしが、「愚なる事よ、何とて我は泣くべきぞ。凡ては事なく纏まりたれば兄御は此れより親しき友として屢我が身の許に訪ね來べし。」

ジオルジは驚きて再び其の顏色を變へぬ。されど。其の後のフィリップは最早や弟を意見すべき爲には非ずして、ナナと親しく打語らんが爲めに來れるなりき。

第六

實にナナは今至る處に戲るべき友と、散ずべき富とを有する身の上なりき。毎日朝の十

時に目覺め、化粧室に入りて浴みせし後は、十一時に理髮師をして其の髮を梳らしめ、午餐過ぎしよりは昔の話相手なる老婆マロアールを招きて骨牌を遊び、時としては文學上の嗜好ある事を誇顏に、獨り小說新聞など讀む事あり。五時となれば、夕化粧して客を招くか、さらずば馬車を命じて、公園、劇場、料理店なぞ、人の多く集る處に夜を更し疲れたる身體を寢床に投入れて、昨日に變らぬ晩き翌朝を迎ふるなりき。

されど、此の限りなき榮華の生活も久しからずして、堪へ難き單調に陷りたり。彼女は何時としもなく遊樂に疲れし心の底深く、怪しき不安と寂寞を感ぜしが、軈ては意味なき死の怖れに襲はれぬ。

或夜、そは早くも一時を過ぎたり。薄暗きランプ唯だ一個點されし室の中にて、ナナは暗き影に其の顏隱したる伯爵ミュッフワに向ひ、

「伯爵よ、御身は死と云ふ事を信じ給へるか」と。安からぬ樣にて問ひ掛けしが、又更に

「我身も早晩天に行かざるべからざるか。おゝ、我身は死を怖るゝなり、死を怖るゝなり。」

斯く叫びしのみには止まらず、彼女は家の戸を明放しながらも猶少しの物音を怖れ、不圖鏡に映る己が姿を認めては、舊の如く其の美しさに見取れは爲で、兩手もて其の頰骨を

押え、

「人の身體の死したる時は、如何に醜くなるべきか。」と戰慄きつゝ呟くなり。

聊かの恙にも、ナナは直に死の襲ひ來らん事を怖れ、事々しく醫師を招きて、其の傍に侍らすを常とせしが、此の安からぬ悶の中にも彼女は軈て又驚くべき前代未聞の豪奢を空想しぬ。そは過し世には如何なる女王も爲し得ざりし、金銀珠玉をもてちりばめたる寢床を造りて其の中に眠らんと欲せしなり。而して此の計畫の豫算は實に五萬法の巨額なるを。伯爵は來るべき新年の贈物として其の費を負ふべしと約束せり。

今は十月の十五日にして、彼女が洗禮受けし日の祝にと、多くの人々は皆其れ〴〵の贈物をなしぬ。ジオルジが兄なるフィリップは堆高く黄金を盛りたる尊き陶製の皿を提へてナナが邸宅に來りしが、折好くナナは唯一人卓子の前に立ちて、其の上に載せたる種々の贈物を驗べつゝありき。

「おゝ、美しき事よ。されど斯る物に多の財を費さんは餘りに心なき業にはあらずや。如何なるものか見せて給はれ。」

「注意け給へ、破れ易すきものなれば。」とフィリップは答へしが、此の一語は忽ちナナの

心を怒らせぬ。彼女の手は鐵道驛夫の如く荒々しと思ひつるか。されど手渡しに受取らんとする時、突然尊き贈物は床の上に落されぬ。

「おゝ、粉微塵になり了れり。」とナナは叫びしが、忽ち高聲に笑ひ出しぬ。かくも尊き品物の譯なく床の上に打破されし樣の如何にも可笑し氣に思はれたりしなり。

彼女は重ねて打笑ひしかど、フィリップが押へ難き涙に其の目を潤せしを見て、優しく彼が首の上に己れが手を投げ掛け、

「許し給へよ。されど一度造られし品物は皆破らるべく造られしものなるを。見よ、此の扇とても……。」と机の上なる扇を取り上げ、手荒く左右に引開けて見事なる絹を二つに裂き捨てぬ。

彼女は誤りてフィリップが贈物を破りたればと、續いて机の上なる凡ての贈物を取りて盡く此れを打破れり。呆然たりしフィリップは忽ち感激して、唯だ嬉しさの餘り、犇とナナを抱きて其の唇に接吻しぬ。ナナは振拂はんとはせず、却りて親し氣に其の身を許し、情深き調子にて、

「御身よ。我が爲めに明日の朝十ルイの金を屆け給はぬか。掛取りの商人は屢我が身を

苦しめつゝあるなり。」

フィリップは青褪めたる顔せしが、最後の接吻をナナが額に試みて、

「爲し能ふ限りの力を盡すべし。」と答へぬ。

兩人は怪しく少時語を絶しぬ。ナナは手づから亂れし髪を撫上げし時、寄添ひたるフィリップは物靜に、

「ナナよ、希くは我が身のために結婚を許したまはれ。」

此の有樣をば始めより殘りなく覗ひ知りたるは、弟のジオルジなりき。彼は此の日兄に後れて同じくナナの邸宅に訪ひ來りしが、一室の中に兄フィリップの聲を聞きて、窃に戸の鍵穴に耳を押附け居たりしなり。

彼は早や何處を歩みしとも知らずして、母が出京し居たるリシュリエー街の室に立ち戻りしが、一夜を怖しき嫉妬の苦悶の中に送りつ。遂には堪へ難くして巴里の街々を彷徨ひ歩き、明日も已に三時を打つ頃に至りて再びナナが家に進入りぬ。

突然、驚くべき報知の彼が母なるユーゴン老夫人の許に達せしは恰も此の折柄なりき。兄フィリップは此の三箇月間に軍隊の金庫より一萬二千法の金を盜出せし事の露見して、

昨夜捕はれて牢獄に投ぜられたりと。老夫人は我子の賤しき女優と親める由を聞知りて何事か誤ちの起りやせんと自ら此巴里に滯在せしなれど、かくも恥べき結末の來るべしとは夢にも思ひ知らざりしなり。彼女は椅子の上に其身を沈ませ、少時は唯茫然と途方に暮るるのみなりしが、猶我が手にはジオルジの存するを思附きて、僅に氣强く立上るを得たり。

彼は老いたる母の爲めに猶何事かを爲し得べし。よろめきつゝも老夫人は二階の室に進みしが、室は已に空しかりき。其れのみにはあらず、夜具の布の處々引裂かれし寢床は明かに尋常ならぬ悶えの後を示し取散らされし衣服の上に椅子の覆へりたる有樣は、早くも死の苦みを豫言せるが如く見ゆ。ジオルジは疑ひもなく彼の女の許に在るならん。老夫人は眼を睜き確かなる足元にて梯子段を下り行きぬ。

ナナは今朝より、掛取の商人に苦しめられゐたりき。生活の費用は伯爵の手より巨大の金額を支出せらるゝなれど、彼女は猶日常の小遣錢に窮して絶えずフィリップの懷中を惱ませしのみか、下婢なるゾエーにも尠からぬ負債をなせるなり。彼女は今、聲高に打騷ぐ商人の催促に堪へ兼ね、何處にか金の才覺に行くべしと、心も心ならず馳出さんとする折柄、室の戸口にてハタと行き合ひたるは少年ジオルジなり。

彼が面は全く血の色を失ひ、其の眼は朦朧として怪しく睜らかれしかど、ナナは甚くも心急きたる場合とて、更に氣も付かず、

「おゝ、汝は兄御の使に來りしか。」

「否。」と答へしが、其の顏色は一層靑白くなりぬ。

「汝は幾何かの金を持たざるか。」

「否。」

「實によ、汝は乘合馬車の賃錢さへも持たざれば。我が身は今急ぎの用あるなり。」

ナナは戶口に立ちたるジオルジを押除け立出でんとせしが、彼は其の袖を引止めて、

「余は一言云ふべき事あり。御身は全く我が兄と結婚する心なるか。」

ナナは覺えず椅子に倒れて打笑ひぬ。

「余は御身の答を聞かんとて來れるなり。御身が結婚すべき筈の人は我が兄よりも此のジオルジならずして誰ぞや。」

「あゝ、何事ぞや、汝までが……。」とナナは驚きて、「我が身は何人とも決して結婚なぞは欲せぬなり。決して、決して。」

「さらばナナよ。御身は決して我兄を愛せざる事を誓ひ給へ。」

「あゝ、我身は今急ぎつゝあるならずや。我身は汝が兄より聊かの拂ひを借受けんとしたるなり。されど彼は持來らぬが故に、我身は此れより或る友の家に行かねばならず、汝は最早や好く了解せしならん、我身が勘定の支拂ひに追はれつゝある事を。」ナナは輕くジオルジが額に接吻して、

「さらばよ。」と其の儘急ぎて駈け出しぬ。

ジオルジは兀然と室の眞中に立ちすくみたり。彼は嘗て今日の如くに其の身を云甲斐なく思ひたる事なかりき。富もなく將た名もなく唯だ彼女に與へ得べきものは、此の徒らなる生命あるのみ。思ひ來れば彼女が最後に殘せし『さらばよ。』との一語は、恰も葬式の鐘の如くに其が耳の中に響き出すなり。さらばよ、さらばよ――此の悲しき聲と共に盡きせぬ過去の樂しみは今一ッ〳〵に思ひ浮べらる。かの田舍に遊びし時、我れは宛然彼女の兒にてありける如く、ナナは如何に深き愛の誓をなしつるか。されど凡ての事は早や此れまでなり。

ナナが出で行きし開けたる儘の戶口よりは階下の室にて商人と僕共の打笑ひつゝ語らう

聲の能く聞えしが一時間ばかりして、表の戸口の開く音と共に、其等の喧しき物聲忽ちハタと靜まりぬ。ジオルジはナナが商人に向ひて物言ひつゝ支拂ひせるを聞き得たり。ナナは梯子を上り來て、ジオルジが姿を見、

「あゝ汝は猶此處に居たりしか。」

叫びて其の儘寢室の方に行かんとす。ジオルジは追縋り、

「ナナよ。汝は我身と結婚せぬか。」

ナナは答へもせず、怒りの餘りにハタと戸を閉切らんとせり。

「あゝ、ナナよ、汝は我身と結婚せぬか。」

彼は片手にて靜に戸を押え、片手にて衣囊の中より何やら鋭き刄物を取出して、矢庭に其の胸を刺せり。彼は先程ナナが出行きし室の中より日頃彼女が爪切る爲めに用ひつる鋭き鋏を隱し持ちたるなりき。

ナナは驚愕して彼が手を止めんともせず。聲の限りに下婢なるゾエーを呼立てぬ。彼は寢室の戸口に立ちふさがりし儘どうとばかり跪くかと見れば其の面は見る〳〵中に青褪めたり。其の兩眼は閉されたり。紅の血は胴服の下より入染み出せり。かゝる時、突然一個の人影は戸口の方に立現はれぬ。面色青く髪白くして、黑き衣着たる老女なり。ナナは早くもジオルジが母なるユーゴン夫人なる事を知ると共に、心の底より湧出る恐怖の念に打たれつ。

「老夫人よ。誓つて我が身の爲したるには非ざるを。彼は我身に結婚せよと云ひぬ。我は否と云へり。彼は自ら死せしなり。」

老夫人は聊かの聲だも發せず、敷物の上に跪きて、凝とジオルジが顏を打眺め、皺ある手にて彼が心臟の鼓動を聞定めんとせしが、噫彼は已に死したるなり。兄は名譽を破壞されし、弟は生命を奪はれぬ。老夫人は今涙さへ出でず。怪しく輝きたる眼を上げて、しげ〳〵と四邊を見廻せり。此の有樣にナナは再び身顫ひしつゝ繰返しぬ。

「老夫人よ、誓つて我が身のなしたるには非ざるを。若し兄御の此處に在るならば、彼は委しき事情を云ひ開くべきに。」

「兄は盜みしたり。彼は牢獄に投ぜられたり。」と老夫人は鋭き聲にて云ひぬ。

ナナは早や啞然たるのみ。老夫人はナナが家の僕等をして我が兒の亡骸を馬車の中に運ばしむべく、同じく、死したる樣に其の後に從ひ行きしが、梯子の上にて突と後を振向き、

茫然と見送り居たるナナを眺めて、

「あゝ御身は甚くも我が一家を瑕つけたり。あゝ、御身は甚くも我が一家を瑕つけたり。」

と二度繰返して云ひ續けたりき。

ナナは茫然として室の中に居殘りたり。外出せし儘の手袋も帽子も取らず唯だ椅子に倒れしのみなりしが、暫くして、入り來る伯爵ミュッフワの姿を認むるや否や、手眞似をなしつゝ此怖しき出來事の始末を二十度も繰返したる末に、如何にして己れの罪なきを證據立てんかと、甚く心を苦しむる樣にて、

「わが人よ。そは我身の罪なるか。若も御身が正義の判官なりとせば、御身は我れを罪ありと宣告し給ふか。我が身は何時フィリップに向つて盜みせよと云ひたりしぞ。況やジオルジに向つて死ねよとや。彼等兄弟は自ら此處に來りて自ら愚なる事をなせしなり。さるを我が身は何となく毒婦の如くに思ひ爲されんとす。」

ナナは忽ち泣き出せり。伯爵も此の驚くべき活劇の悲みに打たれて、少時は唯だ默然たるのみなりしが、彼女の樣子の次第に物狂はしく成るを見て今は語ことまかに云慰めざる可からず。ナナは僅に心を靜め得て、

「されどジオルヂは如何になりしぞ。御身はわが爲めに疾く其の樣子を窺ひ來て給はれよ。疾く〳〵。」

「さらば。」と伯爵は止むなく帽子を取りて立出で程もなく歸來りしが、此の時ナナは窓より首差伸ばして伯爵を待ち居たり。彼は街の上より、

「ジオルジは猶全く死せしにはあらず、生命のみは救はるべき望みもあり。」

ナナは床の上に躍り上りて喜びぬ。此の喜びは如何ばかり强かりしぞ、下婢のゾエーが入口の敷物に附着せし血の痕の到底殘りなく清められぬ事を呟きたれど、ナナは猶小躍りしつゝ、「出入多き室の入口なれば自然と人の歩みにて拂ひ消さるべし。」とて早や全く氣にも止めぬ樣なりき。

第七

伯爵ミュッフワは此の悲劇に接してより、自らも深く心の怖れに打たれて、再びナナが家には來るまじ。フィリップとジオルジが身の行末は其身に取りても能き誡めなりと思ひしが或日の事、ふとナナが家より出で來る男の姿を認めて、忽ち事の譯をたゞさんとて進

み入りぬ。

ナナは憚る所なく、多くの男を引き入れて、思ふが儘に其等の人より富を奪へり。退職せる海軍士官フーカルモン、劇評記者フォーシュリーと其の從弟なる田舍紳士ラファロアーズを始め、失敗せる銀行頭取ステーネルなぞ云ふ人々は、瞬く中に皆立つ可からざる零落の中に投げ入れられしかど、而かも猶彼女は一錢の錢さへ持たぬ事屢〻なりき。馭者と僕は女主人の心を迎へ得じとて次第に立去れり。貴重なる器具は彼女が癇癪の手に觸れて打壞されざるは無し。榮華のナナは漸く狂癲の境に陷りたるなり。

此の時に至りても、伯爵は猶全くナナを見捨つる事能はざりき。彼は忌むべきナナが家より街に出る時には、自づと慚愧と後悔の涙に暮れつゝ、最早や必ず立戻らざるべきを誓ひながらも、又少時して内に入れば、身中の魂は忽ちに消去るが如き心地するなりき。ナナは伯爵を嘲りて、其の面前にても絶えず愚なる漢よと呼びたりしが、其れのみには止まらず、一夜室の中にありて面白き戯れすべしと、彼女は伯爵を床に這はせて犬の眞似せしめつゝ、手に持てるハンケチを投げて、

「それ、セザルよ。疾く拾ひ來ずば杖にて打つべきぞ。」

四這ひになり口に手布を啣へて持ち來る伯爵の有樣を見て、ナナはさも可笑し氣に打笑ひて喜ぶなり。

かゝりし程に年は過ぎたり。伯爵が新年の贈物にすべく約束せしナナが家の寢臺はいよいよ女王の玉座の如く金銀寶玉をもて飾られ、此の正月の末近くには出來上るべき由なり。伯爵は支拂の金を才覺すべく、今日が日まで僅に賣殘されし最後の土地をも賣盡すべしとて、ノルマンデーに赴きしが、二日餘りの後、巴里に立返るや、己れが家には立寄らず、急ぎて先づナナが家の戸口を開けたりき。

立出でし下婢のゾエーは伯爵の姿を見るや、慌忙てたる調子にて語りぬ。

「閣下よ。ヴェノーと云へる年老いたる紳士は昨日より屢〻閣下を尋ね來給へり。そして閣下が若し此處に來給はゞ直ちに歸り給ふべき由を傳へよと云給へり。」

伯爵は何事なるかを推する能はず、不審の面色しながらも、急ぎて次の間の戸を引明けしが目前に現れたる一室の光景は少時彼を茫然たらしめたり。

實に新しく裝飾されし室の有樣は、黃金のレース、女神キナスの像天鵞絨の帷幕などの綺羅を盡して、目も眩くばかりなるを。ナナは恰も女王か、さらずば女神の如き風采して、

金銀燦爛として輝く玉座に等しき寢臺の前に立ちつゝありき。而して其の傍には、如何にも見すぼらしく哀れなる侯爵ド・シューアールの姿うづくまりぬ。

「進み入り給へ、氣遣なく。」とナナは聲さわやかに叫びしが、伯爵は猶も茫然として立すくみたる儘なり。

あゝ、此の法外なる榮華こそは、正に幾何の財産を傾倒するも猶足らざるべけれ。今伯爵は諸有る財産を蕩盡し了れるなり。

茫然たる彼が姿を見て、ナナは忽ち氣色を變へ手荒く戸を閉さんとせしかど、伯爵は最早や其の身を支ふる力さへ失ひたるが如し。一時に湧起る恐怖と絶望と悔恨とは、唯だ僅かに彼をして神の助を呼ばしむるのみ。

「おゝ、神よ、寧ろ余をして死せしめよ。余の身は最早や何物をも見る能はず、何事をも感ずること能はざるべし。おゝ、今余の身は天に在す神の手に屬するなり。」

此の時、突如として、恰も天に在す神の彼が祈禱に答ひ給ひしが如く、靜に伯爵の肩を打つものあり。驚き振り向けば、そは最前ゾエーが云傳へたる老人ヴェノーなりき。伯爵は泣きつゝ老人が面に接吻し、

「あゝ、余は如何に苦惱しつゝあるかよ、余を見捨てざるものは今は唯だ御身一人となりぬ。老人よ、疾く余の身を連れ行けよ。」

老人は小兒の如く伯爵を抱きて、「哀れなる兒よ。余は今云ふに忍びざる不幸の報知を有するなり。御身の妻は御身がノルマンデーの地方に赴きし後を窺ひて出入の若き吳服商と手を携へて逃亡しぬ。巴里は今此の驚くべく恥べき噂を以て滿されつゝあるなり。」

されど、最早や其の絶頂に到達したる深甚の苦悶は、伯爵をして唯だ僅かに、「疾く余を連れ去れ余を連れ去れ。」と叫ばしむるのみなりき。あゝ、伯爵も此度こそは最早やナナが家には歸り來らざるべけれ。

哀れなる伯爵家の墮落に伴うて、程なくナナは又、幾多の悲しき生活の結果を見聞するに至りぬ。彼女の爲めに自殺を企てたる美少年ジオルジはル・フォンデットの田舍なる母の許に引留られしが、遂に空しく死したりき。次には彼女が猶貧しき母の家に在りける頃より見知りたるサタンと云へる賤業婦は、公立の病院に在りて瀕死の境に苦しみつゝありとか。それのみならず、此の年月、恰も己れが一家族の樣に親しく召使ひたるゾエーは、止むなき故ありて此度暇を乞はんと申出でたり。彼女が心は全く荒れすさみたり。

ナナの姿は突然巴里より見えずなりぬ。彼女が人知れずかの廣大なる邸宅、貴重なる家具、寶石、其の他衣服なぞに至るまで盡く賣拂ひて六十萬法の金を携へ遠く異鄉の地に去りしなり。

巴里は最後に彼女がゲイエテー座にて『メクージン』中の神女を勤めし美しき成功を賞讃せしが、一個月程過ぐれば早や其の名は全く忘却せられぬ。されど猶彼女を知りし人々の間には、種々なる風說其の後を斷たざりき。彼女は野蠻國の女王となり二百人の奴隷を召使ひ、彼等の頸を切落して樂しみつゝありと云ふものあれば、或者は又、彼女は醜き黑奴の妻となりて後、着るべき衣服さへ無き貧苦の中に見捨てられたりなぞ云傳へしが、忽ちにして更に又意外なる噂起れり。或る人あり、北の方露西亞の國にて確にナナの姿を見掛けたり、ナナは其の國の或皇族の妃となり居たりしと云ひしより、早く彼女が着けたる金剛石の大きさゝへ喧しき一時の評判となるに至りぬ。

その年も七月の或る夕、巴里の大道に馬車を走らする一個の婦人、ふと歩み來る其の友を認めて叫べり。

「來れ、我が身と共に來れよ。ナナは歸來りしぞ。」

友なる婦人は同じ馬車に飛乘りぬ。

「御身は知らずや。」と以前の婦人は云續けつ。「彼女は我等が斯く語らふ間に早や死してあるやも計られず。」

「死！何たる事ぞ。」友なる婦人は打驚き、「何處にて如何なる譯にて。」

「グランドテルの旅館にて、疱瘡の爲めに。」と答へて、以前の婦人は息急しく語り續けぬ。

「如何なる譯なりしか、ナナは兎に角露西亞より歸來りて直に叔母なる人の家に赴けるなり。御身はかの老いたる叔母ルラを見覺えざるか。ナナはその家に預けたる幼兒ルイに逢はんとせしが、幼兒は決して手厚くは養育されざる有樣なりしのみか、天然痘に罹り居て、今朝方已に死したりとか。ナナが彼の國より忘らず送り居たりし養育料は如何なる行違よりか、叔母の手には一スーの錢だも屆かざりしとなり。ナナは叔母の家を去り、友なる女優ローズを訪ねて旅館に宿を取らんとせしが、此の時しも忽ち氣分優れずなりて、幼兒が冒されし天然痘は彼女に傳染したりき。ローズとナナとは御身も知れるが如く久しき以前より面白からぬ間柄なりしにあらずや。さるを彼女は殊勝にも旅館に赴きて、ナナが枕邊

に看護しつゝ三日三夜を過したりと。我が身も一目ナナに逢ひたく思ふなり。」

馬車は旅館の前に達しぬ。數知れぬ馬車と群衆とは物喧し氣に街の上を往來せり。夕陽血の如く、マデレーン街の端に漂ふ赤き雲の中に沈み、焰かと見る反映は高き家の窓々を照せしが軈て憂鬱なる黄昏蔽掛りぬ。燈火は猶輝かず、暗淡として暮れ行く街の彼方よりは何となく穏かならぬ人の氣勢次第々々に高まり行けり。

「おゝ、彼處に佇めるはローズの夫ミニョンと劇評家フォーシェリーならずや。彼等は我等に何かの新しき報知を爲し得べし。」

馬車より下りたる二人の婦人は進寄りて、ナナが借りたる室の番號を問ひ試みぬ。かゝりし時、街の上にて行き會ひたるは男俳優フォンタンなり。一同は少時危險なる此の病ひについて種々に打語らひしが、今や次第に雜沓し來る群集の有樣に驚きて、等しく街の上を眺めぬ。

夜は進み來りて、遠き灯は彼方より一ツ〳〵に輝き初めたり。並木の下には群集の雜沓さながら潮の湧くが如く、自から隊をなして相集りつゝありしが、軈て白き袴に頭巾冠りたる人の一隊は漲る群集に道を開かせつゝ進み出でたり。彼等は等しく叫べり。

「行けよ、伯林、伯林、伯林！」

普佛戰爭は將に開始せられんとす。群集は痛ましく悲し氣なる面色すると共に恰も又嚴肅なる軍隊の通過を見送る如く、自と湧起る敵愾の精神に驅られたるが如く見えぬ。

一同は旅館の入口近く進みしが、此處に一人の男手巾にて顏を蔽ひ隱しつゝ蹋まれるを見ぬ。フォーシュリーは早くも呼きて

「伯爵ミュッフワならずや。」

「然り、余は彼が今朝の六時頃より依然として彼處に佇めるを見たり。」とローズの夫ミニョンは答へぬ。

實に其は伯爵ミュッフワなりしなり。彼は人々が己れの噂しつゝあるをも全く心附かず——否、佛國は今普露西と開戰の布告をなしつゝあることさへも全く心附かであるなり。

「見よ、彼は入口の方に動き出せり。見よ、見よ。」とフォーシェリーは重ねて云へり。

伯爵は其の言葉の如く、旅館の入口に進寄りしが、取次の男は、早や幾度となき伯爵が質問に馴らされ居たりしと覺しく、今度は其の問はるゝをも待たで、

「閣下よ、彼女は只今死したる所なり。」

噫ナナは遂に死せりとや。伯爵は言葉もなく手巾にて其の面を蔽ひて泣きぬ。一同も覺えず驚きの聲を上げたりしが、それ等の聲は、いよ〳〵高まる群集の叫びに搔消されぬ。

「行けよ、伯林、伯林、伯林！」

一同は死の室に進み入れり。

室には猶燈火なく、寢臺の上に横はりしナナの亡骸は暗き影に蔽はれて定かには見分かざりき。一同はいよ〳〵ナナに別れて立出でんとする時、ローズは三日三晩の看護に疲れ果てたる手にて、ナナが枕邊に一個の手燭を置きたりき。

呼吸ある時多くの人を惱したる亡き人の面は物怖しき有樣に照出されぬ。室の中には早や人影なし。大通の方より吹き起る一陣の風は怪しく窓の帳帷を動しぬ。群集の叫びは猶ほ止まず。

「行けよ、伯林、伯林、伯林！」

女優ナナ梗概 終

洪水（ゾラ原作）

第一

私はルイ・ルーピューと云ふもので、今年七十歳になる。ツールーズから數里計り離れたサン・ジョリーと云ふ、ガロン河の岸に沿うた此の村に生れて、四十年の間私はその身を養ふ丈けの食物を獲やうが爲めに、孜々として土地を耕して居たが、到頭運が向いて來たと見え、今では先づ此の近鄕では一番物持の百姓になつた。

何の事はない、福の神が先づ私達の屋根の上に住んで居るとでも云はうか。太陽は宛然私達の親類の樣なもので、私は未だ一度として不作と云ふ事を知つた事がない。私達は一軒の百姓家に殆ど十二人近く住つて居るが何れも同じ樣に幸福である。私は何時も機嫌好く、若い者共に那麼して這麼してと其の働き方を敎へて居るのだ。一家の中で、私の弟のピエールと云ふのは未に獨身者で以前は軍隊の曹長を務めて居た事もある。其れから妹のアガートと云ふのは極めて身體の丈夫な氣の輕い、而して又敏捷い主婦で、亭主に死別

れた後は私達と一緒に同居して居るのだが、其の笑聲は殆ど隣村までも鳴り響くかと思はれる程である。次には私の息子のジャックと、其の妻のローズと、其の間に出來たエイメー・ベロニック、及びマリーと云ふ三人の娘である。長女エイメーはシープリアン・ブイッソンと云ふ丈夫な若者を聟にして、二歳になるのと、十箇月になる二人の赤兒を設け、ベロニックと云ふ二番目も最早やガスパル・ラ・ビュートーと云ふ男に緣付く筈になつて居る。そして三番目のマリーは色白の容色好しで、百姓の娘どころか、宛然都育のお嬢樣の樣に見える。都合丁度十人の人數で、私はつまり祖父樣でもあり、又曾祖父樣にも當る身の上である。

一同が晩餐の卓を圍む時には、何時でも妹のアガートを私の右に弟のピエールを左に坐らせると、其の他の者共は輪を作つて、十箇月になる赤兒に至るまで、づらりと年の順に居並ぶのである。心のゆく限り一家中は如何に樂しく此の食事を濟ますだらうか。小い赤兒が私の方に手を伸して、

「爺ちやん。もッと麵包をお呉れよ。大いのをよう、爺ちやん！」と云ふ時には私は覺えず愉快で堪らぬと同時に、又何となく鼻高々とした心持になるのである。

光榮ある樂しい月日は恁う云う風に、一家は賑しく家中の窓々から歌など歌ひ囃す。そして夕方になると、ピエールは何か新しい骨牌の遊び方を考へ出すか、然うで無くば軍隊に居た時分の昔話を爲始める。日曜日には叔母アガートが娘達に菓子を拵へて遣ると、末娘のマリーは頸の上に美しい頭髪を垂れ掛け、兩手を衣服の衣皺の上に握合して、宛然其の身も神樣になつた樣な風を爲ながら、若い歌人の樣な聲で自分の知つて居る優しい讃美歌を歌ひ出す。で、私は何時ぞやエイメーがシープリアンと結婚した時に、一階だけ高く家を建增したから、今度ベロニックがガスパルと結婚する時には最う一階建增しを爲ねば成らぬ。そして此の鹽梅に結婚が續いて行つたら、此の家は到頭天へ達いて了ふかも知れない、と何時でも冗談を云ふのである。全く私達の中では誰一人別れやう抔と云出すものは無いから、軈て家の後の地面内には街を築く樣に成らぬとも限るまい。斯うして大勢の家族が寄り集つて、其の生れた處で一生を暮すと云ふ事は實に結構此の上もない事では無からうか。

此の春の五月と云ふ月は非常なものであつた。近年に此樣大した收穫の豫期せられた事は無い。其の日、私は息子のジャックと三時頃から家を出掛けて、田地を見廻つて歩いた。

嫩綠のしつとりと青々した牧場はガロン河の岸邊に廣つて草は最う此れよりは伸び得ぬと云ふまで伸切つて居るし、たッた去年植ゑ附けた計りの柳の植込さへ、早や一尺餘りも長い若芽を伸して居る。私達は金の蓄る度毎に少しづゝ買ひ占めて行つた穀物畑や葡萄園を檢べながら歩いて行くと、麥は飽くまで成熟し、葡萄の樹は豐なる收穫期を待顔に今を最中の花盛りである。ジャックは心から樂し氣に打笑ひながら、私の肩を叩いて、

「父さん。私等は最う麵包や葡萄酒に不自由する氣遣ひは無えだ。眞實に父さんは神樣のえらい御思召に與つてるに違えねえだよ。見さつしやい。此樣に神樣は宛然父さんの地面へお金を降らせてるだもの。」と云つた。

成程ジャックの云つたのも至當な譯だ。私達の住んで居る此の地方の幸福は、皆な私達の身の上にばかり降つて來るやうな心持がするので、疑ひなく私は一方ならぬ神樣の御惠を受けて居ると思はねば成らぬ。例へば暴風が吹いても霰は丁度私達の地境で止んで了ふし、隣りの葡萄の樹が病氣に罹つた時でも、自然とそれを防ぐ塀が私達の畑の周圍に立つて居る樣に思はれ、軈て私は譯もなく收穫をする事が出來る。全く何一ッ損害に逢つた事が無いので、遂に幸福は私の特權である樣な氣がして了つた。

歸途には村の向側にある地面を通過ぎたが、桑の木は見るからに威勢好く、鬱然した扁桃林には一面に實がなつて居た。私達は樂し氣に冗談を云合ひながら今にも肝腎の資本が出來たならば、猶私達の地面の間々に殘つて居る他の地面をもすつかり買占めて、此の近在切つての大地主になり度いなぞと、いろ〳〵行末の計畫を語合つたが、若しや今度の收穫が其の豫想通りに行つたならば、其の夢も早や此の秋には實現されるかも知れない。

軈て家の近くに歸つて來た時に、私達は嫁のローズが手招きしながら、「早く、早く……。」と呼んで居るのを見た。何事かと思ふと、私達の飼つて居る牝牛が犢を產んだ所なので、一家中は大騷ぎだ。叔母アガートは轉る樣に走出すし、娘達は皆なして生れた犢を眺めて居たが、此の犢の出產は私達に又此の上の新しい幸福を授けて呉れた樣な心持を爲せた。馬を除けて家畜の一百匹も飼つてある小屋の建增し爲たのもつい此間の事である。

「緣起の好え日で無えか。今夜は一同して一盃遣らなけれア成ん無えだ。」と私は云つたが丁度其の時娘ベロニックの戀人のガスパルと云ふものが結婚の期日を取決に來て居るのでローズは何かの馳走を爲やうと云ふ事を話しに來た。ガスパルと云ふのはモランズの或る農家の長男で、今年二十歲になる若者だが、大變な强力であるとの評判は此の近在で誰知

らぬものも無い。ツールーズの街の祭禮で彼は此の近邊切つての强者マルシアルと云ふ男と相撲を取つて勝つた事さへあるけれど、然し非常に性質の好い心の優しい男でベロニックの柔順しい眼と其の眼とを視合す事でもあると、眞赤な顏をする程内氣な處もあるのだ。

私はガスパルを呼んで來る樣にとローズに云付けた。彼は戸外で下女供が洗物を干す手助ひを爲て居たが、軈て客間へ這入つて來た時、私の悴のジャックは「父さんが話しなすつたのは此人だアかね。」と云ひながら私の方を振向いた。

「お前樣はいよ〳〵彼の一件を決めに來なすつたゞね。」と私は云つた。

「さうでがすよ。其のお話しを爲に來たですよ。」と答へたがガスパルは兩の頰をば眞赤にして居た。

「何を。些とも顏赤くする事は無えだ。私は七月の十日の、聖女フェリシテーの日が可えと思つてるだ。今日は六月二十八日だで、最う長く待つ事は無えだよ。私の死んだ家妻もフェリシテーと云ふ名前だつたで、それに越す緣起は無えだから、喃、さう決めて置かつしやい。」

「其れが可えでがす。聖女フェリシテーの日に極めますべい。」

ガスパルは答へてジャックと共に私の傍へ寄り、牡牛をも撲倒す程の力のある手で、私達の差伸した手を取り、次にはローズの事をば「阿母樣。」と呼んで接吻したが、斯くまで恐しい拳を有つて居る勇しい若者も、ベロニックを思ふ戀の爲めには身も痩せ、夜も眠れなかつたと云ふ事で、彼は若しか私達が娘の事に不承知を云出したなら、大方病氣に成つたかも知れぬと云つた。

「さア、最う始め樣でねえか。御前方も各自に坐るが可え。私はとんと狼見た樣に空腹いだ。」と私は云出した。

此夕、食卓に坐つたのは十一人の人數で、私達はガスパルと娘ベロニックの二人を並べて坐らせた。ガスパルは自分の食事も忘れて娘の顏ばかりを眺めて居たが、早や自分の妻であると云ふ事を思ひ出すと、何とも云へぬ心持になるのであらう、大きな涙の滴に其の瞼を潤して居た。此の二人の樣子を打眺めて、三年前に結婚したシーブリアンとエイメーは互に微笑み合うたけれど、最う二十五年も連添つて居るジャックとローズの二人は寧そ眞面目な樣子で、さも憫然だと云はぬばかりに同じく其の眼を潤して居た。私の身になると、私までが何となく最う一度若返つた樣で、そして一家は最う極樂へ行つた樣な心持に

もなつて了ふ。今夜の肉汁と云つたら又格別、何とも云へない。何時でも一人で笑つて居る叔母のアガートは珍らしく冗談を云掛けるし、獨身の弟ピエールもリヨンの街の女に戀したと云ふ昔話を爲始めたので、私は穴倉から味の好い葡萄酒を二壜ばかり持出して來て、例の如く一同でガスパルとベロニックの幸福を祈る爲めに杯を擧げた。凡そ幸福とは斯う云ふ風に何でも物爭ひを爲ず、子供を澤山拵へて、而して金の財布を少しづつでも身に付けて居る事を云ふのであらう。兎角して一同は歌を謳ひ始めたが、ガスパルも此の土地で流行る戀歌を知つて居た。さて最後には皆なして末娘のマリーに讃美歌を所望する事となると、娘は立上つて直樣笛の音の樣に何とも云へぬ優しい聲で歌ひ始めた。

私が窓の方へ進寄つた時に、ガスパルも同じく私の方へ從いて來たので、

「何か別に變つた事は無えだかね。お前方の村では……。」と何の氣なしに尋ねると、

「別に變つた事も無えでがすが、此間からの大雨で、何か好く無え事でも有りやしねえかと、さう云ふものも有るでがすよ。」

ガスパルは答へたが、實際雨は二十五日間も降續いて居たのであつた。そして昨日からガラン河は非常に增水して居たけれど、然し私達は飽くまで此の河を信用し切つて居たので、いざと云ふ間際になる迄は夢にも其樣に怖しい河だとは思はれないのであつた。何しろ此の河水と云ふものは私達に取つては無くて成らぬもので、且つ見るから廣々として如何にも悠々流れて居るから、村の者は自分の家の屋根が落ちさうになつても、中々此の地を離れる事はできないのだ。

「何の！　何が有るもんだ。毎年此の通りで無えか。どつしり水が增えると、宛然人が癇癪でも起した樣だけんど、一晩經つと忽然と今度は羊見た樣に穩になつて了ふだ。心配さつしやるな。まア窓外を見なさい。何ちう結構なお天氣だ！」と私は手で空を指示した。

最う七時で、太陽は將に沈まんとして居る。四邊は凡て眞青である。唯だ渺茫として、淺黃の色が擴がつた樣に見える空を越して、入日は宛ら黃金の塵の漂ふ有樣。氣も心も唯だ晴れ晴れとなる樣で、私は今だに一度として此樣に長閑になつた此の村を眺めた事は無かつた。微紅色の光は段々軒端の蔭から消え失せて、家の向なる往來の曲角では隣家の人の笑ふ聲や子供の騷めく聲と共に此方を指してこの小屋へと歸つて來る牛の鳴聲が、遠くの方から幽にきこえる。

すると續いて、ガロンの河水の深い唸聲が早や絕間もなく響出したが、然しこの水音に

は聞馴れて居る所から、私の耳には却つて唯だ静な寂とした物音の様にしか思はれぬ。空は次第次第に白くなり、村は平和な眠に沈み行くが如く、早や美しい日の最終となつた。私は豊饒な收穫や、ベロニックが婚禮の約束なぞ、一家の幸福と云ふ幸福が、次第に薄れ行く清淨な光の中から、私達の方に泛び流れて來る様な心持がした。幸福は正しく此の日の告別に連れて、私達一家の上に蔽ひ掛つたのである。

私は娘供が樂し氣に騒いで居る室の中に立戻つて微笑みながら、一同の冗談話に聞き取れたが、其の時しも俄然として平和な黄昏の中から物恐しい叫聲が起つた。

「洪水だァ〳〵。」是れ恐怖と死の叫び聲である。

第二

私達は庭へ馳出した。

見渡せばサン・ジョリーの村は河よりも低く、五百間ばかり離れて、傾いた土地の底に横はつて居る。そして幾箇所の牧場を區切つて居る白楊樹が水の景色を遮つて居るので、私達は何一ッ見る事が出來ず、唯だ「洪水だァ、洪水だァ。」と云ふ叫聲を聞くばかりであ

つた。

忽ち、路傍へ二人の男と三人の女が現れたが、後の一人は其の腕に子供を抱き、一同顛へながら泣叫んで、一生懸命に荒地の方へと走りながら、丁度狼の群にでも追掛けられた様に、恐しい顔をしては絶えず後を振返るのである。

「お爺さん。何事が始まつただね。」と娘の聟のシイブリアンが尋ねたので、

「何でも無えだ。木の葉一つ動きも爲無えだよ。」と私は答へた。

低い地平線は依然として物靜に横はつて居たが、私が斯く話し出した前に、或る鋭い物の響が他の方から聞え出した。かと思ふと、彼の逃げて行つた人達の後から、或は白楊樹の並んだ幹の間から、或は丈の高い草の上から、齊しく灰色した黄色の斑點ある怪物が、此方を目掛けて押寄せて來た。見る〳〵中、此の怪物は四方四面に現はれた——波は波の上を渡つて、濁水の大量は白い泡を吹きつゝ、連なる波のうねりを飛び越え、睦とばかり泡沫と崩れて大地を搖動した。

最早や私達も絶望の叫びを揚げて同じく、「洪水だァ〳〵。」

先刻の男と女は猶路の上を馳けて居たけれど、到頭押掛けて來る恐しい水の中に包まれ

て了つた。今や波は簡單な一列を爲して、軍隊の押寄せる樣な怖しい響を立てながら、高く乘し上るかと思ふと、瞠と崩れ掛るのである。ほんの一搖りで三本の白楊樹は譯なく打折られ其の高い枝は揉まれながら何處へか見え無くなつて了ふと、今度は一棟の小屋が打壞され、土塀が崩れて、馬具を附けない荷車が宛然藁の束の樣に流されて行つた。水は今逃げる人々をば殊更に追ひ極め樣とするらしく、急な坂をなした路の曲角の處で、大量の水は一時に落掛つて來て、人々の逃げ路を閉いで居る。私達は猶逃げ走らうとする人々が水をバチャ〳〵跳ね飛ばして騷いで居るのを見たが、忽ち寂として了つたと思ふと、水は早や其の膝の上に押寄せて居て、一ッ大きな波が子供を抱いて居る女を突き轉した。諸有るものは皆水の中に沈んで了つたのである。

「早く、早く。私等が家は頑丈だから、些とも可怖る事は無えだ。」と叫んだが、私は然し沈着いて、娘供を先に進ませながら、二階へ上り、私は一番後にならうと決心して居た。私の家は往來よりは高く土手の上に建てられてあつたので、水は今柔かな漣を立てながら靜に庭へと浸入して來たけれど、一同も未だ其れ程には驚かなかつたのだ。

「心配しねえが可えよ。些とも危險な事は無えだから。」と息子のジャックは平然として、

「なア、父さん。父さんも覺えて居さつしやる筈だ。それ彼の五十五年の洪水の時も丁度今見た樣に、足の處まで水が來ただけんど、直と退いて了つたで無えか。」

「何にしても畑には甚え損害だなア。」とシイプリアンは聲高に叫んだ。

「然うで無えだよ。其樣に甚え損害も無からうと思つてるだ。」と私は云ひ消して居たが、其の間にエイメーは自分の子供を寢床の中へ寢かして、ベロニックとマリーの三人で其の傍へぴッたり寄添つて坐ると、叔母アガートは私達を勵す爲めに葡萄酒を持ち運んで來て、其れをば溫め樣と云ふのである。ジャックとローズの夫婦は窓の外を眺める。私はシイプリアン、ガスパル抔の男連と一緒に他の窓の方を見ながら立つた。

「何してるだ。何故早く上つて來ねえだ。」私は庭の中で騷で居る二人の下女を見たのである。

「其れだつても、馬や牛が可哀想でがすよ。皆な小屋の中で死ん了ひますべいよ。」と下女は答へる。

「可えから、何でも早く上るが可えだ。牛馬は私が今世話するだから……。」と云つたが、若し水が止まずに增えて來たなら、到底家畜を助ける事は出來ないかも知れぬ。然し私は

下女を驚かすまいと、すつかり安心して居る風を裝ひながら、窓の硝子越に水の進みを測つて見ると、村中に汎濫した河水は、早や村の一番狹い小路までを侵し盡した。押寄せて來る波のうねりは悉皆靜つて了つたが、其の代り水量は殆んど目には見分けられぬ程、ぢり〳〵と增さつて來るばかりで、サン・ジョリーの村が横はつて居る穴の樣な低地は一面の湖水と變じ、庭の中の水は已に三尺の深さに達して居た。私は猶ほ增水のさまを見成るとやがてぢッと定止して居る事を確め得たのみならず、一度は稍や減水しかけた樣な氣もした。

私はガスパルを見返つて、「此の分ぢや往來はないか〳〵元の樣には成ん無えだから、今夜は私等が家へ宿つて行かつしやい。譯の無え事だ。」

云ふと、ガスパルは私の方を眺めたが、其の顏は眞青であつた。同時に私は、彼が其の戀人なるベロニックを見遣つた眼の中には、押へ切れぬ苦悶の情の含まれて居るのを知つた。

丁度八時半である。蒼白い空から射す、何とも云へぬ物悲しい白つぽい微明に照されて、戸外は未だ微明かつた。下女は私達の居る處へ逃げて來る以前から、ランプを持運ばうと心掛けて居たとの事で、私は一同の逃込んだ此暗い室を明く爲樣と、其のランプへ火を點すと、叔母のアガートは机を前の方へ押出して、骨牌を爲樣と云ひ出した。氣丈な女では無いが。叔母は折々心配さうに私と眼を見合しながらも、猶娘等の氣をまぎらさうと思つて居たので、其れのみでは無い。今や一同の上に蔓延らうとする恐怖の念をば拂ひ去らうと殊更に笑ひ始めた。骨牌は用意された。叔母アガートは無理やりにエイメー、ベロニック、マリー等三人の娘を椅子に坐らせ、拒む元氣も無い娘等の指の間に骨牌を握らせた後、今だに增えて來る水の響をも殆ど聞かせぬ程に能く饒舌り續けながら、頻と骨牌を切つたり配つたり搔集めたり爲て居た。然し娘等の心は最う其れ處の騷では無い。耳を澄ます爲めに首を傾け、手を顫し、猶眞青になつた儘である。そして氣遣し氣に振向きながら、絶えずかはり〳〵に、

「お爺さん。水はまだ增えて來るだかね。」と問合ふのである。

實際水は恐るべき速度で增進して來るのであつたが、私は何氣なく、

「いや、更う大丈夫だァから、安心して骨牌を取つてるが可えよ。」と答へた。

然し私は今迄此樣な酷らしい恐怖の念に其の心を搔拐られる如く感じた事は無い。男連

は恐しい外の景色を見せまいと、窓の前に寄集つて、互に室の方へ振返る時には、殊更平氣な風を裝ふのであつたが、今此の室の中にはランプの灯が、一家團欒の靜き夜の通りに圓い光を机の上に落して居る。私は矢張此の机で此う云ふ風に坐つて居た冬の夜の樣を記憶して居るが、それは穩な暖い感情に滿された一幅の靜けき畫であつた。今夜も其と同じ事、此の室の中には圓滿な一家の平和が住つて居る間に、私は背後からいよ〳〵增進し來る河水の咆哮を聞くのである。

「ルイ殿。」と弟のピエールは私の名を呼びながら窃に囁いた。「最う窓から三尺とは離れて居ねえだ。如何にか爲ねえぢや成ん無え。」

私は弟の腕を突いて默つて居る樣にと知らしたけれど、最う到底一家の危害を押隱す事は出來なかつた。戸外の小屋では家畜が暴れ始めたので、その狂氣となつた叫聲と、殊に恐しい馬の悲鳴が聲え出した。

「あら！　大變だ〳〵！」と立上つたエイメーは顫へながら、拳を握つて其の胸を押えた。女供は皆總立になつて了つた。私達は窓際から女供を引戻さうと爲たけれども最早や何の効も無い。其場に立すくんだ女の頭髪は恐怖の風に搖られて逆立つばかりである。黯淡

たる黃昏の微光が平な水面を蔽ふと、蒼白い空は丁度棺を包む白い布を、此の地球の上に投掛けた樣に見えた。遙か彼方には烟が棚曳き、萬象は次第次第に暗くなつて行く。今や此の恐しの日もいよ〳〵死したる夜の中に沈んで行くので、廣漠として際限なき洪水の緩かに唸る聲と、暴れる家畜の嘶き叫ぶ聲との外には最う人間の聲と云ふものは何一つ聞えなくなつた。女供は大きな聲で物云ふ事さへ恐るゝ樣に息を呑んで唯だ、「あら！　あら！」と云續けるばかりである。

其の時、烈しく物の破壞れる響が忽ち女供を默らした。暴れ狂つた家畜は到頭小屋の戸を打破つたので、然し其れ等の家畜は黃色い洪水の中をば、恰も急流に運び去らるゝ如く轉つて行くのである。羊は池の中で渦卷く枯葉に等しく一塊になつて投出された。牛と馬とは地面に足をつかうとしても其の足掛りが無い爲めに跪き苦しんで居る。其の中でも一匹の肥太つた灰色の馬は一生懸命に死ぬまいとして、長い頸を伸し、鍛冶屋で使ふ吹革の樣に大きい息を吐きながら、執念深い水の流れが其の鬣へ屆く樣になるまでも後足で立上つて居た。然し私達は其の馬さへ遂には水の流れに身を任して何處へか去つて了ふのを見送つた。

私達は覺えずアッと叫んだ。そしてヅン〳〵押流されて行く可愛い家畜の方へ手を差伸しながら、最う我慢が爲切れなくなつて、一同聲を擧げて泣き、獻欷び、悲しむのであつた。我が一家はいよ〳〵滅亡するのだ。穀物は失くなり、家畜は溺れ、僅か數時間の中に私達の財産は悉く消え去つて了ふ。あゝ神樣は正しいと云はれやうか。私達は決して神樣の御心に逆つた事抔は無かつたのに、神樣は此れまで授けて下すつた凡ての物をば、一つ殘らず取上げてお了ひなすつた。私は天に向つて拳を振上げた。私は今日午後の散歩を思ひ出したのである。牧場や麥畑や、葡萄園なぞ、諸有る物は皆望みあり氣な面持をして居たけれど、其れは悉く虛僞であつた。幸福は虛僞のものであつた。夕暮の甚と深き誠實の中に、那の樣に靜けく穩かに沈んで行つた太陽までが虛僞をついたのだ。

水は依然として增すばかり。凝と打目成つて居た弟のピエールは鋭く叫んだ。「見さつしやい。窓まで遺つて來たぞ。最う此處には居られ無えだ。」

最う如何する事も出來ない。私は身體を屹とさせ、肩を聳しながら、「最う恁うなつたらお金なんぞは何に成るだ。皆な生命さへ助かつて呉れたら恨む事は無え。又孜々と働くだけの事だ。」

「さうだとも。眞實に父さんの云はつしやる通りだ。」とジャックは狂氣の樣になつて、「大丈夫だ。家の壁は頑丈だから、皆な屋根へ上つて了へ。」

私達の避難所は僅かに此の屋根ばかりとなつた。增進する水は一段一段と梯子を上り、早や戸口へ這入つて來たので、私達は最う生きた心地もなく殆ど無我無中で、互々に其の身を摺寄せながら屋根へ上る用意をしたが、其の時シイブリアンは獨り何處へか見えなくなつて居たので、私は彼をば呼立ると、眞青な顏をして彼は隣りの室から出て來た。然し續いて私は、又もや二人の下女の居らぬのに驚いて、少時く待つて居やうとすると、シイブリアンは怪し氣に私の顏を見成つて、

「離家の女部屋は唯た今流れて了つたぞよ。」と小聲に囁き、猶同じ低い調子で、先刻かの女供はその寢泊りして居る家の方へ梯子を渡して橋を掛けて居たと云ふ事を話して呉れた私は最う何にも云はぬ樣にと注意したが、其時頸筋にゾッとする惡氣を覺えた。正しく死の呼吸は我が家の中に進み入つたのだ。

私達は順々に屋根へ上つていつたが、ランプを消す事さへ忘れて居たので、骨牌は依然として机の上に散在り、水は早や其の室の中に一尺程にもなつて居た。

第三

仕合な事には屋根は至つて廣く傾斜も又緩かであつた。空の光は私等一同が逃げ上つた此の小い場所までを照すのである。女供は蹲つて了ふと男の連中は斥候をする爲めに、屋根の兩端にある二個の高い煙突の處まで、瓦を踏みながら上つて行つた。私は空の明りを便にしてづゝと地平線の四方を見廻しながら、

「早晩救助船の來ねえ氣遣ひは無えだ。」と强ひて望みあり氣に「サンタンの村の衆は今に船で此處を通るだんべいよ。あれ、彼處を見さつしやい。あれア提灯で無えか。」

恁う云つたけれど、誰一人返事をするものは無い。ピエールは無暗と煙管に火を點け夢中で煙草を喫續けたが、到頭齒で煙管を嚙碎いて其の端屑を吐出した。ジャックとシイプリアンは悲しい顏をして遙か彼方を見遣つて居ると、ガスパルは猶も何處か好い逃れ場所を搜さうとするらしく拳を握りながら屋根の上を彼方此方と歩廻つて居る。女供は顫へながら私達の足元へ蹲つて、物凄い光景を見まいと其眼を閉いで了つたが、此時ローズは頭を上げて身の周圍を見廻し、

「女中は皆な何處へ行つたゞね。何故此處へは上つて來ないだねえ。」と尋ね出した。

私は聞えぬ風をしたけれど、ローズは猶私の方へ振向いて、眤と私と眼を見合せ、

「下女達は何處へ行つたゞね。」と繰返すのである。

私は顏を外向けた。最早や氣安めの虛言を吐く事は出來ない。私は既にその身に感じたゾッとする寒さの、今は私等一同の嫁や娘の上にも襲掛つた事を知つた。マリーは身丈一ぱいに立上り、其の唇から深い吐息をつくかと思ふと、一度にワッとばかりに泣き伏して了ふ。エイメーは衣服の衣皺の中へ二人の赤兒の頭を包み、猶大事さうに其の裾の方で赤兒の身體を蔽ひ被せた。ベロニックは兩手を顏に押當てた儘身動きもせずに居ると、叔母アガートは以前よりも一層眞青になつて頻に十字架を畫く見得を爲ながら祈禱の言を繰返して居た。

今、見渡す身の周圍の光景は、實に凄絶の極であつた。夜はたつぷりと暮れ果てゝ夏の暗黑は透徹るばかりに澄み渡つて居る。月は猶出でず、空は數限り無き星に飾られ、平かなる滿目の景物は唯是れ蒼然として一面に淸くきらめく靑色を示す計りである。地平線は黃昏の光の、猶其の上に漂へるかとばかり、明白と區別されて居ると共に、靜けき空の下

の洋々たる水面は細く微赤い色して波頭を照す燐光の様な自からなる水光の爲めに眞白になつて居る。何處を見ても土地は見えず、平野は殘る處なく水に浸されて了つたに相違ない。何時の夜であつたか。私はマルセイユ近くの海邊に行つゞ時丁度此の洪水の通りな海の景色を嘆賞しながら眺めた事があつた。

「增えて來るだ、增えて來るだ。」私の弟のピエールは投捨てた煙管の破片を又もや嚙碎きながら云返すのである。

眞實水は最う屋根の緣から一間とは離れて居らぬ。今迄靜な事は湖水の樣であつた其の穩かな水には、急に烈しい潮流が出來たので、軈て或る高さまで增水して來ると、最う村の前の岡は何の役にも立たなくなつて、一時間と經ぬ中に其の岡さへ隱れて了ふと、洪水は脅す樣に桶や材木や藁の束なぞを私達の家へ衝き當てた。何處か遠くで、耳を聾するばかり土塀の突破れた物音が聞える。白楊樹がパッサリ打折られ、其の邊の家は宛然石をつんだ荷車の路傍に轉覆する樣に倒されて了つた。

ジャックは女供の泣叫ぶ聲に氣も亂れた樣子で、「私等は最う斯うしちや居られ無えだ。如何にか爲ねえぢや成んねえだよ。父さん。お願えだ。如何にか遣つて見べいで無えかよ。」

「さうだ。如何にか遣つて見べいよ。」

私は躊躇ひながらも、ジャックの後について同じ事を云返すのである。

然し如何して可いのやら誰一人知るものは無い。すると、ガスパルは其の戀人たるベロニックを背負つて泳いで行かうと云出したが、ピエールは筏を作つた方が可いと云つた。二人とも最早や狂氣して居るのであらう。然し暫くするとシイプリアンは、

「寺院まで行けれア最う締めたもんだ。」と云ふのである。

成程、寺院は水よりも高く、依然として何の損害もなく其の四角な塔を聳かして居る。私達の住家は丁度此の寺院からは七軒目で、直ぐ私達の隣家と云ふのは私達のよりは最少し高い家であるが、今はこなたへと傾き掛つて居る處から、譯なく屋根傳ひに、やがて寺院へ達する事が出來るかも知れぬ。多數の村人は最早や既に其の寺院へ逃込んで居るに違ひ無い。近くの家の屋根裏には何の人影もなく、鐘撞堂の方からは人聲が聞える。然し、考へて見ると、此れも隨分不安心な怖しい仕事である。

「到底駄目の事だ。隣りのランボー殿の家は餘り高過るだから、梯子が無くちや上れめいよ。」とピエールは云つたけれど、シイプリアンは打消して、「何にしても、私は一ッ行つて

見て來べい。行け無えけりやア歸つて來るだし、萬一か行ける樣だつたら、私等は各自に女兒を擔つて行くだ。」

彼は行き始めた。私達は身動きもせず見成つたが、彼の云つたのは尤もである。物事は何に寄らず遣つて見なければ成らぬ。彼は烟突に附いて居る金物に手を掛けて、到頭隣家の屋根へ上つて了つたが、其の時漸と眼を上げた妻のエイメーは、夫の姿を見失つたので、

「何處へ行きなすつたゞよ。私や離れ度く無えだよ。死ぬんなら一緒に死にますだよ。」と云つたが、夫が隣家の屋根の上に居るのを見ると、兩人の赤兒を抱いた儘、瓦を傳つて其の方へ行き掛けながら、

「待つて下さいよう。私や一緒に行くだ。一緒に死にますだ。」

最う何としても承知する處では無い。夫のシイプリアンは身體を前の方に屈ませながら、自分は今一家一同の爲めに働いて居るので、直に戻つて來るから待つて居よと知らしたけれど、エイメーは頭を振り、物凄く其の眼を睜いて、

「一緒に行くだ。一緒に死にますだ。」と猶夢中に呼はるのである。

夫は遂に已むを得ず、先づ赤兒を受け取つてから、隣家の屋根へと其の妻を助け上げた。

私達は夫婦のものが徐々と屋根の絶頂へ攀上つて行くのを見たが、今妻のエイメーは再び腕の間に泣く兒を抱へると夫のシイプリアンは一歩毎に振返つては其の妻を支へて居る。

「エイメーが助かつたら喃お前は最う一遍私等の方へ歸つて來るだよ。」と私は呼はつた。

シイプリアンは何やら手を振つたけれど水の吠え返る聲は其の答へを遮つて了ふ。夫婦は其の儘屋根の向側の方へ下りて行つたのであらう。少時其の姿は見えずに居たが、五分程すると再び三軒目の屋根の上に立現れた。然し夫婦とも漸く膝頭で匍匐つて居る處から、其の屋根は甚だ急であるに違ひ無い。突然私は恐しい心持になつて、兩手を口へ翳しながら、

「歸つて來るが可えだよう。」と力一杯の聲を振絞つた。

ピエール、ジャック、ガスパルを始め一同も歸つて來よと呼立てたので夫婦のものは鳥渡立止まつた樣に思はれたが、直と又進み掛けて、早や往來の曲角になつて居るランポー殿の屋根へ行着いた。然しかの家は近邊の屋根より九尺も高い處から、夫婦は鳥渡躊躇つたものゝ、軈てシイプリアンは猫見た樣にスル〳〵と煙突へ攀上つたのである。エイメーは夫の手助けを待つ爲めにと屋根の間に突立て居たが、晴渡つた空に對して其の姿の黑々

と立つて居る處から、實際よりも一際身丈高く見えると同時に、私達は又明に其の胸の上には犇と赤兒を抱締めて居る樣を見分ける事が出來た。然し物凄じい最後は近づいたのである。

もと〳〵、此のランボーと云ふ人の家は商賣をする爲めに建てられたので、極めて脆弱く出來て居て、往來から押寄せる急流を正面に受け、ゆら〳〵動いて居る樣に思はれる。息を凝して私はシイプリアンが屋根傳ひに進んで行くのを見成つたが、突然唸る樣な恐しい物音を聞きつけた。遮ぎるものなき空には圓い月が昇初めた。其の黃い光は鮮かなランプの火影の如く茫茫たる湖水の面を照したので、何一つ見られぬものとては無い。彼の唸る樣な物音はランボーが家の潰れ掛る響であつた。シイプリアンの姿の落沈んだのを見ると、あれと叫ぶ恐しい聲は齊しく一同の口から發せられた。家は宛ら暴風の吹落ちる如く潰れた時、私達は崩殘つた屋根の下から、唯だ波の逃るのを認め得るばかりであつたが、間もなく寂然として了ふと、眞黑な家の破れ屑や、種々な材木の混亂した塊りが浮き出して其のまゝ、水の面は元の如く平かになつた。すると、此の材木の間には、人間以上の力を出して一生懸命に奮闘して居る或る生物が現れた。

「シイプリアンは生きて居るだ。それ、お月樣の光つてる眞白い水ン中に居るで無えかよ。」と私は叫んだ。

一同も癲癇的の笑聲を漏して、最早や諸有る危險が過去つて了つた樣に手を拍つて喜んだ。

「泳ぎ上るんだんべい。」ピエールが云ふと、

「さうでがす。」とガスパルは答へた。「見さつしやい。左の手で材木に掴まらうと爲て居ますだ。」

然し此の喜びの聲は突然消去つて、私達一同は憂慮の念に啞の如く默つて了つた。今、私達はシイプリアンが如何なる恐しい地位に陷つて居たかを知つたのである。家が倒れる時に、材木の間に其の足を挾まれて了つたので、頭は水から僅の五六寸離れて居るばかり。彼は全く身體の自由を失つた。其の苦悶は目も當てられぬ有樣である。他の屋根にはエイメーが身を顫はせ、赤兒を抱いた儘立すくんで、夫が瀕死の煩悶を側目も觸らずに打目成つて居るのであつたが、其の强ばつた唇からは、脅えた犬の吠る樣な、何とも云へぬ哀しい聲が續け樣に響き出すのである。ジャックは狂氣の如く、

「放捨つては置け無えだ。皆な助けに行くべい。」

「誰か材木の下を潜つて、押放して遣るが可えだ。」とピエールは呟いた。

一同は早くも一番近い屋根の方へと進み掛けた時しも、其の屋根は搖れながら倒れたので行くべき道は斷たれて了つた。私達の血は冷くなつた。互に手を取合ひ、夢中で身體を摺付けながら、恐しい目の前の有樣を見まいとしても見ぬ譯には行かぬ無かつた。

シイプリアンは最初に身體を强固させ、非常な力で水の上に乘上つて斜の位置を取り得たれど、然し疲勞は次第に彼を屈伏させ樣とした。足を取られた材木を押退ける爲めに、何か外のものに掴らうとして、彼は兩手を空中に振廻して居たが、到頭グッタリ仰向に倒れて、早や全く身動きもせずに引掛つたなりになつた。死は徐々と進んで來る。哀れ頭髮は次第に高まる水に浸されるので、彼は其の頭の冷くなるを感じたに相違ない。始の浪が彼の額を濕し、其の次の浪が眼を閉がした——頭は次第〳〵に私達の眼から見えなく成つて行く。

女供は私達の脚下に突伏し、握れる手もて其の顏を蔽ひ隱くした。私達は痛々しく泣きながら、祈禱を繰返し、腕を廣げて跪いたが、向の屋根にはエイメーが猶立すくんだまゝで、胸の上にはしつかり赤兒を押抱き、夜のふけるに連れて次第に聲をあげて哭き叫ぶのである。

第四

私は茫然自失して了つて、此の危難の時が凡そ何の位長く續いて居たか、其れは話す事が出來ない。然し漸と氣が付いた時には、水はいよいよ增えて來るばかりで今は屋根の瓦にまで達してゐる。私達の居る屋根は洋々として際限なき水に取圍まれた孤島であつたのだ。右も左も、人家は皆倒れて了つて、洪水の海は四方に擴つて居る。

「私等が處もぐら〳〵爲て居るだよ。」と瓦を叩きながらローズが囁いた。

其の通り、私等一同はゆら〳〵身體を搖られるので、屋根は恰も漂ふ小舟に變じた樣な心持。重い大浪が今にも私達を運去るかと危まれる。私達は舟に乘つて居るのでは無く、怒濤に襲はれながらもチャンと同じ元の場所に停止して居る事を確め得るのは、唯だ彼の泰然たる寺院の塔へ目を向ける時ばかりである。

然し水は今熱心に攻擊し掛けた。急流はどし〳〵往來を流れて居たが、其の行手を遮つ

た種種な破れ屑は、復元の方へと流れ返つて行くので、材木や板などが一枚でも其の潮流の中へ流れ込めば、水は忽ち其れを掴んで、圓めて、幾度となく繰返しては私達の家へと突當てる。時としては十も二十もある大い木の片を一時に四方から打付ける事もあれば、水は又叱咤する樣な音を立て、泡を吹いて、私達の足を濡らす事もある。私達は又一杯に水を孕んだ我が家の緩かに鳴響く音や、種々な破損物のギシ〳〵云ふ響を聞くのであるが、其れよりか猶一層荒々しい襲撃が家全體を震動させる時には、幾度となく私達は最早や此れまでゞある——壁が崩れて其裂口から早や河水の中へ沈んで了つた樣な思をするのだ。

此の時、大膽にも屋根の端へ出て居たガスパルは、練磨え上げた力强い腕で、流れ過る材木を掴えて水の中から引上げながら、

「もう用心しねえぢや成んねえだよ。」と叫んだ。

そこでジャックはピエールを手助にして、一本の長い棒を取押へ樣と努めたが、取る年は私の身體を全然子供の樣に弱々しく無用にして了つたので、私は我ながら老年の身を口惜しく思つた。然し防禦の支度は悉皆用意されたのである。何の事は無い、それは男三人が洪水を相手にした戰爭である。ガスパルは手に持つた丸太を武器にして、流れ寄る材木を待ち構へて、壁の近くへ寄付けぬ樣に爲て居たが、折々は其の身體まで打倒される程な恐しい衝突がある。ピエールとジャックも一生懸命に長い棒を以つて、近くの破れ屑を押

除けて居た。

猛烈な戰ひは殆ど一時間ばかり續いたが、時が經つに從つて敵の勢は增々强くなるばかりである。ガスパルは組打でもする樣に水を切り、或は人の胸を刺すが如くに丸太で水を突いたけれど、水は平然として、相變らず頑固で何の手疵さへ負ふ事が無い。ジャックとピエールは到頭疲れ切つて屋根の上に坐つて了つたが、ガスパル一人は猶も此處を最後と戰つて居る中に、急流は彼の手から丸太を奪ひ取つて、其れを私達の方へ投付けた。最早や戰ふ事も出來なくなつた。

マリーとベロニックは互に腕を取合ひ、聲も亂れて同じ語を繰返して居る——

「死に度くねえだよ。死に度くねえだよ。」此の恐怖の聲は反響をなして止む時なく私の耳に響くのである。

娘の母なるローズは二人を抱いて、云ひ慰め樣としたけれど、遂には其の身も顫へながら眞青な顏を振上げて、我れ知らず聲高に、

「死に度く無えだよ。」と叫んだ。

叔母アガートのみは靜然と默つた儘、今は手で十字を切つたり祈禱を爲る事も止めて了つた。何やら決然した樣子で其の眼を遠くの彼方へ注いで居たが、私の眼と出會ふ時には、猶も嫣然笑はうと試みる。

水は瓦を嘗め始めた。今は何の救助も來ないで有らう。私達は尙寺院の方から漏出る人聲を聞くのである。提灯が二個ばかり、遠くの方に輝いて居たけれど、少時の間に、漫々たる濁水の面は一層物寂しくなつて了つた。サンタンの村人は確に救助船を出すと思ひの外此の洪水には恐氣立つて了つたに違ひ無い。

ガスパルは猶も屋根の周圍を歩き廻つて居たが、俄に私達を呼んで、

「おうい。皆な手傳つて下つせい。可えか、私の身體をしッかり掴まへるだよ。」

彼は又もや流過ぎる材木を掴えて居て、何やら靜に浮いて來る恐しく大きな黑い物を待構へて居た。何かと思ふと、それは何處かの小屋の廣い丈夫さうな板屋根でそッくり崩れ落ちた處から、丁度筏の樣に浮いて居るのである。手が達く程に近付いて來ると、ガスパルは其れを捕へたが、身體までが一緒に引摺られて行きさうなので、彼は私達の助を呼ぶ。

私達はガスパルの腰をしつかりと捕へた。然し屋根の破片は急流の中へ進み入るや否や、突如私達の屋根の方へ突進して來て、非常な勢で衝突り、最う粉微塵になつたかと思はれた。

けれどもガスパルは、此の舟が斯うして私達の方へ達いたのは天の助だと、大膽に其の上に飛乘り、歩廻つて先づ其の丈夫さ加減を確めて居ると、ジャック、ピエールの二人は屋根の端で其の舟を引止めて居たが、軈てガスパルは笑ひ掛けて、聲高く、

「お爺さん。最う大丈夫でがすよ。姉さん達も最う泣かつしやる事は無えだ。見さつしやい。私の足は最う些とも濡れては居ねえだ。宛然眞實の舟見た樣だから、皆な是れさ乘つて行くでがす。私や最う家に居る樣な心持に成つてるだ。」

而して、此の上にも丈夫にしやうと、彼は折よくピエールが持ち合して居た繩を受取つて、猶種々の材木を縛り付け、漸く仕事を仕上げると一度船の外へ出たが、直樣引返して、私達一同の驚き喜ぶ聲に答へて、

「ガロン河と私とは懇意な中でがすよ。私は能く一時間に一里も泳いだ事が有たゞもの。」

と打笑つたが、軈て又屋根の上に上つて來て、「さア、船へ乘らつしやい、愚圖々々して居

る時ぢや無えだ。」

女供は膝付いて居たので、ガスパルは先づペロニックとマリーを連れて筏の眞中へ坐らした。ローズとアガートは獨りで瓦の上を滑り下りて娘等と一緒になつたが、此の時私は再び寺院の方を眺め遣ると、エイメーは猶向の屋根に居て、高く赤兒を差上げながら、今は漸と烟突へ凭掛つて居たが、水は最う其の腰に達して居る。

「心配さつしやるな。傍を通る時に、私は屹度彼女を助けるだから。」とガスパルが云つた。

ピエールもジャックも既に筏に乘つて居るので、私も續いて飛び乘つた。筏は少し傾いだ樣に思はれたけれど、然し私達一同を載せて行くには大丈夫らしい。ガスパルは一番後から屋根を下りて、各自の者に一本づゝ棒を渡して、櫂の代用にする樣にと、自分は巧に長いのを使つた。彼は今一同の指揮者である。其の命令に因つて、私達一同は各自の棒で屋根の瓦を突き、いざ離れ去らうと爲たけれど、何の功も無く、筏は屋根へぴつたり固着いて居る樣に思はれた。如何に力を盡しても水の流が、屋根の方へと押返して了ふので、其の危險な事は新しい波の動搖を受ける度毎に一同を載せた筏は粉微塵に打碎かれは爲ぬかと危まれる。

再び、私達は到底最う駄目だと思つた。一時は大丈夫と考へたものゝ、私達一同は猶依然として貪慾な河水に隷屬して居るのだ。女供は矢張屋根の上に居た方が安全であつたらう。此儘では、今にも狂ふ水の中に攫はれて了ふに違ひないと思つたので、私は寧そ元の場所へ歸らうと云ひ出したが、すると、女供は齊しく反對した。

「最一度遣つて見て下つせい。其れでも不可えけりや、この儘死んで了ひますだよ。」

ガスパルは今は最う笑ふ處では無い。一同必死の勢で棒の上に乘掛り、力を合せて押したけれど、矢張何の功も無かつた。然しピエールは到頭何か考へ付いたと見え、再び元の屋根に攀上つて、長い繩で筏を左の方へと、潮流の外へ引出さうと試みたので、彼が重ねて筏へ乘移つた時には、私達は五六度押した丈けで、先づ漸と屋根を離れる事が出來たのである。

けれど、ガスパルは必ず哀れなエイメーを救下すと云つた以前の約束を記憶して居た。悲慘な彼女の唸聲は一時も止まずに聞える。と云ふものゝ、今や其の救助を成就させ樣が爲めには、是非とも恐しい急流の荒れ狂うて居る往來の上を横斷せねば成ら無い。ガスパルは私の心を聞き度げに、私の顏を眺めた。何と爲やう。私は今迄一度とて此樣に殘酷な

苦しい選擇の場合に其の身を置いた事は無かつたのだ。一人のエイメーを救はうとすれば、八人の生命を危くせねば成らぬ。私は多數の人命の爲めに好しや一瞬の間を躊躇ひ得たとしても、如何して此の儘エイメーの物凄い悲鳴を退ける氣力があらう。

「彼の娘を放棄つては行かれ無えだ。」私は叫んだのである。ガスパルは默然として頭を垂れ、猶崩れずにある土塀を便りに、其の棒を動し始めた。私達は家畜小屋の上を通越して、徐々と隣りの家の周圍を廻つて往つたが、往來の曲角を曲るや否や、一同アッとばかりに聲を上げた。急流は再び私達を引捕へて、元の屋根の方へと押返して了ふのである。

然し其れは實に一刹那の間で、一同アッと叫んだかと思つた其の聲は、瓦屋根に衝突した筏の碎ける響の爲めに打消されて了つた。

筏の板は粉微塵に飛散り、私達は一同泡立つ水の中に投込まれて了つたが其の後は如何なつた事やら。私は唯だ水の中へ落ちた時、叔母アガートが上着を着けた儘水の上に身體を長く横にさせて居るのを見た樣に覺えて居る丈けで。然し叔母は頭を後の方に投出して何の苦痛もなく靜に沈んで行つた樣である。

激しい痛さを覺えて、私は眼を開けて見ると、ピエールが瓦の端から私の頭髮を引捕へて居るのである、彼は手を放して再び水の中へ私を落した樣に思つたが、私は軈て弟ピエールの居た空場所に、今度はガスパルが居るのを見て、錯亂した心から不思議な事もあるものだと云ふ氣がした。若者ガスパルは腕に抱へて居たベロニックを私の傍に横臥して、又もや水の中へ飛び込み、而してマリーを引上げて來たが、其の顏の眞青に身體の堅く動ずに居る樣は、最う死んで居るのかと思はれた程である。三度彼は又水中に飛び入つたけれど、然し今度は空手で歸つて來た。ピエールは彼と一緒になつて何やら低い聲で話し合つて居たが、私には聞き取れ無い。二人は全く疲勞れ切つた樣子で屋根の斜面を上つて來た時私は叫出した。

「アガートの叔母さんと、ジャックとローズは如何したゞ。」

二人のものは首を振つて、大きな涙に其の眼を潤して居る。切れ切れな語で二人の云ふ話を綴合して見ると、ジャックは流れ過る材木に腦髓を打碎かれ、妻のローズは其の死骸に嚙付いた儘、一緒に押流されて了ひ、叔母のアガートはそれなり浮き上らなかつたとの事で、私達は叔母の死骸が急流に從つて、今頃は丁度私達の居る屋根の下の窓から、家の中へ這入つて了つたかも知れぬと假定した。

私は立上つて、少時前までエイメーが掴つて居た煙筒の方を振返つて見た。洪水は猶高まり行くのみで、彼女は最早や泣叫んでは居らぬ。水の上には唯だ堅くなつた腕がぢッと赤兒を差上げて居るばかりであつたが、其れも遂に衰れや、眠氣な滿月の光の中に漫々たる水は女の腕と二人の赤兒をさへ蔽ひかくして了つた。

第五

屋根の上の人數今は僅に五人となつた。水は屋根瓦の絶頂の極く狹い場所だけを餘すのみで、煙筒の一ッは既に流されて了つて居る。私達は衰弱り果てたベロニックとマリーを助起して其の足を濡さぬ樣眞直に立上らせねば成らなかつた。娘二人は漸うに氣を取返したが、濡れた着物でぶる〳〵顫へながら死ぬまいものと大聲に泣くのを見ると私達の苦痛は一層彌深くなるばかり、私達は大丈夫死ぬ樣な事は無いと云ひながら、赤兒を宥める樣に云慰めたけれど、然し娘は最う私達の云ふ事を信じなかつた。二人は其の生命の遠からず消去る事を知つて居るので有らう。「死ぬ」と云ふ語が葬式の鐘の音の樣に其の唇から漏落る時に其の齒はガタ〳〵顫へるのである。聲なき恐怖の念は娘同志の身體を犇と抱合さ

せた。

早や此れまでだ。彼方此方に崩れた土塀が、沈んだ村の在り場所を示して居る。寺院のみは獨屹然とした儘である。高く聳えた鐘撞堂からは、猶も逃込んだ人々の話聲が聞えて來る。遠くでは怒れる洪水の響の絶えず續いて居るけれど最早や路傍へ小砂利を打ちあげる樣な家屋の碎ける物音は聞えなく成つた。私達は宛然陸地から一千哩も隔たつた大海の唯中で難船したも同樣である。

折から私達の左の方に當つて、不圖水を打つ櫂の音を聞いた樣な心持がしたが、その音は靜な音律をなして次第に近く明瞭聞える樣である。何と云ふ望ある音樂であらう！　私達は不思議な水面の方に頸を傾け各息を凝したが何物も見えず、黃い濁水の面にはところどころ茫々とした影の樣な黑い物がまばらに斑點をなしてゐるばかり。樹の頂きや塀の破れた屑なぞ、其れ等のものは最う一つとして、動いては居らぬので、枯草の束や空の桶や材木なぞは一時の喜びを私達に與へた。一同手巾を振つたけれど、遂には其の見誤ひであつた事を知り私達は聞える物の響が一體何處から響いて來るのかを訝つて、再び心配の犧牲になつた。然しガスパルは突如に、

「見えるだ。一艘大きな船が――そら、彼處に。」と呼はりながら、腕を伸して遠くの方を指した。ピエールも私も何一つ見定める事が出來なかつたけれど、然しガスパル一人は頑固に如何しても船であると云張つた。やがて其の通り櫂の音は次第に明瞭して來て遂には其の形を見屆る樣になつた。徐に動いて居ながら然し少しも此方へ近付く事はなく、唯だ私達の周圍を廻つて居る樣に見える。私は其の時一同が殆ど狂氣した事を覺えて居る。私達は腕を振り聲を限りに打呼はり狂人の樣な譯の分らぬ語で舟を呼び、遂には其れを罵り卑怯とわめいたが、船は依然として靜に暗く、遠い彼方へと歸つて行く樣に見えた。眞實の船であつたか否か、私は話す事が出來ないけれど、兎に角到頭其れが去つて了つたのを見ると其の船は同時に私達の最後の望を運去つたと云ふ事を知つた。

最早や此の後は、家が潰れて水の中に呑まれるのを、今か〳〵と待受けるばかり、家屋の下の方は最う段々に崩れ掛つて來るのであらう、家は今やつと、堅固な壁一ッで支へられて居るに違ひ無い。その壁が崩れゝば家は忽ち沈んで了ふ。殊更驚かれたのは屋根が私達の重量で沈んで行く樣に思はれた事で。此の家も早や今夜一晩保つて行けるかどうか分らない。瓦は締りが無くなつて突付かる材木に破されて居る。私達は棟が少しはまだ丈夫

だと思はれた左の方へ逃寄つたが、併し其處さへも、若し私達五人の者が塊つて集つたら、直ぐに弱くなつて潰れて了ふに違ひ無い。

弟のピエールは少時の間又もや機械的に煙管を喞へ、濃い軍人らしい口髯を捻つて、何やら口の中に呟いて居たが、私達の四方四面を取卷いた災難は愈〻增して來るばかり。其れには到底敵對する事の出來ないと云ふ事は、いよ〳〵彼を激昂せしめたらしい。彼は兩三度怒つて輕蔑を以て水に唾きを吐付けた。而して、私達が次第々々に沈んで行くのを見ると、彼は決心した如く屋根の斜面を下りて行かうと爲た。

「ピエール。ピエール。」と私は何うする事かと喫驚して呼掛けた。彼は振向いて、

「左樣なら。私は最う面倒臭えだ。私が一人居なくなりやア、お前方の居る所が廣くなるだよ。」

靜に恁う答へた後、水の中へ煙管を投付け、其の身も續いて飛び込みながら、

「左樣なら。最う此れで可えだ。」と云添へた。

彼は別に泳がうともせず其の儘浮き上らなかつた。彼は一家の滅亡と、愛する人々を失した事に心を破られ、一人生殘る事を不本意に思つた處から、云ふまでも無く洪水の流れ

に、其の身を任して了つたのである。

寺院の塔から二時の鐘が鳴つた。此の如き苦悶と涙に滿された恐しい此夜も、殆ど深更を越えたのである。脚下の乾いた場所はいよ〳〵狹く成り行くばかりである。水は浩蕩として互に戯れつゝ抱合ふが如き漣波を起して、靜に漲り走つて居たが、軈て潮流は再び變じたらしい。今や洪水は其の最大絶頂に達し、疲れて、滿足して、休息しつゝあるが如く、種々な破損物は懶氣に村の右手の方へと運ばれて居た。

ガスパルは直に靴と上着を脱捨てたが、私は少時の間彼が腕を振廻し指を鳴して居るのを打目戍つた。軈て私の問に答へて、

「お爺さん。恁うして居るのは死ぬよりも辛えだよ。私は最うぢつとしちや居られ無え——私は此の娘を助けて遣るだ。」

彼はベロニックに其の趣を知らせて居るので私は到底娘を擔つて寺院まで泳ぐ事は出來まいと、事の道理を云聽さうとしたが、彼は頑固に云張つて、

「私は此の娘が可愛いだ——私は如何しても助けて遣るだ。」と繰返すのである。

私は默つて、靜にマリーを胸の上に引寄せたので、ガスパルは確に、私が心の中で戀と

云ふ彼の自己心を非難したとでも思つたらしく、

「私は屹度マリーを助けに歸つて來ますだ。」と呟いた。「何處かで舟を搜して、屹度、屹度助けに來ますだよ。」

短袴一ッの全裸體になり、急込んだ低い聲でベロニックに向ひ、腕かずに唯だ其の身を自分に任ね、猶決して驚かぬ樣にと、熱心に云聽すと、ベロニックは眤と男の顏を打目戍り、彼が一句云ふ語毎に聲の調子も枯果てながら、「はい〳〵」と答へるのである。

彼は平素信心深いと云ふ方では無かつたけれど、遂に十字架を畫く手振をした後、ベロニックの腕に繩を縛付けて、屋根から滑り下りると、娘は一聲アッと叫び、手足で水を打ちながら、最う息も絶え〳〵に成つたらしい。

「今こそ、私や此娘への恩返をするのだ。」とガスパルは大聲に叫んだ。

私は言葉に云へぬ苦悶を以て、進み行く二人を眺めた。白い水の上にはガスパルの遲々として動くのが見分けられる。彼は等しく其の身をも縛り付けた繩で、娘を支へ、右の肩の上に稍高く差上げて居たけれど、折々は死の重さがガスパルの身體を下の方に沈める事がある。然しガスパルは正しく人間以上の精力を以て泳いで行つたのだ。

二人は早や三分の一程の距離になつたので、私は漸と安心しかけた間もなく、彼は水面から隠れて居る塀の様な物に衝突つたと見え、二人とも見えなくなつたが、軈てガスバル一人立現れた。繩が切れて了つたらしい。再び彼は水中に飛入り遂にベロニックを抱えながら現はれて、今度は背の上に擔つたが、繩が切れてからは以前よりも猶更重さうに彼は下へ下へと押沈められた。然し、其にも係らず、彼は依然として進んで行つたので、最う一息で寺院に達し様と云ふ折から、私は二人の傍へと大きな材木の流れて來るのを見て烈しく其の身を顛した。私の口は開いたなり塞がら無かつた。——二度目の衝突に二人の身體は別々になり、何處へやら最う見えなくなつた。

丁度此の瞬間から、私は茫然自失して了つて、唯だ己れの身を隱さうとする動物的本能を保ち、水が其の身に觸る度毎に私は縮上るのみであつたが、此の前後不覺の中に、私は何處から來るとも知れぬ大な笑聲を聞付けた。日は正に廣大なる白い曙の中から起出でんとする處で空氣は何時も日出の直ぐ前に於ける時の通りに極めて心地好く、極めて新鮮しく、極めて靜であつた。然し笑ひ聲は猶鳴響いて居るので、振返つて見ると、マリーが濡れた衣服の儘私の傍に立つて居る。笑つたのは此の娘であつた。

マリーの姿は降臨する曉の中にあつて、如何にも美しく柔和に見えた。私は少女が身を屈ませ、手掌で少しばかりの水を掬取つて、顏を洗ひ、軈て又、黃金色なす頭髮を捻つて、頭の上に結んで居るのを見た。お化粧する心算なのであらう。鐘の音が嬉し氣に鳴響いて居る處から、彼女は狹い己が室の中に立戻つて、日曜日の朝寺院へ行く身仕度をする樣な心持であつたに相違ない。幸福な面持、穩かな而して鮮かな目容して、猶無邪氣な笑聲を續けて居た。

マリーの此の發狂は傳染性を持つて居たと見え、私も共々笑ひ出した。恐怖は遂に娘の心を錯亂さしたので有るけれど、彼女は今は唯だ、人目を眩すばかり美しい尋常ならぬ曙の色のみを知覺する樣に見えたので、其笑聲は正しく皇天より賦與された唯一つの惠であつたのだ。

私は何とも譯が解らずに、其の頸を頷付かせながら、靜に娘の樣子を打眺めて居ると、娘は猶も出掛ける時の用意をする樣に、化粧を凝した後、水晶の樣な透徹る聲で、日頃好める讃美歌の一節を歌ひ始めた。少時マリーは其の歌の聲を止めて居たが、恰も其身一人のみ聞く事が出來た天使の招に答ふるが如くに、「われは來れり、われは來れり——。」と呼

はつて、再び讃美歌を繰返しながら、屋根を下り、水の中へと進み入つたが、水は突當る事も動搖めく事もなく柔に優しく娘の身體を蔽うて了つた。私は幸福な滿足した顏色で、娘の見え無くなつた水の面を眺めながら微笑んで居たのである。

然し、其の後の事は最う覺えて居らぬ。水につかりながら、私は屋根の上に唯の一人となつた。一個殘つた煙筒が元の樣に立つて居る。私は唯死を拒む動物の如く、全力を注いで其の上に攀上らねば成らぬと考へた。然し、最う其の外の事は何にも——何にも知らない。何も彼も暗黑で空虛になつた樣であつた。

第六

如何して私は此處に居たので有らう！　サンタンの村人は六時頃に船を漕いで來て、烟筒に引掛つて、私が死んだ樣になつて居るのを見付け出したのだと云ふ話である。水は私が前後不覺になつて居る間に、私の愛した一家の者共と同じ樣に私の身體を持去つては吳れなかつた。洪水はそれ程までに無慈悲であつたのだ。

私——老耄れた爺——ばかりが頑固にも生殘つた。纏布に包まれた儘の幼兒や、若い娘

と其の慕はれた男、若い夫婦、其れ等は皆死んで了つたのに、私は丁度石の中から根を生して居る汚ない乾いた雜草の樣に生伸びたのだ。若し勇氣さへあつたなら、私も弟のピエールが爲した樣に、「左樣なら。最う可えだよ。」と云つて、皆の者が流された後につゞいて、ガロンの河水へ身を躍らしたで有らう。私は最う一人の子供さへ無い身の上で、其れのみか家は破壞され、田地は荒されて了つた。噫！　私達一家が年長の者を眞中にして、若い者は列をなし、食卓の周圍に坐つた時の幾宵、一同の喜びは私の血を暖かにした！　穀物と葡萄の收穫をする大事な日には一家一緒に勞働し富の傲りに昂然として夕暮家路をさして歸つて來た！

老後の樂みとして、私の全生涯に於る生きた報酬なる立派な子孫や、美しい葡萄の樹、さては愛らしい娘や黃金色なす穀物なぞ！　有りと有らゆる物は、皆死に且つ消えて了つた。噫！　神よ。神は何故に私の生命ばかりを奪はなかつたのであらう！

最う何の樂しみも無い。何の助けも無用である。私は子孫の有る村の人達に、私の地面を與つて了はう。子供の有る人達は土地を綺麗に掃除して、更に新しく耕す氣力を持つて居るだらうが、子孫の無い一人身は死んだ時に葬らるべき唯だ一隅の地を要する丈けであ

る。

私は最後の思出として一ッの願望を持つて居た――それは親愛なる一家の者供の死骸を見付け出して、何れは同じく私の身體をも埋める墓場の石の下に葬り度いと云ふ事である。私は河水に洗去られた澤山の死體が、ツールーズの街で發見されたと云ふ事を聞いて、其れを見にと出掛けて行つた。

今まで此樣に物凄い有樣が又と有つたであらうか？　家屋の破壞れたのが殆ど二千戸、人の死んだのが七百人、橋と云ふ橋は盡く流されて了ひ、街中は何處も一面泥塗れである。目も當てられぬ悲劇は、殆ど二萬人と云ふ人數が半ば裸體で、餓死しやうと爲て居るのみか、葬られずに在る死骸の惡臭で、街には最う窒扶斯が流行しやうと云ふ始末。到る處の悲鳴、到る處の葬式。如何なる施物も此れを鎮める事が出來ぬと云ふ程の慘狀である。私は他の者には目もくれず、其等の滅亡した人々の中を走つて行つたが、然し又私自身の愛する家族の死を思ふ時には、覺えず身體がすくむ樣であつた。

人々は發見した澤山な死骸をば、長く並べて既に墓地へ埋めたと云ふ事を私に告げたが、姓名抔の詳かで無いものは豫じめ寫眞に撮つて置かれたとの事で、私がガスパルとベロニ

ツクの姿を見付け出したのも、眼の前に差示された此の悲慘な肖像の中からであつたのだ。二人の戀人は猶一心に抱き合うた儘である。二人は死に至るまでも互に接吻し合つたのであらう。口と口とを押付け、腕と腕とを組合せて居たので、其の手足を捻折つて了はねば、到底別々にする事が出來ないと云ふ程、犇と嚙付いて居た。其れ故二人は一緒に寫眞に取られ、そして一緒に泥土の下に葬られたのだ。

此の愛しい若いもの共の痛しい肖像が、凡ての終である。二人は水に呑まれて見る影もない有樣に成つたけれど、猶勇しい愛の名殘を鉛色した其の顏の上に留めて居た。私は二人を眺めてさめ〳〵と泣いた。

洪水　終

エミールゾラと其の小說

一

余は今、文豪ゾラの人物と其の著作に對して、敢て何等の評論を試んとするものにあらず、恰もゾラ、其の人の小說が有りの儘なる人生を寫出せしが如く、余は余の知れる限りの範圍に於て、ゾラは如何なる人物にして、如何なる小說を書きしや、唯忠實に其人の行實を記載せんとするのみ。

ゾラ、名をエミールと云ふ。一八四〇年四月二日佛京巴里に生れしが、其の父は伊太利人にて貧しき土木技師たりしを以て、南部プロワンス州の或る運河工事に雇るゝや、三歲の時より父母と共に、同州のエイキスに住したりき。七歲の時父は死亡し、家計は頗る困難の狀態に陷りしかど、幸にも溫き慈母の手に養はれ、十八歲の青年たりし時（一八五八年）再び巴里に出でて、Lycée Saint-Louis に入り、同校を卒業したり。

されど此の時に當り、家計は益々困難を極め、彼は貧苦と不安の中に爲す事も無く二個

年を送らざる可からざりしが、漸くにして亡父の友人の周旋を得てアシェット出版會社の書籍發送係に雇はれ、月給二十五法を得たり。ゾラが初めて詩作の筆を把りしは、實に此の忙しき業務の餘暇にてありしなり。彼は此の當時、純然たるロマンチズムの崇拜者なりしを以て Lamartine, Byron, De Musset 等の諸家を喜び、殊にビクトルユーゴーに於けるや、彼は單に愛好するのみならず、眞實の熱情を以て此れを崇拜し、其の詩は悉く暗誦し居たりしと云ふ。

彼は此の如く、會社の業務を濟ませし夜間、及び日曜日に於て、全く文學的生活に耽りたりしが、軈て一箇年程を經たりし時、或る土曜日の夜なりき。彼は其の雇主なるルイ・アシェットの机上に L'Amoureuse Comédie（愛の喜劇）と題するダンテ風の詩篇三章を載せて歸宅したり。雇主アシェットは此に初めてゾラの詩才の尋常ならざるを知り、程なく彼を擧げて秘書役となし、年俸三千法を給するに至りしが、彼は又ゾラに向つて、詩人と商人とは到底兩立して成功し得べきものならず、將來に於て必ず其の何れかを選ばざる可からざる事を說けり。

ゾラは未だ文筆を以て衣食すること能はざりき。貧困なる已む無き事情は、未來の大小

説家をして一商人たるべしと決心せしめぬ。彼は孜々として能く其の業務に勉めたりしかど、其の文學に對する激しき情熱は遂に此を沈滅する事能はず、一八六四年即ち二十四歳の時なり、彼は Les Contes à Ninon と題する短編小説集を公にし、續いて其の翌年には La Confession de Claude（クロードの懺悔）なる小説を出せしが此の二編は意外なる社會の注意を惹き、ゾラをして漸く文學界に其の身を投じ得べしとの自信を確固たらしめたり。

彼は年少の鋭氣に乘じ、大なる果斷を以ていよ〳〵實務界を去らんと決心せり。「クロードの懺悔」出版後の翌年（一八六六年）彼は新に爲し得たる名聲を以て、巴里 Figaro 新聞の記者たらん事を望みしが、恰も好し、同新聞の主筆アンリー・ド・ヴィユメッサンは英才を用ゆるに吝ならざる人なりしを以て、ゾラは直ちに文學評論記者となるを得たり。

此の間彼は新に又一小説を創作せり。乃ち Thérèse Raquin（女主人公の名）と題せるものにして、「アルチスト」なる一新聞の紙上に連載したる後一八六七年一卷となして出版せしが、此の一編は姦通、殺人等、人生の最暗黑面に向つて試みたる深刻緻密の描寫によりて成功し、いよ〳〵彼が名を高からしめぬ。

されど、彼は間もなく「フィーガロ」新聞を退社せざる可からざる場合となれり。彼は藝術に對して自ら信ずる自然派の立場より、繪畫展覽會の批評に於て、激しく舊派の理想畫を攻擊し、果ては佛國の有名なる古畫に向つてさへ、大膽なる痛罵を試みしかば、忽ち社會攻擊の中心となり、爲めに其の記事は中止せられ、彼は遂に同新聞を解雇せらるゝに至りしなり。貧苦は再び彼が身を襲ひしかど、毫も屈する事なく、更に幾多の新聞社に入り、飽くまで自己の信ずる主義の爲めに戰はんとせり。然れども其の議論の餘りに激烈なりし爲め、何れの新聞社にも長く留る事能はざりき。此に於て、彼は遂に論議の筆を捨て、自己の小説中に於て、憚る所なく其の主義を發表せんと決心するに至りぬ。然り、論議に失敗せる彼は、小説家として大なる成功をなすに至りしなり。

二

抑も彼が少年時代の「ロオマンチズム」と別れて、自然主義を奉ぜし時代は、佛國の若き藝術家は皆多く此の主義に傾きつゝありし時なり。佛國文壇に有名なるフローベール、ゴンクール等の小説家は、自然なるものを自然の儘に描寫する事を以て眞に藝術的價値あ

るものと叫べり。彼等は偏僻なる想像を以て理想化せられたる人生よりも正直に有りの儘を寫し出せしものこそ却つて人生其のものゝ眞實を發揮せるものなりと稱し、如何なる罪惡の行爲も猥雜の事件をも憚る所なく寫出しつゝありしなり。

繪畫の方面に於ても同じく、セザーン、マメーなど呼べる新派の青年畫家は激しく舊派の理想畫を攻擊しつゝありしが、ゾラは此等の若き美術家とは殊に交り深かりき。

ゾラは伊太利人なる其の父より南方人の情熱を受け、佛國北部の人なる其の母より北方人の固質を受け、一種强烈なる性情を有せしが故に、能く友人等の代表者、自然派の首唱者となりて、此くは烈しく論戰の地に立ちたりしなり。自己の信ずる藝術の爲めに、ゾラ程熱心に勇敢に戰ひしものは、古今に其の例少しと云ふも、決して誇張の言にあらざるなり。彼は終生其の信ずる自然主義を奉じて動かざりき。

ゾラ、已に新聞社を退き、再び小說の筆を取らんとするや、彼はこゝに多年計畫したる願望を實行せんとせり。大なる著作に從事せんには貧苦に追はるゝ事なく田園に生活し、心安く筆を取らざる可からず。彼は先きに Les Contes à Ninon, Thérèse Raquin 等を出版せしめたる出版商ラクロワを訪ひ、十年間の契約にて一年二册づゝを出版し、每月百法

を得ん事を申出でたりき。ラクロワは當時ヴイヴイエン街とプールバール・モンマルトルとの一隅に書籍店を構へたる有名の出版商なりしかば、容易に彼が申出でを承諾せり。ゾラは此處に於て始めて其の夢想せし著作の生涯に入る事を得たり。十個年契約の大著作とは何ぞ。即 Les Rougon-Macquart と題せるものにして、ゾラは佛蘭西第二帝政時代に於る社會百般の狀態を寫すべき目的を以て、Histoire Naturelle et Sociale d'une Famille sous le Second Empire（第二帝政時代の一家族を自然的及び社會的に記述したる物語との意味）と標註せし一連の大小說これなり。

この叢書は La Fortune des Rougon に發端を起し、Le Docteur Pascal に至るまで、二十卷の大部となりしが故に、豫定の十箇年を倍して足らず、實に二十五箇年の長日月を要したりしなり。乃ちゾラが二十八歲の青年たりし時より、五十三歲の老境に及びて始めて完成し得たる大著作なりとす。此の一點に於ても、ゾラは尋常一樣の小說家にあらず、眞に畏敬すべき猛烈なる精力を有せし人なりしを知るに足る。

吾人をして暫く此の叢書に付いて語る處あらしめよ。

三

「ルーゴンマツカル叢書」二十卷はゾラをして世界の文壇に、全く動すべからざる勢力を作らしめたるものなり。彼は此の叢書に於て、所謂ゾラの自然主義を遺憾なく發表し、人類遺傳の法則に基きて描き出せる人間社會の一大活畫を作りぬ。彼は叢書の發端なる「ルーゴンの運命」の序に述べて曰く、

「余は一家族、即ち人間の一小團體が漸次繁殖し行くに當り、其の社會組織の上に於て、各自が如何に其の身を處しつゝあるやを表示せんとす。一見すれば各個人は甚だ相異れるが如くなれども、元と一血族より出でたる各個の人間は、分析學が證明する如く親和力の學理に照して、密接に類似せるものあるを見る。遺傳は引力と等しく即ち自然の法則なり。

余は人の性情と其の周圍の狀態との二重なる問題を研究するに當り、數理的に各個人の間に置かれたる連鎖を發見し、是を探究する事に努めずんばあらず。而して他日余が自らの多くの家族を有し、其の連鎖を自己の手中に得たる時、精密なる數時期に分類し、各個人の意志、及び一家族全體の傾向を描寫すべし。

此處に余が研究すべく提出せし、一團體一家族なるルーゴンマツカル家の一大特性と稱すべきは貪婪なる欲望にして、これ乃ち快樂を追究せんとする現代一般の一大現象たるなり。生理學的に云へば、ルーゴンマツカル家は血統並に神經系統上の事件の連續を示せるものに過ぎず。抑も最初一個人の受けたる神經機能の損傷は一家族中に遺傳し、其の周圍の狀況に隨ひ、各人の感情、願望、情慾を決定す。かの道德と云ひ不道德と云ふ者、全く是の本能的現象に外ならざるなり。

ルーゴンマツカル家は屢々近代の混沌たる社會に於て見るが如く、最初下層社會の一部より起りて、漸次繁榮活動する者とはなりしなり。即ち此の一家の活劇はナポレオン第三世がクーデターの曉に始まりセダン砲塞陷落の時に終る。余は三年間此の著作に必要なる記錄を蒐集したり。而してナポレオン帝の沒落は此の著作を潤色せんが爲めに借り來りし事實にして、全篇に對して確かに恐懼すべき光景を添へ得たりと信ず……。」

吾人は是によりて、「ルーゴンマツカル叢書」全體の主義及其の如何を想像し得べし。

前章已に述べたるが如く、ゾラが最初此の大著作を思立ちしは實に二十八歲の時なりき、而してその發端 La Fortune des Rougon に筆を下せしは其の翌年(一八六九年)夏の初め

にして、當時巴里にて勢力ある社會黨の新聞 Le Siecle（現世紀）の紙上に連載されしが、一卷となして出版せんとするに當り、恰も普佛戰爭の開始に遭遇し、後れて一八七一年の年末に至り、漸く出版するを得たりしなり。

「ルーゴンの運命」出でて後、叢書は追次卷を重ねしに關らず、未だ廣き世界の文壇に向つてはさしたる評判なかりしかど L'Assommoir 及び Nana の出づるに及んで、毀譽の聲は一時に湧起れり。ゾラの名は恰も當年のバイロンの如く、忽ち世界に喧傳せられたりき。

四

今、何れの一篇にても、試みにゾラの小說を取つて、仔細に其の事件の成行を研究し見よ。必ず一ッの定まれる徑路ありて、主人公の運命は、是を圍繞せる幾多の事情に伴はれつゝ、知らず〳〵此の怪しき路を辿り行き、軈て必然的なる自然の結果に到著すべし。ゾラは自己の設けたる小說中の事件に對して、猥りに自己の想像を加ふる事を許さゞるなり。篇中の主人公は如何なる性格を有せしや、其の性格は如何なるものに因りて形造られしや、其の血統、其の成長せし家庭、其の境遇、其の習慣、其の職業等、彼は實驗的に、科學的

に、悉く是れ等百般の事項を調査し盡せし後ならでは、決して筆を下さゞるなり。彼が小說を書かんとする時の苦心は、他の作家の如く、如何なる面白き事件を設くべきか、如何なる人物を描くべきか、而して如何なる事件より書き始むべきか抔云ふ點にはあらずして、唯だ人物の性格及び其生活の狀態に關する調査研究の一事なり、彼は劇場、料理店、或は牢獄等、若し其の編中に於て描き出さゞる可からずと信ずる事あれば、先づ幾度となく其の場所に赴きて徘徊彷徨し、少くも二三箇月間は熱心に研究觀察す。此處に於て、彼が一度筆を下さんとするや、書く可き編中の事件は已に謀まずして彼が腦裏に定められつゝあるなり。彼は直接の觀察によりて得たる所の活きたる記憶を呼起しつゝ筆を進むるなり。彼れは是れを以て、其の描ける人生は空想の人生ならず、直ちに是れ活きたる眞實の人生なりとなしぬ。

此の如くゾラは大膽なる寫實の筆を振つて、人類の慾情及び罪惡等をも忌憚なく描き出せしかば、一方に於ては、幾多の崇拜者模倣者を得、又一方に於ては恰も蛇蝎の如く嫌惡せらるゝに至れり。彼は世界の文學を墮落せしめたりと罵しられたり。彼は恥づべき目的の爲めに殊更に猥褻なる事件を描き出せりと謗られたりき。然れども、ゾラは堅く其の所

信を動かさず、遂に一八九三年に至り、「醫師パスカル」を出版して、長き「ルーゴンマッカル叢書」を完成したりき。

此の叢書は凡て第二帝政時代に於る社會の暗面を描破せしと雖も、其の中 Le Rêve（夢）及び Germinal（人名）の如き、可憐にして又光明ある著作なしとせず。吾人は今、一々に「ルーゴンマッカル叢書」の梗概を記するの暇なければ、唯だ其の題目と篇中人物の重なる血統を示すに止まるべし。

Les Rougon-Macquart	（ルーゴンの運命）
La Fortune des Rougon	（獵犬の餌）
La Curée	（巴里の市場）
Le Ventre de Paris	（プラサンの勝利）
La Conquête de Plassans	（僧ムーレの破戒）
La Faute de l'abbé Mouret	（ユージェーン・ルーゴン閣下）
Son Excellence Eugène Rougon	（居酒屋）
L'Assommoir	

Nana	（女優ナナ）
Une Page d'Amour	（戀の一頁）
Pot-Bouille	（瓶）
Au Bonheur des Dames	（勸工場）
La Joie de Vivre	（人生の快樂）
Germinal	（主人公の名）
L'Oeuvre	（製作品）
La Terre	（土壤）
Le Rêve	（夢）
La Bête humaine	（人間の獸性）
L'Argent	（金錢）
La Débâcle	（瓦解）
Le Docteur Pascal	（醫師パスカル）

以上の二十卷中に現はれたるルーゴンマッカル家の血統は、最初瘋癲病に罹りたるアデ

ライド・フックなる女性に始まりて、三流に分れしものにして、第一はルーゴン家、第二はマツカル家、第三は女にしてムーレ家の血統を起したり。

此の三血統の中最も怖しき酒毒の子孫に遺傳し行きしは、第二のマツカルが血統とす。女優ナナは實に此の血統より生れしなり。

「ルーゴンの運命」及び「醫師パスカル」中に描かれたる飲酒漢マツカルなる者の一少女をゼルベイズと云ふ。ゼルベイズはランチエーなる情人と共に父マツカルを捨てゝ巴里に來りしが、情人に見捨てられし後、クーポーと呼べる鐵板職工を夫とし一女を設たり。此れ卽ちナナにして、此のゼルベイズの哀むべき一生涯と、夫クーポーが酒精中毒に斃るる顚末を描きしもの、此れ有名なる「ラツソンモアール」篇となす。

ナナの生れし時、母ゼルベイズは巴里の或街にて洗濯商を開業し、父も又勤勉なる勞働者なりしが、惡友に誘惑せられ次第に飲酒の快樂に耽り、遂に發狂して瘋癲病院に送られ、ゼルベイズも今は久しき生活の勞苦に堪へず、屢々飲酒の惡行を敢てするに至りたりき。娘ナナは兩親より遺傳されたる酒毒と瘋癲の血統を引受け、心と肉との兩方面より生れながらにして惡德の兒たりしなり。彼女は最初花造りの女工となりしかど、忽ち一紳士と密

通して、貧苦に惱める父母を見捨て何時とはなく踊り娘の群に入りて榮華に耽らんと欲したりき。

猶、ナナと同じ血族の中にては、巴里の美術界を描きたる「製作品」の主人公畫家クロードの如き、殊に最も怖しきは、「人間の獸性」の主人公のジャックのあるあり。ジャックは機關車の運轉手なりしが、酒毒と瘋癲性の遺傳は、遂に一種の色情狂と變じ、彼は喜んで情婦の肉を屠るに至れり。

是れに反してルーゴン及びムーレの血族中には堅固なる意志と猛烈なる情熱を以て、事業の上に成功せる野心家少なからず。卽ち、「ユージエーン・ルーゴン閣下」中の主人公が政治家として內閣の大臣に列せられたる、「獵犬の餌」篇中のアリスチード・ルーゴンが相場師として莫大なる富を掌握せしが如き、或は「勸工場」篇中の主人公オクターブ・ムーレが無一物より身を起して、巴里の中央に呉服小間物の大商館を築き上げたるが如き是れなり。

五

一八九三年、ゾラ五十三歳にして「ルーゴン マッカル叢書」を完成するや、續いて Les Trois Villes(三都會)なる著作を公にせり。卽ち Lourdes. Rome. Paris の三卷とす。

此の「三都會」中に現れたる作者の精神は、形式に流れし浮薄なる現代の宗教——殊に加特力教の儀式を根柢より破壞し、人間自然の性情に戻らざる新宗教、新社會を組織せんとするにあり。此に於てゾラの所謂自然主義は、ナナを描きたる當時の如き、云はゞ簡單なる目的のみには止まらざりしなり。彼は已に一個の寫實小說家以上の人物なりき。

「三都會」の主人公は巴里加特力教會に屬する篤學の好牧師にして、ピエール・フローマンと云ふ。彼は常に、腐敗せる加特力教の信仰の形式的にして、人類發達の初頭に於けるが如く、爾く淸淨ならざるを慨嘆し、自ら杖を曳いて、南方ルールド市に到り、諸國の巡禮者が、如何なる信仰を以て此のルールド市に集り來れるやを觀察せんとせり。彼は其の信仰の餘りに無意味なるに驚き且つ失望せり。是れ「ルールド」篇の大意とす。

牧師フローマンは更に東の方羅馬府に行きぬ。加特力教の大本山なるヴチカン宮中には

如何なる信仰ありしや。全歐洲の人民の生靈を支配せる舊宗教は、果して如何なる信仰の基に立てりしや。彼は再び凡ての望みを失へり。是れ「ローム」篇なり。

吁、彼は今那邊に於て、能く淸淨なる信仰を有する宗教に逢着し得べき乎。彼は絕望を擔うて空しく巴里に歸り來り、以前の如く牧師の任に當りしが、其の加特力教に對する信仰は全く動搖し始めたり。されど彼は猶斷然加特力教を捨つる能はず、良心と信仰の爭鬪は彼をして苦悶の極に達せしめたり。此にピエールは一人の兄を有したりき。彼は科學者にして熱心なる社會黨の一人なりしが、其の社會主義を實行せんが爲めに、爆裂彈の製作に苦心し、前途に橫はる廣大なる希望の中に安心しつゝ其の日を送りつゝあり。牧師は此の兄とは意見の合はざりし點より心ならずも久しく音信を絕せしが、最後の大決心は漸くにして牧師の胸を突き來れり。彼は思へらく人類の理想とする所は活動にして、活動は卽ち人類唯一の宗教ならずや。徒に心を舊宗教の爲めに苦しむるは眞に愚劣の極なりしと、彼は遂に決然立つて僧衣を脫し、勞働者の仕事着を纏ひて一女と結婚し、軈て一兒を擧ぐるに至る。是れを「巴里」篇となす。

ゾラは能く活き能く愛し能く働く事を以て、人生の本義となしたるなり。彼は絕體的に

科學の力を崇拜し、神の存在も、靈魂の不滅をも信となさず、罪惡に對する觀念及び神に對する思想を、一種の疾病、精神の錯亂となし、來世を望み、神に對する義務に苦しむものゝ如きは、人生の自然に逆らふものとなしたりき。人此世に生るゝや無邪氣なる事野の花の如し。先天的に何等の罪過を有するものならず。然るに彼の基督教は猥に罪惡の觀念を人間に與へ、人間を苦ましむ。憎むべく厭ふべきものならずや。疑惑に紊さるゝ勿れ。罪惡の觀念に迫めらるゝ勿れ。不信仰は敢て不幸を意味せず。生命の爲に忘りなく勞作せよ。勞作は至大の福音なり。蜜蜂を見ずや。花を探り蜜を集むる勞作は、苦痛にあらず。勞働其のものが大なる愉快を與ふるものなり、現在を慮り、現在を信じ、永遠の爲めに煩ひ惱む事勿れ。自ら能く生命の要求する所を滿足せしめよ。乃ち自然に從つて樂しく勞働しつゝ生活する事、此れ實にゾラが人生に於ける眞の幸福となせし所なりき。

「三都會」に續いて更に大なる有力の叢書は現はれたり。

Les Quatre Evangilles「四福音書」と題するもの此れにして、第一に Fécondité「繁殖」第二に Travail「勞働」を出版せしが、第三の Vérité「眞理」は乃ちゾラが最後の著作として其の死後に至りて公にせられたり。而して結末の Justice「正義」の一編や、吾人は僅に

ゾラが此の編に於て社會と人生に對する自己の信念の大結論を發表すべしと傳へられたるを聞き得しのみにして、一代の大文豪今や已に無し。世界の文學及思想界の大恨事にあらずして何ぞや。

「四福音書」は、是れゾラが自ら以て人生の四大主義とせし所を具體的に表現したるものにして、小說的結構の上に於ては前叢書「三都會」の後編とも見るべきものなり。「三都會」の結末「巴里」編に於て、主人公なる牧師ピエール・フローマンが宗教を捨てゝ勞働者の仕事着を着するや、其の妻マリーは寵兒を腕に抱きて、かの勞働と思想との都市に此の兒を獻ぐと云ふ結末の一段を受けて起れるもの乃ち「四福音書」の初編「繁殖」なりとす。

ゾラは自ら其の序に述べて曰く、

「繁殖は家庭をなすの基にして、家庭は都會の礎なり。市民なる觀念は國家なる觀念を生み、科學的意味に於る愛國的精神は更に廣き人類同胞の概念を生ぜしむ。此の三階段は實に人類發展の順序にして、第四者に至りては、猶遠き將來の理想に屬す。余は此の哲學的思想を具體せんが爲めに、一組の小說を著作しつゝあり。乃ち「繁殖」「勞働」「眞理」「正義」と題する四編此れにして、「繁殖」に於ては主人公を馬太、「勞働」に於ては路加「眞理」に於

ては馬加「正義」に於ては約翰と名付く。余が胸裏に描きし此の四人は、恰も基督の福音を傳導せし四人の使徒の如く、繁殖、勞働、眞理、正義の上に建設せらるべき將來の社會に向つて能く此等の福音を傳導すべし」と。

「繁殖」の一篇は其の題目の表示する如く、人類發達の第一歩に於ては必ず繁殖なかる可からざる事を說きしものにして、姦淫、殺兒、墮胎、及び巴里公立育兒院に行はるゝ罪惡の慘狀に對し、精細なる眞實の描寫を試み、一方に於ては、醜つて主人公馬太が營める兒孫團欒の好家庭を描き出して、兩々相對照せしむ。次篇「勞働」に至りては、前篇と同じきが如く、一方に於ては、貧富の懸隔甚しく不自然の極に達せし巴里の勞働社會を描き、一方に於ては、殆ど黃金時代の如き、彼が理想的の社會を對照せしめたり。

「繁殖」は一八九九年に出版せられたるが、云ふまでもなく此の大計畫は遠き過去に於て、夙に彼が胸中に描かれつゝありしなり。見よ、一八九六年彼が巴里フィーガロ新聞に寄せたる一論文中に於て、「十數年間余は絕えず一ッの小說的思想に驅られつゝあり。……されど余は其の一頁をも書き能ざるべし。……其の表題は Mastage と名付けられんか。……余は全身の熱情を驅り來つて、人生の權利の爲めに辯護する所あらんとす。」と、而して「繁

殖」の一篇中に散在して發見せらるゝ社會問題は、嘗てゾラが新聞紙上に於て論じたる所論と同樣のもの多しと云ふ。

されどゾラが「四福音書」の初篇を起稿せしは、ドレフュー事件の爲めに佛國を亡命し英國に放浪しつゝありし時なり。ドレフュー事件はゾラが傳記に無上の光彩を添へしめたり。世人の知る如く猶太人なるドレフュー大尉は、賣國奴なる寃罪の爲めに絕島に流され、其の家族は義憤の涙に暮れつゝありき。ゾラは正義の爲めに、眞理の爲めに決然立つて此の大疑獄を解決せんと欲し、J'accuse（余は非難す）と題せる大論文を公けにせしが、此れが爲めに彼は一八九八年七月十八日、ベルサイユの法廷に於て一年間の禁錮を宣告せられたり。彼は深夜自轉車に乘じて逃走し、窃に便船を得て、英國に來りしが、結局大尉ドレフューはゾラの爲めに、長く蒙りたる寃罪を雪ぎ始めて天日の光を仰ぎ得たりしなり。而してゾラは英國に放浪中サレイの村莊にて始めて「繁殖」の創作に著手し、ノルウードのクイン旅館にて稿を脫したりき。

吾人はゾラが全生涯の著作を通覽する時は、容易に、其の前半生の著作「ルーゴンマッカル叢書」と、後半生の「三都會」及び「四福音書」との間に於ける相異を發見し得べし。

前者「ルーゴンマッカル叢書」の全體に現はれたる思想の頗厭世的なるに反し、後者は大に樂天的傾向を有す。前叢書は悉く純然たる寫實小說にして、社會は現在如何なる點まで腐敗しつゝあるかを忌憚なく描き出せしに過ぎざりしが、後者に至りては、實に是れ小說的の體裁と結構とを有せる大哲學書ならずや。

ゾラは乃ち前者「ルーゴンマッカル叢書」に於て、吾人に幾多の腐敗と罪惡の實例を示したる後、其の斷案として後者の「三都會」「四福音書」に於て、大に吾人を敎へ導く所あらんとせしなり。

此の如く、此等の三大叢書は永遠にゾラの名を不朽ならしむる大著作なるが、彼はこの叢書以外に猶多くの著作を公にせり。左に其の著書の表題を列記し置くべし。

Thérèse Raquin（主人公の名）
Madeleine Férat（主人公の名）
La Confession de Claude（クロードの懺悔）
Nais Micoulin（主人公の名）
Contes à Ninon（短篇小說集）

Nouveaux Contes à Ninon（同じく）
Le Capitaine Burle（大尉ビュール）
Les Mystères de Marseille（馬耳塞の祕密）
La Voeu d'une morte（死女の誓）

以上は小說の重なるものにして、脚本としては、Les Héritiers Rabourdin. Le Bouton de Rose. 等あり。其他、彼が自己の信ずる自然主義を傳播せんがために、繪畫、音樂、演劇、文學等に關して試みたる、評論又尠しとせず、

六

余は已にゾラの經歷及び其の著作の大體を語り得たり。此處に此の記事を終る最後の一節として、彼は日常如何なる生活をなせしかを記載せざる可からず。

ゾラは身の丈け低くかりしが、筋骨は頗る逞しき方なりき。髮と髯とは色黑くして濃く、其の顏色は蒼白くして、深き縱横の皺を以て彫まれたり。陰鬱なる此の容貌は、心中常に深き憂愁を包めるが如く、又絕えず忿怒を感じつゝあるが如くにも見えたりしと云ふ。彼

は此の不愉快なる容貌に伴ひて、擧動又甚しく神經質なりしのみならず頗る談話に拙かりしを以て、自ら交際社會に出づるを好まず、宴會饗應等の招待は盡く此れを謝絶して受けざりき。從つて平素とても彼は友人を訪問する事さへ稀なりしが、是に反して一方ならず來訪者を歡迎せり。その最も親しくゾラを訪ひし者はドーデー、フローベール、ゴンクール、マネー等の小說家及び畫工なりしが、此の中フローベール、ゴンクール及び露國の小說家トルゲネフの三人はゾラと共に必ず毎月一回午餐の卓子を圍みつゝ藝術の談話を試み、興に乘じては半日餘りも卓子を離れざりし事屢〻なりき。

ゾラはかの「ルーゴンマッカル叢書」の著作によりて、出版業者より一定の報酬を得るや、親族等の係累なき一婦人（洗濯女工なりき）と結婚し、夏季をメダンの田舍家に送り、冬に至りて巴里の街に移り住めり。

彼が生活は靜寧にして而も單調の極なりき。毎朝牛乳とパンとを食し終るや、午前九時より午後の一時までを著作の時間となし、規則正しく必ず五頁をものし、豫定の期限通りに脫稿したる後は添刪する事甚だ稀なり、彼は毎朝此の仕事を終りて再び食事すれば直ちに快眠するを常とせり。一晝夜に少くも十二時間の睡眠をなさざれば、彼は決して精神爽

快たる能はずと云へり。而して夜間に至れば、午前の小說家は忽ち別人の如く一變し、校正及び新聞に寄稿すべき評論の筆を取るなり。

幾十年、彼が著作の生活は少しも其の調子を變ずる事なかりき。去歲一九〇二年「四福音書」の第三篇「眞理」を脫稿して、彼は夫人と共に巴里の家にありしが、寢室に設けたる煖爐の構造不完全なりし爲め、睡眠中炭酸瓦斯に冒されて絶息しぬ。噫、是れ實に一九〇二年九月二十九日夜の出來事にして、同じ室にありし夫人は辛くも醫師の手に救はれたりしが、此の大文豪の生命は遂に六十二歲を以て終りを告げぬ。

（女優ナナ梗概、洪水、エミールゾラと其の小說、三部合本明治三十六年九月新聲社出版）

エミールゾラと其の小說　終

荷風全集第一卷 終

昭和二年五月十二日改版印刷
昭和二年五月十五日改版發行

荷風全集第壹卷

著作權之章

定價金參圓五拾錢

著作者　東京市日本橋區通四丁目五番地　永井壯吉

發行者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　和田利彥

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　三秀舍

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂　振替東京一六一七番　電話大手(五)四二一〇番

31
834

終